

ヤマキサゴ *Waldemaria japonica* (A. Adams)

【選定理由】

愛知県では駒山(豊田市)と茶臼山(北設楽郡豊根村)の2産地のみで生息する。県内の他の地域には分布しない希少種である。駒山と茶臼山での生息数は極端に少なくはないが、生息地が限定的であり、当該地域の環境改変が行われた場合、直ちに県内での減少や絶滅に直結する種である。

【形態】

小形種であり、駒山の個体は殻長 9.0~9.5 mm、殻径 12.0~12.8 mm 程度、茶臼山の個体はさらに小形である。螺塔が低く、周縁は円く、殻質は比較的厚い。新鮮な個体では、繊細な成長肋が体層部に明瞭に認められる他、きわめて薄い殻皮が殻表を覆う。内唇の滑層は、殻底部に広く広がる。愛知県内には、赤色の殻の個体のみ見られる。蓋は石灰質で薄く、半月型である。軟体部は黒色で、細長い触角を有している。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、現在、豊田市の駒山と豊根村の茶臼山の2産地のみで生息が確認されている。

【世界および国内の分布】

本種は、日本固有種であり、国外には分布しない。日本国内においても、本州・四国・九州の一部地域のみで分布する。各地域で形状や特徴が変異し、多くの形態型を有している。

【生息地の環境／生態的特性】

駒山山頂部ではスギ植林の環境で確認される。周辺には広葉樹の自然林の環境が残存している。茶臼山においても山頂部の自然林環境で確認される。地上性種であり、林床の落葉堆積下などに生息するが、降雨時は、地表や低木の枝を活発に這い回る。県下では、駒山と茶臼山のみで生息し、生息範囲がきわめて限定的である。駒山と茶臼山では少なくはないが、多産するほどの大きな個体群は見られない。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、駒山と茶臼山のみで確認される。明確な減少傾向が確認されていないが、分布域は、きわめて狭い地域のみであり、開発や森林伐採などがあれば直ちに個体群減少につながる。

【保全上の留意点】

現在、駒山と茶臼山のみで生息が知られる種であり、2地域において本種の保護および本種が生息する森林環境の保全が必要である。2地域の個体間には形態差が顕著で、同種ながら遺伝的分化が大きい可能性があるため、両個体群を同一視せずに保護することが重要である。

【特記事項】

鳳来寺山自然科学博物館(新城市)に所蔵されている貝類標本(天野景従コレクション)中には、定光寺(瀬戸市)産の本種の標本が1個体存在している(駒山産と殻形状は同様)。天野コレクションには、採集日の記録がない他、1つの標本ラベルに複数箇所の産地が記入されるなど、少なからず標本管理上の問題点がある。定光寺産のヤマキサゴ標本に関しても、後に他者が記入した新しいラベルのみが添えられ、自身の愛知県産陸貝報告(天野, 1966)にも定光寺の記録がない。過去に本種が定光寺に生息した可能性を完全に否定することはできないが、分布の疑わしさを伴う記録とみなした。

【引用文献】

天野景従, 1966. 愛知県の陸貝相, 69-82.+2pls. in: 東海高等学校教育文化研究所(編), 研究紀要 第4集, 東海高等学校教育文化研究所, 名古屋.

【関連文献】

川瀬基弘, 2012. 愛知県豊田市に生息する陸棲軟体動物, 豊田市史研究, (3): (57) 122-(80) 99.

中山 清・山崎芳江・高阪元治・矢橋 真・河合秀高・木村とし・山田栄蔵, 1989. 東海地方の貝類現況報告(3), (14) 茶臼山 近辺(北設楽郡豊根村), かきつばた, (14・15): 14.

野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325 pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

矢橋 真, 1990. 東海地方の貝類現況報告(4), (17) 駒山(愛知県東加茂郡旭町), かきつばた, (16): 13.

(早瀬善正)



ベニゴマオカタニシ *Georissa shikokuensis* Amano

【選定理由】

愛知県下では、豊橋市の石巻山山頂部および嵩山(すせ)の石灰岩地だけに生息する稀少種である。同所では個体数も多く、現時点では個体群の減少傾向は認められないが、この地の狭い範囲のみに生息する生物地理学的にも貴重な個体群であることから、保護すべき種である。中部地方においても、石巻山・嵩山と静岡県西部の石灰岩地に局地的に分布する個体群であり、周辺地域には信頼できる分布および生息記録が殆ど認められないことから、きわめて重要な個体群である。環境省レッドデータブック(2014)では絶滅危惧Ⅱ類の種とされ、分布の不連続さや石灰岩地への狭い生息環境であることから、同様に絶滅を危惧されている(上島, 2014)。愛知県下では、現状では明確な減少傾向は認められないが、あまりにも狭い範囲のみに生息する種であることから、環境の変化が生ずれば、直ちに絶滅の危機に瀕する可能性が高い。そのため、全国的にも絶滅が危惧される種であり、生息地が局所的であることから、愛知県下では、絶滅の危険性の高い種に位置付けられる。

【形態】

成貝は、殻長2.3mm、殻径1.6mm程度の、淡い赤色でタニシ形の微小種である。殻は薄いものの丈夫で、各螺層にはごく細く繊細な螺溝が多数刻まれる。臍孔部は、軸唇の滑層が伸展して塞がれる。蓋は、種子形状の半円形で石灰質であり、内面下方内側に細く短い突起(peg)を有する。軟体は白色で、物の基部に黒色の小さな眼を有する。

【分布の概要】

【県内の分布】

豊橋市の石巻山山頂部および嵩山の石灰岩地だけに分布する(野々部・他, 1984)。

【世界および国内の分布】

日本固有種。栃木県葛生町会沢(宇津野洞窟入口付近; 1989.8.2採取)が、本種の最北東分布地である(早瀬・波部, 1991)。本州ではこのほか、愛知県(石巻山・嵩山)・静岡県(浜松市北区、浜北区、天竜区南部の一部の石灰岩地)(増田・波部, 1989; 加藤, 2019)、山口県(福田・他, 1992)に明確な分布地が不連続的に知られる。また、四国山脈から大分県にかけての石灰岩地での分布も知られる(神田, 1992; 財団法人 自然環境研究センター, 2010)。本州では、長野県飯田市和田にも本種の記録があるが、再発見されない(飯島, 2018)。さらに、岐阜県にも本種の分布記録が多く見られるものの、岐阜県の記録のほぼ全てが、石灰岩地に生息するゴマオカタニシの誤認記録となる可能性が高い。

【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、豊橋市の石巻山山頂部および嵩山の石灰岩地である。本種は、石灰岩露頭の石灰岩の表面の窪みなどに付着して生涯生息する、石灰岩地域固有種である。石灰岩に着生する藻類などを摂食するものと推測される。具体的に石灰岩の何に依存しているのか不明であるが、本種の生息には、石灰岩地および、そこに見られる石灰岩の露頭が不可欠である。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、石巻山山頂部および嵩山の石灰岩地だけに生息している種である。石灰岩露頭の岩盤表面に多数の個体が付着している。現時点では、大きな減少傾向は認められないが、近年の異常気象に起因する夏季の高温や豪雨などによる土壌の流出なども、今後、本種の生息環境に影響を及ぼす可能性は大きいものと考えられる。現時点では、愛知県下の個体群の減少傾向は確認されていないが、生息場所はきわめて狭く局所的であり、石灰岩地の乾燥化など、生息地周囲での環境の悪化などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

【保全上の留意点】

生息地の石巻山および嵩山は、石巻山多米県立自然公園に位置しているほか、石巻山山頂付近の「石巻山石灰岩地植物群落」は国の天然記念物に指定されており、生息地の環境は一応保護されている。

本種の生息が確認される石巻山山頂部および嵩山の自然環境を維持することが重要である。

【特記事項】

本種は、沖縄県に生息するフクダゴマオカタニシ *G. hukudai* Kuroda, 1960 と近縁で、姉妹群の関係にある(狩野・福森, 2016)とされる。南西諸島を主分布域とする種(フクダゴマオカタニシ)と本州・四国・九州の種(ベニゴマオカタニシ)が、きわめて近い種間関係に位置することは、南方を主分布域とするグループが、鳥などに運ばれ、偶然、生息適地にたどり着くことができた個体が個体群を維持したものと推測され、本州などに分散できた個体群がベニゴマオカタニシへと種分化した過程が推測される。

宮崎県には、県南部の1箇所だけにフクダゴマオカタニシが生息し、南西諸島から海流などにより運ばれてきたものと推測されている(西・西, 2018)。

【引用文献】

- 福田 宏・増野和幸・杉村智幸, 1992. 概説 山口県の貝類, 99 pp. + 50 pls. + xxvi. 山口県立山口博物館, 山口。  
早瀬善正・波部忠重, 1991. ベニゴマオカタニシ栃木県葛生石灰岩地に分布, ちりばたん, 21 (4): 93。  
飯島邦昭, 2018. 長野県産産・淡水産貝類誌, 160 pp. 自刊, 下條村。  
神田正人, 1992. 大分県産産貝類誌, 160 pp. 自刊。  
狩野泰則・福森啓晶, 2016. ゴマオカタニシ類の進化と邦産種の多様性, 日本貝類学会平成28年度大会(習志野) 研究発表要旨集, p.39. 日本貝類学会, 東京。  
加藤 徹, 2019. ベニゴマオカタニシ, p.467. in: 静岡県くらし・環境部環境局自然保護課(編), まよりたい静岡県の野生生物 2019-静岡県レッドデータブック-動物編>, 539 pp. 静岡県, 静岡。  
([http://www.pref.shizuoka.jp/kankyou/ka-070/wild/red\\_data03.html](http://www.pref.shizuoka.jp/kankyou/ka-070/wild/red_data03.html))  
増田 修・波部忠重, 1989. 静岡県産淡水産貝類相, 東海大学自然史博物館研究報告, (3): 1-82 + 3 color pls. + xiv pls.  
西 邦雄・西 浩孝, 2018. 宮崎県のカタツムリ, 149 pp. 自刊(黒潮出版), 宮崎。  
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋。  
上島 励, 2014. ベニゴマオカタニシ, p.259. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編) レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京。  
財団法人 自然環境研究センター, 2010. ベニゴマオカタニシ, p.733. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田。

【関連文献】

- 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi + 80 pls. + 343 pp. 保育社, 大阪。  
高知県レッドデータブック【動物編】編集委員会(編), 2002. 高知県レッドデータブック【動物編】高知県の絶滅の恐れのある野生動物, 440 pp. 高知県文化環境部環境保全課, 高知。

(早瀬善正)



石巻山山頂部, 上段: 2019年10月28日, 下段: 2008年7月9日, 木村昭一撮影, 採集

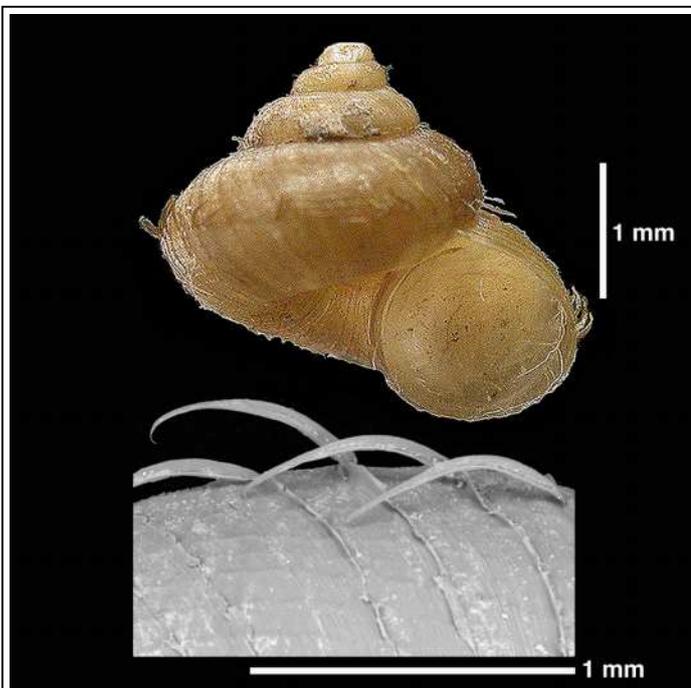
トウカイヤマトガイ *Japonia katorii* Minato

## 【選定理由】

豊橋市石巻山を模式産地とするヤマトガイ属の1種で、サドヤマトガイに類似するが、体層の毛状付属物は1列をめぐらすことで区別される。良く保全された自然林内の落葉下に生息するが、生息地、個体数とも少ない。

## 【形態】

殻は薄質で小さく、低円錐形。殻表は汚赤褐色で、螺層は5 1/2層で各層はよくふくらみ、螺官はゆるやかに太くなる。縫合は深く顕著である。周縁上に毛状の殻皮付属物を1列めぐらす。殻口はほぼ円く、殻口縁は薄くて肥厚しない。臍孔は多少小さくて殻径の1/5を占める。蓋は円形で薄く角質で多旋型である。殻高4.4 mm、殻径5.0 mmである。



豊橋市石巻山, 1996年6月23日, 木村昭一採集

## 【分布の概要】

豊橋市石巻山、鳳来寺山、新城市（旧鳳来町）乗本。県外では静岡県浜松市鷲沢町、鈴鹿山脈に分布することが知られている。

## 【生息地の環境／生態的特性】

石灰岩地や雑木林の倒木や腐木の下や落葉中に生息する。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

前記分布地に生息しているが、極めて稀産である。生息地の乾燥化の進行が減少の要因と考えられる。

## 【保全上の留意点】

生息地の倒木や腐木、落葉の保護に留意する。

## 【関連文献】

湊 宏, 1985. 日本産ヤマトガイ属の2種類. VENUS, 44 (2): 82-83. 日本貝類学会.

湊 宏, 1988. 日本陸産貝類総目録, p.8. 日本陸産貝類総目録刊行会.

(2009年版(原田)を一部修正)

スナガイ *Gastrocopta armigerella* (Reinhardt)

## 【選定理由】

愛知県内では、海浜部のきわめて狭い範囲内で確認されている。生息地周辺の環境は、既に大部分が護岸や道路・住宅などの人工物に置き換わっており、僅かに残された場所のみに本種が生息している状況である。県下の生息地は、荒地環境となっており、いつ人的な改変行為が行われてもおかしくない状況であり、本種の絶滅の危険度はきわめて高いと考えられる。

## 【形態】

殻長 2.0~2.5 mm 程度の微小種である。殻は白色半透明で、円筒状の形態である。殻口内に 7 本程の歯状突起が見られる。

## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

愛知県内では、明確な分布地としては、これまでに田原市江比間町(伊川津町の記述は誤り)(松岡, 2010)、海部郡飛島村(早瀬・木村, 2011)、知多市新舞子(早瀬, 2013)、豊橋市大山町・田原市伊川津町(西・他, 2017)、蒲郡市の竹島(伊藤, 2018)の6地域が知られる。

## 【世界および国内の分布】

韓国にはチョウセンスナガイの記録が見られるが本種の記録が見当たらない。日本国内のみに分布し、本州・四国・九州・先島諸島に至る沖縄までの広域に分布する。しかし、南西諸島を除き、生息地は限られており、本州における本種の確認地は、それほど多く知られていない。



上段: 知多市新舞子, 2012年10月8日, 下段: 海部郡飛島村, 2009年12月13日, 早瀬善正採集

## 【生息地の環境／生態的特性】

陸産貝類であるが、海岸の砂浜環境のみに生息する種である。海浜植物が生える砂浜と海岸林の林縁との境界部周辺にのみ生息する。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

伊勢湾奥に面した生息地においては、いずれも開発により生息環境が狭められ、生息範囲は、数メートル四方程度に限定されている。愛知県内の本種の生息環境は、周囲の環境開発により、砂浜環境というよりは、荒地環境と言える状態になっている。現状の生息地では、比較的多数の個体が確認でき、安定的な個体群が維持されているものの、当該生息地は僅かな面積であり、これらの場所の改変行為などが行われれば、容易に本種は絶滅してしまう。

## 【保全上の留意点】

生息地が限定されているので、環境を維持し、その場所の個体群を保護する必要がある。

## 【特記事項】

愛知県内では、石巻山(豊橋市)において、近似種のチョウセンスナガイが確認されている(永尾, 1997)。内陸でのスナガイの記録は、内陸部の環境でも生息することができるチョウセンスナガイの誤認記録と考えられる。愛知県に分布するチョウセンスナガイも、きわめて貴重な個体群ではあるが、発見時から明確な生貝の確認情報がなく、現状も情報が全くないため、対象種に扱っていない。しかし、県内で健全な個体群の生息が明らかとなった場合は、チョウセンスナガイも絶滅危惧種として扱う必要がある。

## 【引用文献】

- 早瀬善正, 2013. 愛知県におけるスナガイの新産地, かきつばた, (38): 53-55.  
 早瀬善正・木村昭一, 2011. 名古屋港周辺の陸産貝類相, 特に新たな外来移入種メリケンスナガイ(新称)について, ちりばたん, 41 (2): 48-59.  
 伊藤颯真, 2018. 竹島(愛知県蒲郡市)に棲息するキバサナギガイ科貝類2種, かきつばた, (43): 28-29.  
 松岡敬二, 2010. 第3章 愛知の生物 第4節 愛知の貝類, pp.246-276, in: 愛知県史編さん委員会(編), 愛知県史 別編 自然, 愛知県.  
 永尾和彦, 1997. (速報)チョウセンスナガイの新分布, かきつばた, (23): 22.  
 西 浩孝・芳賀拓真・松岡敬二, 2017. 三河湾岸におけるスナガイ(軟体動物門: 腹足綱: キバサナギガイ科)の新産地, 豊橋市自然史博物館研究報告, (27): 25-27.

## 【関連文献】

財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(早瀬善正)

ナニワクチミゾガイ *Eostrobilops nipponica reikoeae* Matsumura et Minato

## 【選定理由】

1997年の大阪府陸産貝類調査で発見された小型の陸産貝類である。栗飯原氏が1993年に大府市森岡町愛知健康の森で採集しており、その後の大規模開発で正確な位置が特定できないでいたが、河辺氏が1999年4月に、早瀬氏が1999年10月に大府市森岡町愛知健康の森付近のやや離れた地点で多産地点を確認した。クチミゾガイ科の貝は比較的珍奇で稀産である。



大府市森岡町 愛知健康の森, 2007年2月16日, 木村昭一採集

## 【形態】

貝殻は小型(殻高1.5~1.8 mm、殻径2.5~2.8 mm)で堅固、低いドーム形状の螺塔で底面は膨れる。螺層は約5層で緻密に巻き、縫合は深い。臍孔は狭く開き殻径の1/5に相当する。殻色は暗赤褐色で鈍い光沢がある。殻口は半月形で、内唇滑層は厚く、和名の元となった2本の体壁板が内部へ走る。

## 【分布の概要】

大阪府の淀川以北の高槻市、茨木市、箕面市等に分布し、淀川以南からは確認されていない。愛知県大府市森岡町愛知健康の森でも生息することが確認されたが、模式産地一帯に比べて生息密度が高い点でも貴重である。

## 【生息地の環境／生態的特性】

マツシマクチミゾガイの生息環境が淡水貝と間違えるほど水の滴る倒木下などであることに比べると、本種は陸貝の中でははるかに標準的である。

本種は標高20~80 mの丘陵地とその周辺のコナラ・クヌギ等の二次林の比較的乾燥した落葉下にみられる。しかし、落葉下部は適度な湿り気を帯びているところが多く、そこに本種が群棲している。従来のクチミゾガイ科の貝とは分布地がはるかに離れた西方地域で、しかも標高が低い丘陵地の二次林であること等、特異な種類である。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

大阪府北部及び愛知県大府市森岡に分布が限定されている。今のところ減少はしていないようであるが、場所的に開発の波に襲われやすい地域なので、それが心配である。

## 【保全上の留意点】

現在の生息確認地一帯のコナラ・クヌギの二次林を保護するように留意する。

## 【特記事項】

大阪府では絶滅危惧Ⅰ類に指定している。

## 【関連文献】

松村 勲・湊 宏, 1998. 大阪府北部で採集されたナニワクチミゾガイ(新亜種), *VENUS* 57 (1): 39-47. 日本貝類学会.

河辺訓受・大原健司・栗飯原一郎, 2000. ナニワクチミゾガイの新産地. *ちりぼたん*, 30 (4): 87. 日本貝類学会.

湊 宏・松村 勲, 2000. 陸産貝類. 大阪府における保護上重要な野生動物—大阪府レッドデータブック, p.254. 大阪府.

(2009年版(原田)を一部修正)

ナガナタネ *Columella edentula* (Draparnaud)

【選定理由】

北方系の陸産貝類であり、愛知県に分布する個体群は、生物地理学的にも貴重な存在である。愛知県内での生息範囲は限られており、希少な種である。県下の当該地域で開発行為などがなされた場合、本種個体群の存続が危ぶまれる。

【形態】

殻長 2 mm 程の微小種である。殻色は茶褐色。殻は砲弾型で殻表は滑らかな殻皮で覆われるが、不規則で粗い斜めの成長肋が現れる。キバサナギガイ類の幼貝の形状にも似るが、本種の方がより大型で螺管がより太く、実際に標本を用いた比較においては、識別が可能である。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では近年、分布が確認された。豊田市から岡崎市にかけての標高 350~550m 前後の山間部に分布が知られる (守谷, 2012)。

【世界および国内の分布】

ロシア~ヨーロッパ各国にかけて (Sysoev & Schileyko, 2009) の旧北区や新北区の北米 (Burke, 2013) まで、北半球に広く分布する種である。日本国内では北海道、本州、四国に分布する。

【生息地の環境/生態的特性】

愛知県下では、スギ・ヒノキ植林やコナラ (落葉広葉樹) の林に生息し、夏季には、低木や草本の葉裏で確認されている (守谷, 2012)。なお、葉裏に付着した状態で確認される個体は、成長途中のため、まだ螺塔の低い幼若個体であることが多い。

【現在の生息状況/減少の要因】

生息状況に関しては、上述の通りである。最近、愛知県での分布が知られたばかりの種であるため、減少傾向は判断できないが、動物地理区における全北区に分布する北方系種が遺存的に愛知県内に生息する点において、生物地理学的に重要な個体群である。生息数や生息地域も限定的であることから、今後、当地域での開発等が行われた場合は、本種への影響が懸念される。

【保全上の留意点】

目に付くことが殆どない微小種なので、分布地の環境の維持が重要である。愛知県内では、限られた地域の低山地に生息していることが明らかであるので、生息地の森林環境の保全措置を行うなどの環境への配慮が必要となる。この地域での開発行為等を行わないことが重要である。

【特記事項】

中部地方以南の分布地は特に少ない。本州南部の個体群は北方系要素の遺存的集団の可能性が高いとされる (上島, 2005)。なお、岡崎市のレッドデータブックでは情報不足種とされる (木村, 2014)。

【引用文献】

- Burke, T., 2013. Land snails and slugs of the Pacific Northwest, 344 pp. Oregon State University Press, Corvallis.  
木村昭一, 2014. ナガナタネガイ, p.330, in: 岡崎市(編), 岡崎市の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックおかしき 2014, 362 pp. 岡崎市.  
守谷茂樹, 2012. 愛知県に分布するキバサナギガイ類 2 種の生息環境について, かきつばた, (37): 50-51.  
Sysoev, A., Schileyko, A., 2009. Land snails and slugs of Russia and adjacent countries, pp.312+142 color pls. Pensoft Publishers, Sofia-Moscow.  
上島 励, 2005. 本州のナガナタネガイ, p.376, in: 環境省自然環境局野生生物課(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 6 陸・淡水産貝類, 402 pp. 財団法人 自然環境研究センター, 東京.

【関連文献】

- 財団法人自然環境研究センター(編), 2010. 自然環境保全基礎調査 動物分布調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(早瀬善正)



## ナタネキバサナギ *Vertigo eogea* Pilsbry

### 【選定理由】

山麓や平地の湿地環境に生息する種である。このような環境は、そのままでは人的に役立つ環境とみなされ、多くが土地造成や埋め立てなどにより消失した。愛知県内では、東部に古くから存在する湿地環境が現在でも一部地域に残存しており、僅かな環境に本種が生息している状況である。

### 【形態】

殻の色彩は茶褐色で、殻長 2 mm 程の微小種である。殻口内には、多数の歯状突起を有している。本州の同科の類似種は、歯状突起が 4 本のみであり、それらと本種との識別は容易である。殻表は平滑で、殻口外唇中央部が内側に浅く湾入し、殻口が若干、ハート型を呈する。

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

豊橋市 (野々部・他, 1984)、豊田市 (守谷, 2012)、設楽町 (早瀬, 未発表) などに分布が知られる。

#### 【世界および国内の分布】

日本列島およびその周辺に分布する。日本国内では、北海道、本州、四国、九州 (?)

に分布する。台湾に亜種 (*V. e. stagnalis* Kuroda, 1941) が知られるが、正確な種間関係については、今後の検討が必要であろう。

### 【生息地の環境／生態的特性】

ヨシ・ガマ類が生える水深の浅い湿地環境の水際に生息する。これらの湿地環境に隣接する水田の畦や休耕田の草地などで繁殖し、発見される場合もある。これまでに生態的な知見は全くないが、静岡市内の休耕田の環境では、春季に確認された本種の生貝が全て幼貝であった観察事例がある (早瀬, 未発表)。この事例より、本種は、冬季までに幼貝の加入があり、越冬し翌年成熟するものの、冬季には成貝が死滅するサイクルを繰り返す可能性が推測される。寿命が 1 年程度の種かもしれない。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

本種は豊橋市、豊田市、設楽町などの湿地環境に生息する。名古屋市など都市部を中心に開発が進み、湿地環境が激減した。湿地環境の消滅と連動して本種の個体群も消滅の危機にある。

### 【保全上の留意点】

湿地環境があれば本種が必ず確認されるという訳ではなく、特定の湿地環境のみに生息する。しかし、本種の生息を決定付ける環境要因は明らかでない。したがって、本種が生息する湿地環境については、人為的な改変行為が行われることを防ぎ、維持する事が重要である。

### 【特記事項】

最近、愛知県内では、国内外来種のウスイロオカチグサが各地で確認されている。ウスイロオカチグサは、本種より大型であり、生態的に同一の環境下に生息する。ウスイロオカチグサは、湿地の地表をグレーディングして有機物を摂食するが、特に微小な加入時の本種は、有機物と共に捕食される可能性が考えられる。実際に、本種の多産した湿地において、ウスイロオカチグサの増加と共に本種が消滅した事例があり (早瀬, 2008)、本種の生息地ではウスイロオカチグサの侵入を防ぐ必要がある。

### 【引用文献】

早瀬善正, 2008. 静岡市清水区能島遊水地におけるナガオカモノアラガイの生活史, 兵庫陸水生物, (60): 151-157.

守谷茂樹, 2012. 愛知県に分布するキバサナギガイ類 2 種の生息環境について, かきつばた, (37): 50-51.

野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325 pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

### 【関連文献】

上島 励, 2005. ナタネキバサナギガイ, p.189. in: 環境省自然環境局野生生物課(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 6 陸・淡水産貝類, 402 pp. 財団法人 自然環境研究センター, 東京.

(早瀬善正)



トノサマガセル *Megalophaedusa ducalis* (Kobelt)

【選定理由】

1979年に豊根村が動物調査を実施した際、茶臼山中腹の礫土の中から6個体が観察され、その後1991年に稲武町誌作成のための調査で面ノ木峠にて再発見された（木村・中根, 1996）。豊根村茶臼山が分布の東限であり、面ノ木峠はその南限である。その後、茶臼山でも面ノ木峠でも再発見されていない。

【形態】

殻高29~30 mm、殻径7~7.5 mmの中型のキセルガイである。殻の色はわら色である。殻口はやや広大で洋梨形、乳白の滑層で覆われる。月状襞はないが、上腔襞は短くつづいて数個が点線状で、下腔襞は短い。



稲武町面ノ木峠, 1991年10月22日, 木村昭一採集

【分布の概要】

県内では茶臼山と面ノ木峠が知られているのみである。県外では、石川県（白山）、岐阜県、福井県に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

礫土に落葉が被った環境で生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

県内ではその後再発見されていない。

【保全上の留意点】

生息確認地を中心とした樹林の保全に留意する。また、採集の防止に努める。

【特記事項】

県内は本種の分布南限に当たる。

【関連文献】

- 柴田吉夫, 1995. 北設山岳県立公園一帯の自然科学. 北設山岳県立公園及びその付近の陸産貝類, p.75. 愛知県商工部通商観光課・北設山岳県立公園地区協議会・鳳来寺山県立公園地区協議会.  
豊根の動物調査委員会, 1980. 貝類. 愛知県豊根村の動物, p.116. 豊根村.  
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 愛知の動物, p.28. 愛知県郷土資料刊行会.  
木村昭一・中根吉夫, 1996. 稲武町の軟体動物. 稲武町史 -自然- 資料篇, pp.119-126. 稲武町.  
東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, p.68. 保育社.

(2009年版(原田)を一部修正)

## ホソヒメギセル *Megalophaedusa gracilispira* (Möllendorff)

### 【選定理由】

近畿以西、中国、四国、九州に分布する小形のキセルガイで、豊田市足助町はその分布の太平洋側の東限である。

### 【形態】

殻高 9 mm、殻径 2 mm、9 層。円筒状の紡錘形で淡褐～黄白色。彫刻は強く密に現れる。殻口はやや傾斜し洋梨形。唇縁は広く反転し、微かに螺層から突き出る。主襞の殻外面上に溝がある。上・下腔襞の間に小さな腔襞が 2 個見られる。



### 【分布の概要】

県内では豊田市猿投山山頂と豊田市足助町 2 ヶ所の合計 3 ヶ所からしか見つかっていない。県外では、近畿、中国、四国、九州（北部）に分布する。和歌山県那智山、護摩壇山、奈良県十津川玉置山、徳島県桃源洞、香川県小豆島、福岡県豊前市犬ヶ岳等はその知られた産地である。

### 【生息地の環境／生態的特性】

大木の根元などの落ち葉の中、樹洞、朽ちた木や腐った木の屑の中から見つかることが多い。卵生である。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県では豊田市猿投山山頂と豊田市足助町 2 ヶ所の合計 3 ヶ所からしか見つかっていない。限られた環境にしか生息しないので、大木の根元などの落ち葉の中、樹洞、朽ちた木や腐った木の屑の中などの壊れやすい環境が整理されると絶滅する。

### 【保全上の留意点】

猿投山の山頂部等において、神社周辺の枯れた木、倒木、朽ちた木等の整理を避け、そのまま保全するように留意すべきである。

### 【特記事項】

県内の生息地は本種の太平洋側の分布東限である。

### 【関連文献】

湊 宏, 1994. 日本産キセルガイ科貝類の分類と分布に関する研究, pp.100-101. 日本貝類学会.

湊 宏, 1988. 日本陸産貝類総目録, p.72. 日本陸産貝類総目録刊行会.

守谷茂樹, 2004. 足助町でホソヒメギセルを確認. かきつばた, 29: 42-43.

東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, p.73. 保育社.

奥谷喬司, 1986. 貝類. 決定版生物大図鑑, p.251. 世界文化社.

(2009 年版 (原田) を一部修正)

クビナガギセル *Megalophaedusa kubinaga* (Kuroda)

【選定理由】

本種の模式産地は石巻山で、中腹以上の石灰岩の岩礫地の落葉下に生息している。模式産地以外に生息地は発見されておらず、本種は石巻山特産種といえる。現在はマツクイムシの薬剤空中散布で絶滅に瀕した過去から回復し、一時と比べ多産する様になったが、生息範囲は非常に狭く、手厚い保全が望まれる。

【形態】

殻はやや小形で殻高 18 mm、殻径 3.8 mm、12 1/3 層、殻口は小さく著しく突き出て頸部は細くて長い。主襞は長く、月状襞は顕著である。



豊橋市石巻山山頂付近, 1989年5月28日, 木村昭一採集

【分布の概要】

愛知県豊橋市石巻山の特産種である。

【生息地の環境／生態的特性】

石灰岩の岩礫地の間の落葉下に群れて生息する。発生は卵生。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在はマツクイムシの薬剤空中散布で絶滅に瀕した過去から回復し、多産する様になったが、個体数は年による変動が認められる。

【保全上の留意点】

生息確認地（石巻山）を中心とした岩礫地の保全に留意する。

【特記事項】

石巻山の特産種で模式産地である。

【関連文献】

吉田博士祝賀記念誌論文篇, 1939. 三河石巻山嵩山(スセ)の陸貝相, p.676.

天野景従, 1966. 愛知県の陸貝相. 東海高校研究紀要 4:13.

愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物, p.151.

野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類. 愛知の動物, p.28. 愛知県郷土資料刊行会.

柴田吉夫, 1995. 北設山岳県立公園一帯の自然科学. 北設山岳県立公園及びその付近の陸産貝類, p.81. 愛知県商工部通商観光課・北設山岳県立公園地区協議会・鳳来寺山県立公園地区協議会.

東 正雄, 1982. 原色日本陸産貝類図鑑, p.54. 保育社.

(2009年版(原田)を一部修正)

ヒラシタラ *Sitalina latissima* (Pilsbry)

## 【選定理由】

2016年10月に行われた調査により、渥美半島先端部の伊良湖岬において、愛知県下で初めて複数個体の生息が確認された(早瀬・他, 2017)。本州においては、他の分布地が報告されることがない上に、南方から黒潮に乗った海流拡散と推測される貴重な地域個体群のひとつである。環境省レッドリスト2019では九州以北の本種を絶滅のおそれのある地域個体群と指定している。愛知県下では伊良湖岬先端部の限られた範囲にしか生息していないことから、高いランクの絶滅危惧種に位置付けられた。愛知県下では、近年になって初めて存在が確認された種であるため、減少傾向は不明であるが、全国的にも絶滅が危惧される地域個体群のひとつであり、現時点で知られる生息地が局地的であることから、絶滅の危険性の高い種ならびに貴重な地域個体群と考えられる。

## 【形態】

成貝の最大個体が殻長1.7mm、殻径2.5mm程度の低円錐形の微小種である。殻はきわめて薄く、各螺層には細い複数の螺肋とそれに沿って現われる殻皮の突出が認められる。殻表は黄褐色の殻皮に覆われ光沢はない。殻の周縁には強い角を有するが、愛知県の個体は若干、角が鈍い。臍孔はきわめて狭く小さい。軟体は、眼触角と口触角が黒色で、腹足背面は灰黒色、臍面付近は白色となり、口球の薄紅色が頭部に透過されて視認できる。

## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

渥美半島先端部の伊良湖岬のみに生息記録が知られる(早瀬・他, 2017)。

## 【世界および国内の分布】

台湾に分布が知られる(謝・他, 2006)。琉球列島には広く分布し個体数も多く普通種である。九州以北では生息地が不連続的で少ないほか、南方系の本種の辺縁分布とされる(上島, 2014)。大分県(神田, 1992)、宮崎県(西・西, 2018)、などの九州の他に、愛媛県(石川, 2003)や高知県(高知県レッドデータブック[動物編]編集委員会, 2002)での四国の分布記録も知られる。本州では現時点で、伊良湖岬がデータを伴う明確な文献記録として示される唯一の産地である(早瀬・他, 2017)。

## 【生息地の環境／生態的特性】

生息地は、伊良湖岬の海岸林で、主にヤブツバキの照葉樹林の環境である。林床の落葉堆積下のリター層に生息する。同時期に幼貝から成貝までの複数世代が確認される状況より、1年生種ではない可能性が高い。食性については植物食で、分解の進んだ落葉などの土壌中の有機物を食べて生活していると推測される。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、伊良湖岬に生息確認されるのみである(早瀬・他, 2017)。古山の丘陵中腹のヤブツバキ等の林縁の落葉堆積下に生息していた。生息場所では1m<sup>2</sup>のリター層中に40個体近くの生貝が確認されたが、本種の分布範囲は狭い場所に限られていた。多くのヤブツバキ林の林床は、落葉の堆積がなく表土が露出しており、そのような場所には本種が生息していなかった。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されてはいないが、遊歩道の整備や近年の異常気象が起因する林の環境の悪化による減少が懸念される。

## 【保全上の留意点】

伊良湖岬は、三河国定公園(海に面した範囲)および渥美半島県立自然公園(内陸部分)に該当し、景観などは保護されているものの、本種に関しては、現時点で保護規制などが設けられていない。現在、本種の生息が確認される自然環境を維持することが重要である。本種の生息場所の環境改変を行わないことが最も重要である。

## 【特記事項】

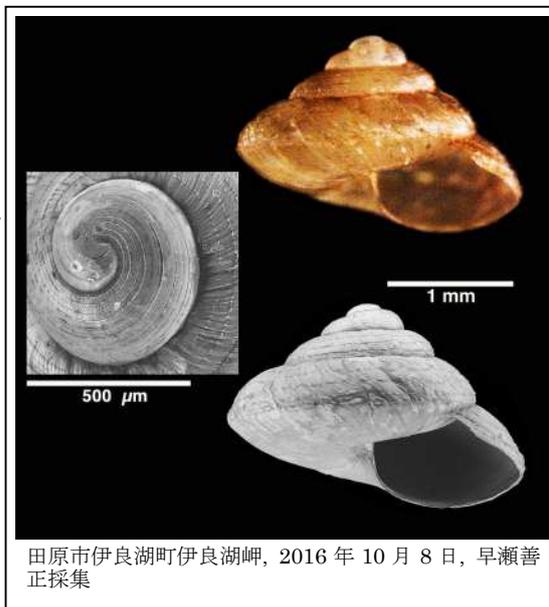
琉球列島では、きわめて普通種であるが、黒潮に乗った海流拡散と推測される漂着により飛地分布を成功させた、貴重な本州の地域個体群である。本州での本種の生息自体がきわめて稀な例であり、生物地理学的観点からも保護すべき重要な個体群である。

## 【引用文献】

- 早瀬善正・西 浩孝・河辺訓受・木村昭一・矢橋 真・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2017. 伊良湖岬の陸産貝類, かきつばた, (42): 1-5.  
 謝 伯娟・黄 重期・呉 書平, 2006. 台湾蝸牛図鑑(二版), 277 pp. 行政院農業委員会林務局, 台北.  
 石川 裕, 2003. ヒラシタラガイ, p.202. in: 愛媛県貴重野生動物植物検討委員会(編), 改訂-愛媛県レッドデータブック Red Data Book, EHIME -愛媛県の絶滅のおそれのある野生動物-, 447 pp. 愛媛県県民環境部環境局自然保全課, 松山.  
 神田正人, 1992. 大分県陸産貝類誌, 160 pp. 自刊.  
 高知県レッドデータブック[動物編]編集委員会(編), 2002. 高知県レッドデータブック[動物編] 高知県の絶滅の恐れのある野生動物, 440 pp. 高知県文化環境部環境保全課, 高知.  
 西 邦雄・西 浩孝, 2018. 宮崎県のカタツムリ, 149 pp. 自刊(黒潮出版), 宮崎.  
 上島 勲, 2014. 九州以北のヒラシタラガイ, p.436. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編) レッドデータブック 2014-日本の絶滅のおそれのある野生生物-6 貝類, 口絵8+xliii+455pp. ぎょうせい, 東京.

## 【関連文献】

- 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi+80pls.+343pp. 保育社, 大阪.  
 財団法人 自然環境研究センター, 2010. ヒラシタラガイ, p.912. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局生物多様性センター, 富士吉田.



田原市伊良湖町伊良湖岬, 2016年10月8日, 早瀬善正採集

(早瀬善正)

ヒラベッコウ *Bekkochlamys micrograpta* (Pilsbry)

## 【選定理由】

愛知県下では、西三河～東三河にかけての山地での記録が散見される程度で、確認例の少ない種である。主に東三河の山地で確認されており、良好な自然林環境あるいはそれに接する古くからあるスギ植林の環境に生息が限られる。生息密度が低い稀少種である。中部地方から近畿地方や四国にかけてやや広域に分布するものの、愛知県下では、確認自体がきわめて稀である。そのため、減少傾向は不明であるが、近年の気候変動の激しさや、それに伴う森林環境の荒廃により、愛知県下では、絶滅の危険性の高い種と考えられる。

## 【形態】

成貝は、殻長 4.2～4.6 mm、殻径 8.3～9.0 mm 程度の平らな円盤状の小形種である。殻はきわめて薄く、黄褐色で光沢が著しく強い。各螺層には微細な螺条が刻まれるが、実体顕微鏡や電子顕微鏡観察で確認される程度の繊細さであるため、目視では殻表は平滑である。臍孔は浅くごく小さく開口する。軟体は黒色で、休止時は、左右 1 対の薄く広い外套葉が殻の大部分を覆う。

## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

主に東三河や西三河 (川瀬・他, 2011) の山地での生息記録が知られる。

## 【世界および国内の分布】

日本固有種である。これまでは、本州 (中部以西)、四国、九州に広く分布するとされたが、四国および九州の個体群は別種の可能性が示唆された。また、本州中部から近畿にかけて複数種 (コウベヒラベッコウやオオヒラベッコウ) が知られていたが、同一種の可能性が示唆された (市川・上島, 2019)。

## 【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地は、山地の良好な自然林環境あるいはそれに接する古くからあるスギ植林の林床である。森林の落葉下や朽木の裏に付着する個体が確認された。おそらく 1 年生種と考えられ、寿命は 1 年程度と推測される。初夏には生成貝が確認されるが、夏から冬にかけては幼貝が確認されるのみである。初夏は本種の、繁殖および産卵期の可能性がある。分解の進んだ落葉などを食べて生活していると考えられる。沢沿いなどの保湿性の高い環境を好む種である。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、主に東三河山間地で生息確認される。近年の気候変動の激しさや、それに伴う森林環境の荒廃により、愛知県下では、絶滅の危険性の高い種と考えられる。確認自体が稀であるために、調査による明確な減少傾向は確認されていないが、生息場所は良好な森林環境のみであり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

## 【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。本種の生息する、良好な森林の沢沿いなどの保湿性の高い、限られた環境を開発しないことが最も重要である。

## 【特記事項】

本州中部から近畿地方にかけての複数種が同一種になる可能性が指摘され、本種の種小名は、これまで *micrograpta* とされてきたが、変更される可能性が高い (市川・上島, 2019)。また、四国の大部分と九州個体群が 2 未記載種になる可能性も高く、本種の分布域は、より狭い範囲に限定され、希少性が増すことになる。愛知県の個体群は、いまだ遺伝子レベルでの研究がなく、東日本に分布するニッコウヒラベッコウとの関係性も明らかではない。隣県の静岡県には本種が全く分布しないため、東西の橋渡しの存在となる愛知県の個体群は、分類学および生物地理学的観点からも、その存在は興味深い。

## 【引用文献】

川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類, 豊橋市自然史博物館研究報告, (21): 31-43.  
市川順也・上島 励, 2019. ベッコウマイマイ類の分子系統地理, 日本貝類学会令和元年度大会発表要旨集 (東京家政学院千代田三番町キャンパス), p.24. 日本貝類学会, 東京.

## 【関連文献】

野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚 (編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.  
環境省自然環境局野生生物課少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)



新城市鳳来町乗本, 1991年10月7日, 早瀬善正採集

イシマキシロマイマイ *Aegista calcicola* (Kuroda in Masuda et Habe)

## 【選定理由】

豊橋市の石巻山山頂付近石灰岩地の固有種である。近年の異常気象に起因する夏季の高温により石灰岩地の乾燥化が進行しており、また、豪雨などによるリター層や土壌の流出なども陸産貝類全般の生息に大きな影響を及ぼし、本種も減少傾向にある。愛知県下のみならず、生息密度が低く、分布域も狭い稀少種である。全国的にも絶滅が危惧されている種であり、石巻山山頂部の局所分布であることから、愛知県下では、絶滅の危険性の高い種と考えられる。

## 【形態】

殻長 7.2~8.0 mm、殻径 11.8~13.5 mm 程度のごく低い低円錐形の小型種である。殻は薄く、殻表はきわめて薄い殻皮で覆われ光沢を有していない。周縁から殻底部にかけては淡黄白色の殻皮で覆われるが、螺旋部は成長線に沿った幅広い白色の殻皮と細い縞状の淡黄色の殻皮が交互するため、若い個体では、きわめて淡い白色の火焰彩様の模様が見られる。次体層にはごく弱い角があるが、体層部の周縁は円く、臍孔は殻径の 1/5 程度の幅で明瞭に開く。軟体は黄白色である。

## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

石巻山山頂部のみ分布。記載時(増田・波部, 1989)にはタイプ産地の指定がされていなかったものの、後に、タイプ産地は石巻山とされている(東, 1995)。

## 【世界および国内の分布】

日本固有種。愛知県以外に静岡県(引佐町・静岡市)にも分布記録があるとされたが(増田・波部, 1989; 湊, 2014)、遺伝子解析の結果では、石巻山の個体と静岡県浜松市引佐町の個体とは明らかな別種である(Hirano et al., 2014)。したがって、本種は、石巻山の固有種と考えられる。

## 【生息地の環境／生態的特性】

石巻山山頂部の石灰岩地に生息する。低木や草本の葉裏に付着する個体が良く見られる。食性については植物食で、草本の若葉や分解の進んだ落葉などを食べて生活していると推測される。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

徐々に確認個体数が減少しているようであり、減少傾向が考えられる。近年の異常気象に起因する夏季の高温や豪雨などによるリター層や土壌の流出なども本種の生息に大きな影響を及ぼしていると考えられる。石巻山は、本種のほかにも数種の陸産貝類の固有種が存在するため、貝類コレクターの採集圧も無視できないと考えられる。生息場所はきわめて狭く局所的であり、環境が悪化すれば直ちに個体群消滅につながる。

## 【保全上の留意点】

生息地の石巻山は、石巻山・多摩県立自然公園に位置しており、環境が保護されているほか、山頂付近の「石巻山石灰岩地植物群落」は国の天然記念物に指定されているなど、生息地の環境は一応保護されている。ただし、本種は愛知県指定希少野生動物種とはなっていない。

これまでは、静岡県に生息するニオヤカマイマイの近似種なども同様に扱われていたため、本種と混同しないように注意が必要である。静岡県レッドデータブック 2019 において本種(加藤, 2019)とされている種は、別種であるので注意すべきである。本種の生息が確認される石巻山の自然環境を良好な状態で維持することが重要である。貝類コレクターによる本種生貝の乱獲にも注意が必要である。

## 【特記事項】

イシマキシロマイマイはオトメマイマイやアワジオトメマイマイに近縁な種であり、静岡県引佐町のイシマキシロマイマイ類似種は、殻表に光沢を有し、僅かに殻に円みが強く、ニオヤカマイマイあるいは、それに近縁な種である(Hirano et al., 2014; 早瀬・他, 2016)。また、静岡市には、東(1995)がエンスイマイマイ(平地型)として図示した淡黄白色の種は存在するが、イシマキシロマイマイに該当する種は見られない。したがって、本種は、石巻山固有種であり、この地域の個体群の存在が重要であるため、保護する必要がある。環境省レッドデータブック(2014)のほかに、静岡県レッドデータブック 2019 には、静岡県産の類似種を本種としてランク付けしているが(加藤, 2019)、静岡県産の個体群は別種に位置付けて対応する必要があり。

鳳来寺山自然科学博物館に所蔵される天野景従コレクションの愛知県の陸貝の標本ケース(No.8)には、ウスイロヒルゲンマイマイとされる淡黄白色の低平な殻を有する嵩山産の3個体の標本があり、これをイシマキシロマイマイと考える場合もあるようであるが、静岡県引佐町の個体と同様に、ニオヤカマイマイに近い殻形態にも思われるので、現段階では、嵩山の個体はイシマキシロマイマイとは別種として扱った。今後の詳細な分類学的再検討が必要である。

これまではオトメマイマイ属 *Trishoplita* とされてきたが、分子系統解析の結果、オトメマイマイ類にはおおむねのまとまりがあるものの、オオベソマイマイ属 *Aegista* のクレードには包括されてしまう結果となり、オトメマイマイ属は他のいくつかの属と共にオオベソマイマイ属の異名のひとつとなった(Hirano et al., 2014)。

## 【引用文献】

- 東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi + 80 pls. + 343 pp. 保育社, 大阪.  
早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・矢橋 真・西 浩孝・川瀬基弘・石井健一郎・岩田明久・仲田彰男・藤原隆則・永尾和彦, 2016. 三岳山の貝類相, かきつばた, (41): 1-16.  
Hirano, T., Kameda, Y., Kimura, K. & Chiba, S., 2014. Substantial incongruence among the morphology, taxonomy, and molecular phylogeny of the land snails *Aegista*, *Landouria*, *Trishoplita*, and *Pseudobuliminus* (Pulmonata: Bradybaenidae) occurring in East Asia. *Molecular Phylogenetics and Evolution*, 70: 171-181.  
加藤 徹, 2019. イシマキシロマイマイ, p.488. in: まもりたい静岡県の野生生物 2019—静岡県レッドデータブック—動物編, 539 pp. 静岡県くらし・環境部環境局 自然保護課, 静岡.  
([http://www.pref.shizuoka.jp/kankyoku/ka-070/wild/red\\_data03.html](http://www.pref.shizuoka.jp/kankyoku/ka-070/wild/red_data03.html))  
増田 修・波部忠重, 1989. 静岡県陸産淡水産貝類相, 東海大学自然史博物館研究報告, (3): 1-82 + 3 color pls. + xiv pls.  
湊 宏, 2014. イシマキシロマイマイ, p.367. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編) レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

## 【関連文献】

- 野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚(編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.  
財団法人 自然環境研究センター, 2010. イシマキシロマイマイ, p.989. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

(早瀬善正)



豊橋市石巻山, 1989年5月28日,  
木村昭一採集

## ミヤマヒダリマキマイマイ (ヒラヒダリマキマイマイ)

*Euhadra scaevola* (Martens) (*E. s. interioris* Pilsbry)

## 【選定理由】

愛知県下では、西三河から東三河にかけて広く分布するが、ごく稀に確認される程度の生息密度の低い稀産種である。瀬戸市定光寺ではかつて生息していたが、現在では確認できず、絶滅したと考えられる。東三河は、亜種のミカワマイマイとの移行地域であり、どちらも明確な識別が難しい殻形態の個体も存在する。全国的にも絶滅が危惧される種であり、生息密度が低い上、生息地が減少傾向にある種である。

## 【形態】

殻長 20.1~24.2 mm、殻径 37.0~44.5 mm 程度の、平らに近い低円錐形の左巻き種である。殻表には明瞭な成長肋が多数現われ、茶褐色の薄い殻皮で覆われる。周縁は円く、細く不明瞭な色帯を有する。殻径の 1/5 程度の幅の臍孔周囲にも不明瞭な色帯は認められ、0204 型の色帯となる。軟体の頭足部は黄褐色で、濃い茶色の小斑が散在する。

## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

西三河から東三河 (奥三河を含む) にかけて広く分布するが、生息地は限られ、多くは東三河で確認される。

## 【世界および国内の分布】

日本固有種であり、関東地方から近畿地方北部にかけて分布する (財団法人 自然環境研究センター, 2010)。中部地方~近畿地方北部の個体群は、ミカワマイマイも含めて亜種のヒラヒダリマキマイマイに該当すると結論付ける報告 (川瀬・他, 2015) もある。

## 【生息地の環境/生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、山地の自然林やスギ植林である。谷部の沢や河川に沿った森林環境の林床では主に枝や落葉堆積下に確認される。自然林では岩礫の堆積するガレ場や沢沿いの朽木下に確認され、スギ植林では、沢や川沿いに厚く堆積した枝や落葉下に確認される傾向が強い。本属の中でも特に高温度の環境を好み生息適地とする種である。食性については植物食で、分解の進んだ落葉などを食べて生活していると推測される。静岡県中部のミヤマヒダリマキマイマイ (名義タイプ亜種) では、6 月上旬の降雨後の朝に野外で産卵中の個体が確認され、初夏が産卵期と考えられている (早瀬, 2005)。また、産卵から成貝に達するまでに、少なくとも丸 2 年間を要し、産卵後 3 年目には成貝になると推定されている (早瀬, 2005)。

## 【現在の生息状況/減少の要因】

瀬戸市定光寺ではかつて生息していたが、現在では確認できず、絶滅したと考えられる。減少傾向が認められる上に、生息場所はきわめて狭く局所的であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。沢などの環境は、近年の豪雨の影響でひどく荒廃している。また、治水目的などで砂防堰堤などのコンクリート構造物に改変される傾向が近年著しい。これらの要因により減少傾向が著しいと考えられる。また、本種は貝類コレクターの収集対象になり易い大形種であることから、乱獲される可能性が高い。

## 【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。本種の生息する、限られた環境を開発しないことが最も重要である。また、本種は貝類コレクターの乱獲を防ぐためにも県レベルでの捕獲規制などを検討する必要もある。

## 【特記事項】

愛知県内の本種個体群は、ミトコンドリア DNA の解析結果からはヒラヒダリマキマイマイに該当し、ミカワマイマイとの差異が認められないとされる (川瀬・他, 2015)。一方、関東~静岡県中部に分布する名義タイプ亜種のミヤマヒダリマキマイマイとは遺伝的分化があるので、ヒラヒダリマキマイマイとして区別される (川瀬・他, 2015)。ただし、川瀬・他 (2015) の結果には、核 DNA の解析結果が示されていないことや長野県や山梨県、岐阜県北部の個体の解析が全くされていないなどの検証不十分な点も多くあるために、現時点では、この結果をそのまま信頼する事は出来ず、種名に反映させなかった。したがって、静岡県西部~愛知県東部の石灰岩地を中心に分布する周縁角の鋭い個体群をミカワマイマイとし、石灰岩地から外れ、周縁が円い個体については亜種名を明確にせず、種レベルでのミヤマヒダリマキマイマイとした。愛知県の 2 亜種は、生物学的には、区別の必要がない可能性も高いと考えられるが、殻形態によりおおむね分布傾向の差異が認められ、地域個体群としても識別可能である点を重視し、従来の 2 亜種のままとして扱った。愛知県は、本種群 3 亜種の移行地域であり、この地域の個体群の存在が重要であり、保護する必要がある。

## 【引用文献】

早瀬善正, 2005. 静岡県中部で確認した陸産貝類 2 種の繁殖行動, かきつばた, (31): 36-38.  
川瀬基弘・西尾和久・森山明彦・市原 俊・桜井栄一, 2015. ミヤマヒダリマキマイマイ (腹足綱: ナンバンマイマイ科) 種内の形態変異と分子系統, Molluscan Diversity, 4(1-2): 5-13.  
財団法人 自然環境研究センター, 2010. ミヤマヒダリマキマイマイ, p.982. in: 自然環境保全基礎調査 日本の動物分布図集, 1070 pp. 環境省 自然保護局 生物多様性センター, 富士吉田.

## 【関連文献】

東 正雄, 1995. 原色日本陸産貝類図鑑 増補改訂版, xvi + 80pls. + 343pp. 保育社, 大阪.  
湊 宏, 2014. ミヤマヒダリマキマイマイ, p.363. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編) レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.  
野々部良一・高桑 弘・原田一夫, 1984. 陸産貝類, pp.23-40. in: 佐藤正孝・安藤 尚 (編), 愛知の動物, 325pp. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.

(早瀬善正)



ミヤマヒダリマキマイマイ, 豊根村三沢, 1989年5月5日, 木村昭一採集

カタママイマイ *Lepidopisum conospira* (Pfeiffer)

## 【選定理由】

河畔林環境を中心に生息する特殊な生態を示す陸産貝類である。生息適地がきわめて限定的であり、分布範囲も狭いため、愛知県下でも国内の他地域と同様に稀な種である。河畔林環境は、一般的な認識では役立たない雑草地程度に思われるため、開発行為には殆ど抵抗感を持たれない場所である。しかし、本種にとっては、きわめて重要な生息環境であり、このような場所は愛知県内では護岸整備をされるなどして減少傾向にある。矢作川上中流域の河畔林にまとまった個体群が見られる程度の生息域の狭い種であり、洪水などの増水時に流され、無事漂着した個体が各場所の氾濫原に分布範囲を広げる性質があると考えられている。ただし、本種の生息に適した氾濫原の環境自体が失われつつあるので、今後も安定的な本種の個体群維持が可能なのか、強く危惧される。愛知県下では、絶滅の危険性の高い種と考えられる。

## 【形態】

成貝は、殻長 4.7~5.2 mm、殻径 5.6~5.9 mm 程度の丸みを帯びた低円錐形の小形種である。殻は薄く、淡い茶褐色の殻皮が殻表を覆う。殻皮には小さな鱗状の突起物を生じ、殻表全体に認められる。成貝の殻口外唇は薄く、反曲する。臍孔はきわめて小さいが、深く明瞭である。雄性生殖器官には矢囊や粘液腺を持たず、鞭状器は細く短い棒状、陰莖鞘部分はきわめて太く陰莖本体の 4 倍ほどの幅を有する。

## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

岡崎市での生息が報告されたのが最初の記録である(木村, 2000)。その後、豊田市の矢作川上中流域の河畔林の数箇所にまとまった個体群の生息が報告される(川瀬・他, 2012)程度である。

## 【世界および国内の分布】

韓国に分布が知られるほか、日本国内では関東以西の本州、四国・九州にも分布するとされる(湊, 2014)。

## 【生息地の環境／生態的特性】

河川河岸の河畔林の土手などで、林床にササ類やススキ類が茂る様な場所や、クズなどの植物が繁茂する草地に生息する。山地の自然林などに生息することはなく、低地の河川上中流域などの氾濫原を主な生息場所とする種である。食性については植物食で、分解の進んだ落葉などを食べて生活していると推測される。同時に幼貝と成貝が確認されるので、成熟する(成貝)までに複数年を有すると推測される。柄眼目の種はいずれも雌雄同体であるが、本種には、雄性器官を欠失させる *aphally* の一型である、雄性器官が萎縮した状態の *hemiphally* を示す個体が多い。これは、氾濫原に棲む生態的特性とも関連すると思われるが、交尾の機会を殆どなくし単一個体による自家受精のみで多数個体を増殖させ個体群を増大させる手段と考えられ、不安定な環境を生息適地とする本種の生存戦略であろうと推測される。変動の大きな環境に生息し、かつ、分布密度の低い本種に適した繁殖手段と思われる。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、矢作川上中流域の河畔林にまとまった個体群が確認される程度である。河岸の氾濫原は、護岸整備などの人の都合で開発が行われやすく、雑草地も整地され易いため、本種の生息適地は次第に減少傾向にある。もともと分布範囲も狭い種であるために、本種の個体群維持は難しい状況に向かっている。生息場所はきわめて狭く局所的であり、生息地となる河畔林や氾濫原の開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

## 【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。本種の生息する、限られた環境を開発しないことと保全することが最も重要である。

## 【特記事項】

稀に、河岸近くの畑地や庭の植え込みなどの人為的な環境に出現する場合も報告されるが、河岸の荒地環境に生息する本種の生態的特性に起因すると考えられる。おそらく、増水時に水路などを經由して漂流し分散した個体が偶然、耕作地付近など人為的な環境にたどり着き、個体数が増加した場合と推測する。この様な例により外来種の懸念を持たれる場合もあるが(川瀬・他, 2014)、本種の生態的特性と考えるべきであろう。

*Helix conospira* Pfeiffer, 1851 は、以前は *Ensis* マイマイの学名と考えられていたが、モーレンベーク・バンデービジル (1992) がタイプ標本を図示して以降、本種の学名へと変更された。

## 【引用文献】

- 川瀬基弘・波多野 順・田上正隆, 2014. 岐阜県初記録のカタママイマイ, かきつばた, (39): 45.  
 川瀬基弘・村瀬文好・早瀬善正・市原 俊, 2012. 矢作川上中流域の河畔林に生息する陸産貝類, 矢作川研究, (16): 11-26.  
 木村昭一, 2000. 愛知県より初めて採集されたカタママイマイ, かきつばた, (26): 11-13.  
 湊 宏, 2014. カタママイマイ, p.364. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編) レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.  
 モーレンベーク・バンデービジル, 1992. *Helix conospira* Pfeiffer, 1851 の模式標本について, ちりぼたん, 23 (1): 4-6.

## 【関連文献】

- 波部忠重, 1958. 日本産陸産貝類の解剖学的研究 (8) ツシマケマイマイとカタママイマイ, Venus, 19 (3-4): 165-168.  
 川瀬基弘・早瀬善正・市原 俊, 2011. 愛知県豊田市に生息する陸産貝類, 豊橋市自然史博物館研究報告, (21): 31-43.  
 川瀬基弘・大内陽子, 2010. 豊田市平戸橋町で発見されたカタママイマイ, かきつばた, (35): 41.

(早瀬善正)



岡崎市西阿知和町青木川右岸, 1998年7月19日, 木村昭一採集

ミニビロウドマイマイ *Nipponochloritis oscitans takedai* Minato

【選定理由】

愛知県では、東部のみに分布し、その生息地もきわめて限られる稀産種である。本亜種の生息個体数はきわめて少なく、近年の異常気象などに伴う急激な環境変化や、開発など人為的な環境の改変行為が及ぼす影響も少なくないと考えられる。将来的に本亜種の個体群が持続的に維持されてゆくのか懸念される。

【形態】

最大個体において、殻長 7.9 mm、殻径 13.3 mm 程度の平巻き状の小型種である。殻はきわめて薄く、殻表には殻皮毛が密生する。殻口は単純で肥厚や反転は見られない。十分に成長した個体においても、小型である。臍孔は狭いが深く明瞭に開くほか、螺塔が著しく低くほぼ扁平である。殻の特徴により、愛知県内に生息する名義タイプ亜種であるビロウドマイマイと識別できる。ただし、幼貝の場合は、ビロウドマイマイでも臍孔が開いているので、形態的特徴による 2 亜種の区別は困難である。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県東部に散見されるようであるが、正確な分布記録が殆どない。明確な産地としては、新城市 (旧・南設楽郡鳳来町) の鳳来寺山山頂部が知られている (早瀬・多田, 2005)。また、豊橋市細谷町の渥美外海に面した自然林内より死殻 1 個体のみが採集されている (1990 年 10 月 14 日 木村昭一採集)。

【世界および国内の分布】

本属自体が日本固有属であり、所属する種はすべて日本固有種である。本亜種は、日本固有亜種であり、静岡県西部と愛知県東部の狭い分布範囲のみに生息する。

【生息地の環境／生態的特性】

鳳来寺山山頂部では、広葉樹林の林床の落葉下などに生息している。個体数がきわめて少なく、発見自体が稀である。鳳来寺山では、山麓ではビロウドマイマイのみが、山頂部には本亜種のみが生息しており、生態的に棲み分けているように思われる。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県下では、これまでに殆ど確認されていない。県下では、本亜種はあまりにも稀産のため分布記録が殆どなく、明確な減少傾向は把握できないが、近年の急激な気候変動や開発の影響により、本亜種の生息環境は狭められていると考える。

【保全上の留意点】

本亜種は生息確認地においても多産しないので、本種の生息する森林環境を維持し、保全する必要がある。

【特記事項】

鳳来寺山の個体群は、記載時に同種とされなかったが (湊, 1984)、後に、ミニビロウドマイマイの地方型に過ぎないと結論付けられた (早瀬・多田, 2005)。なお、同定の際、臍孔がまだ閉じていないビロウドマイマイのきわめて幼若な個体が本亜種に誤認される可能性は高い。したがって、本亜種の同定は、必ず成貝個体に基づき検討する必要がある。

これまでミニビロウドマイマイはビロウドマイマイとは別種とされていたが、東北から中部地方までのビロウドマイマイ類はいずれも遺伝子解析の結果、大きな一群を形成していたため (早瀬・他, 2016)、全てをビロウドマイマイ種群と考えるのが妥当であり、本亜種は殻の形態的特徴により他の個体群との識別が可能であることから、ビロウドマイマイとは識別可能な亜種として位置付けた。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・湊 宏, 2016. 震災後の宮城県北部沿岸域で確認された陸産および淡水産貝類, ちりばたん, 46 (1-2): 2-62.  
早瀬善正・多田 昭, 2005. 愛知県産のビロウドマイマイ属について, かきつばた, (31): 8-19.  
湊 宏, 1984. 静岡県の珍奇なミニビロウドマイマイ (新種), Venus, 43(3): 193-195.

【関連文献】

- 川瀬基弘, 2014. 新城市の軟体動物, pp.1-24. in: 鳳来寺山自然科学博物館(編), 新城市の自然誌 昆虫・動物編, 335 pp. 鳳来寺山自然科学博物館, 新城市.

(早瀬善正)



豊橋市細谷, 1990 年 10 月 14 日, 木村昭一採集

## ニヨリサンエンマイマイ *Satsuma* sp. 2

### 【選定理由】

主に愛知県東部から静岡県西部にかけて分布する未記載種である。近年、岐阜県の愛知県境部にも僅かな生息範囲および生息密度ながら分布地があることが確認された(岩田, 2019)。これまで愛知県下のシメクチマイマイとして扱われていた大部分の個体は、本種である。近年になって未記載種として和名提唱された種であるため、環境省レッドリスト 2019 ではランク外の種である。近年の異常気象に起因する夏季の高温による林床の乾燥化の進行、また、豪雨などによるリター層や土壌の流出などが大きな影響を及ぼし、本種も減少傾向にあることが予想される。また、分布域には、ダム建設などの開発が予定される地域もある事から、愛知県下では、絶滅の危険性を考慮すべき種と判断される。新城市(旧・鳳来町)門谷の鳳来寺山登山道脇では、かつて少数ながら見られた本種が、今では確認することが困難な状況になっているような例もある。

### 【形態】

殻長 14.0 mm、殻径 17.3 mm 程度の丸みを帯びた低円錐形の小型種である。殻は薄質～多少厚く、殻表には淡黄褐色あるいは茶褐色の殻皮が覆い、ほぼ平滑であるが、SEM での観察では、成長線に沿ったしわ状の微隆起が認められる。臍孔は小さいが深く明瞭に開く。雄性器官の鞭状器は長く、サンエンマイマイ、シズオカマイマイなどの未記載の近縁種の中では、最も細長い形状を示す。

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

東三河に複数の生息記録が知られる(早瀬・他, 2016)。

#### 【世界および国内の分布】

日本固有種。愛知県東部から静岡県西部にかけて分布する(早瀬・他, 2016)。近年、岐阜県の愛知県境での分布も報告された(岩田, 2019)。長野県南部からは、近似する殻形態の種の報告があり(飯島, 2018)、今後の検討が必要である。

### 【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、主に、広葉樹林に接したスギ植林であり、アオキなどの常緑低木の葉裏などに付着する個体が多く確認される。谷部の沢沿いや周辺に湿った環境がある場所などの、薄日の指す疎林に確認される場合が多い。食性については植物食で、主に分解の進んだ落葉などの土壌中の有機物を食べて生活していると推測される。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、東三河に広く生息している。最近になり、愛知県下にも存在する独立種であることが認識されたばかりの種であり、減少傾向が十分に確認されていないが、新城市(旧鳳来町)門谷の鳳来寺山登山道脇では、著しく個体数が減少している例もある。分布域には、ダム建設などの開発が予定される地域もある事から、開発の影響も懸念される。個体群が一度減少してしまうと、回復が難しい種ではないかと推測される。

### 【保全上の留意点】

本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。

### 【特記事項】

これまでは、西日本に広く生息するシメクチマイマイの一型とされていたが、シメクチマイマイの再検討(Kameda & Fukuda, 2015)により、愛知県や静岡県などでシメクチマイマイの一型とされていた個体群が全てシメクチマイマイとは別種である事が明確となった。この結果、生殖器形態で3区分される、1) 愛知県東部～静岡県西部の狭い地域にはサンエンマイマイ、2) サンエンマイマイの分布地をさらに広く同心円状に覆う様にニヨリサンエンマイマイ、3) 掛川市～焼津市～静岡市にかけてはシズオカマイマイ、が分布すると考えられている。

### 【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・矢橋 真・西 浩孝・川瀬基弘・石井健一郎・岩田明久・仲田彰男・藤原隆則・永尾和彦, 2016. 三岳山の貝類相, かきつばた, (41): 1-16.  
飯島邦昭, 2018. 長野県陸産・淡水産貝類誌, 160 pp. 自刊, 下條村.  
岩田明久, 2019. 岐阜県発記録のニヨリサンエンマイマイ, かきつばた, (44): 38-39.  
Kameda, Y. & Fukuda, H., 2015. Redefinition of *Satsuma ferruginea* (Pilsbry, 1900) (Camaenidae), with description of a new cryptic species endemic to the coasts and islands of the central Seto Inland Sea, western Japan. Venus, 73(1-2): 15-40.

### 【関連文献】

- 早瀬善正, 1999. 静岡県中部に生息するシメクチマイマイ, かきつばた, (25): 21-22.  
早瀬善正, 2018. サンエンマイマイ, p.43. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), レッドリスト 2018/補遺資料, 58 pp. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室, 東京.  
早瀬善正・波部忠重, 1993. シメクチマイマイの生殖器の地方変異, ちりばたん, 24 (2): 36-38.  
環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.  
増田 修・波部忠重, 1989. 静岡県陸産淡水産貝類相, 東海大学自然史博物館研究報告, (3): 1-82 + 3 color pls. + xiv pls.

(早瀬善正)



新城市鳳来町門谷, 1991年11月7日, 早瀬善正採集

## ミズゴマツボ *Stenothyra japonica* Kuroda

### 【選定理由】

本種は原記載時 (Kuroda, 1962) に岩手、茨城、千葉、三重、大阪、島根、岡山、山口、高知、長崎、鹿児島県が分布域としてあげられているが、1990年以降に生息が確認されているのは新潟県 (佐藤, 1992)、千葉県 (黒住・岡本, 1994)、山口県 (Hosaka & Fukuda, 1996)、兵庫県 (増田・内山, 2004)、熊本県 (不知火町; 木村未発表) と分布域は広いが現生息地は少なく、そのいずれの場所も局地的で生息面積は小さい。今まで愛知県からは木曾川中流域より本種の健全な個体群が確認された (木村, 2006)。現在、愛知県からは上述の生息地のみ知られているにすぎない。近年の調査では 2005 年当時より個体数の減少が確認されており、絶滅の可能性が高い種であると評価された。



愛西市木曾川本流, 2006年10月31日, 木村昭一採集

### 【形態】

殻は殻長約 5-7 mm と小型。貝殻の外形は卵形で、各層は良く膨れ、縫合部は強くくびれる。螺旋管の巻きに沿って点刻が連続する。殻口は体層から狭まり円形。臍孔はない。蓋は石灰化して厚い。

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

上述したように、現在木曾川中流域の 1 地点でのみ生息が確認されている。

#### 【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島南部、国内では岩手・秋田県～九州に分布する (福田, 2012)。

### 【生息地の環境／生態的特性】

県内の本種の生息地は、本流から直接流れの当たらないワンドのような砂泥底で、淡水域ではあるが、付近の底質中にゴカイ類が生息していたり、潮汐の影響が認められた。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境は、河川改修や護岸工事等でほとんど現存しない。

### 【保全上の留意点】

上述の通り生息地の破壊が極めて深刻で、絶滅が危惧される。

### 【引用文献】

- 福田 宏, 2012. ミズゴマツボ, p. 45. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- Hosaka, K. & Fukuda, H., 1996. Discovery of a population of endangered brackish-water snail *Stenothyra japonica* (Gastropoda: Neotaenioglossa: Stenothyridae) and characteristics of the accompanied molluscan fauna in Onoda City, Yamaguchi Prefecture, western Japan, with a comment on the conservation value. *The Yuriyagai, Journal of the Malacozoological Association of Yamaguchi*, 4(1/2): 65-96.
- Kuroda, T., 1962. Note on the Stenothyridae (aquatic Gastropoda) from Japan and adjacent region. *Venus*, 22(1): 59-69, pl. 4.
- 黒住耐二・岡本正豊, 1994. ミズゴマツボを千葉県の水田で確認. *ちりぼたん*, 24 (3/4): 84.
- 増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水産貝類図鑑 ②汽水域を含む全国の淡水貝類. *ピーシーズ*, 240pp.
- 木村昭一, 2006. 愛知県におけるミズゴマツボの産出記録. *かきつばた*, (32): 22-27.
- 佐藤 修, 1992. 横越村とその付近の非海産貝類. *しぶきつば*, (13): 7-10.

(木村昭一)

ミズコハクガイ *Gyraulus soritai* Habe

## 【選定理由】

愛知県では、2002年10月に豊橋市の葦毛湿原近くの利兵池(豊橋市岩田町)で生息確認されたのが初記録である(河辺, 2002)。その後、2011年4月の豊田市南東部(標高440m)の小湿地での生息記録(守谷・河辺, 2013)のほか、2011、2012、2015年に行われた調査で、豊田市の東海丘陵湧水湿地群に属す、矢並湿地、上高湿地、恩真寺湿地の3湿地でも本種の生息が確認された(川瀬, 2016)。微小な淡水棲種であり、愛知県下では、さらに生息地が増える可能性もあると考えられるが、全国的にも生息密度が低く、分布域も狭い稀少種である。したがって、愛知県内で本種の分布情報が急激に増加する可能性はきわめて低く、さらに、近年の池沼の公園整備や湿地環境の消滅傾向も著しい状況であり、全国的にも絶滅が危惧される種であることから、愛知県においても、高いランクの絶滅危惧種に位置付けられた。

## 【形態】

殻径1.5~2.0mm程度(国内の最大個体でも4mm程度)の平巻き状左巻きの微小種である。殻は薄く、殻表は淡黄色のごく薄い殻皮で覆われ、光沢はない。殻頂は深く陥没し、その幅は、ヒラマキミズマイマイと比較して著しく狭く小さい。貝類では多数の右巻き種が右回転方向に巻き下がる殻形成であるのに対して、本種を含むヒラマキガイ科の大部分の種は、後成層が左回転方向に巻き上がる形状である。殻底はごく僅かに突出しているため、他の在来のヒラマキガイ類との識別点になる。特異な殻形態および、匍匐時は殻底を上にするため、右巻き種と誤認されている場合が多い。



## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

現時点では、利兵池(豊橋市)および矢並湿地、上高湿地、恩真寺湿地の3湿地など(豊田市)での生息記録が知られる(河辺, 2002; 守谷・河辺, 2013; 川瀬, 2016)。

## 【世界および国内の分布】

日本固有種。東北地方; 青森県・宮城県(佐藤・他, 2010; 齊藤, 2015) 関東・北陸地方から中国・四国地方にかけて局所的に確認される(中井, 2014)。

## 【生息地の環境/生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、主に丘陵地の湿地環境と考えられる(守谷・河辺, 2013; 川瀬, 2016)。挺水植物の茎や葉裏などの生きた植物体や、水底の枯れた茎・葉に付着することが多く、湧水時には湿った枯死植物体の堆積した中に浅く潜っている(中井, 2014)とされる。

## 【現在の生息状況/減少の要因】

愛知県内では、自然環境が保全された湿地のイネ科植物の茎や水没した枯葉に付着するとされる(川瀬, 2016)。2000年代になり、愛知県下での存在が確認されるようになった種であり、ここ20年くらいの状況しか把握できず、明確な減少傾向が確認されていないが、豊橋市の利兵池は公園整備がされたようであり、生息が懸念される環境もある。いずれの生息地も生息場所は狭く局所的であり、周辺での環境の悪化や開発行為があれば直ちに個体群消滅につながる。

## 【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される東海丘陵湧水湿地群(矢並湿地、上高湿地、恩真寺湿地)は、2012年7月3日にラムサール条約登録湿地として認定され(川瀬, 2016)、環境が保護されている。これ以外の本種生息地に関しては、生息地域の自然環境を維持することが重要である。

## 【特記事項】

東海地方で見られる本種の生息地は、いずれも水深1~2cm程度の水溜りのような湿地であり(守谷・河辺, 2013)、流れのある河川などには本種は発見されていない。このような環境は、愛知県下では急速に失われつつあるので、特に本種などの湿地環境に生息する貝類が発見された場合の環境を含めた保護が重要である。

## 【引用文献】

河辺訓受, 2002. 石巻山周辺淡水貝観察調査報告—愛知県でミズコハクガイを初記録—, かきつばた, (28): 31-32.

川瀬基弘, 2016. 東海丘陵湧水湿地群に生息する貝類, 矢作川研究, (20): 13-16.

守谷茂樹・河辺訓受, 2013. 三重県, 愛知県で確認されたミズコハクガイ, かきつばた, (38): 50-51.

中井克樹, 2014. ミズコハクガイ, p.310. in: 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵8+xliii+455pp. ぎょうせい, 東京.

齊藤 匠, 2015. 東日本大震災後の宮城県で発見された絶滅危惧種ミズコハクガイ(腹足綱: ヒラマキガイ科)の新産地, Molluscan Diversity, 4(1-2): 50-53.

佐藤慎一・多留聖典・福田 宏・多々良有紀, 2010. 2009年度軟体動物多様性学会夏季例会(南三陸)報告, Molluscan Diversity, 1(2): 54-60.

## 【関連文献】

Habe, T., 1976. New land and freshwater snails (Mollusca) from Japan. Bulletin of the National Science Museum Tokyo, Series A (Zoology), 2 (4): 225-228.

増田 修・内山りゅう, 2004. 日本産淡水貝類図鑑② 汽水域を含む全国の淡水産貝類, 240 pp. ピーシーズ, 東京.

(早瀬善正)

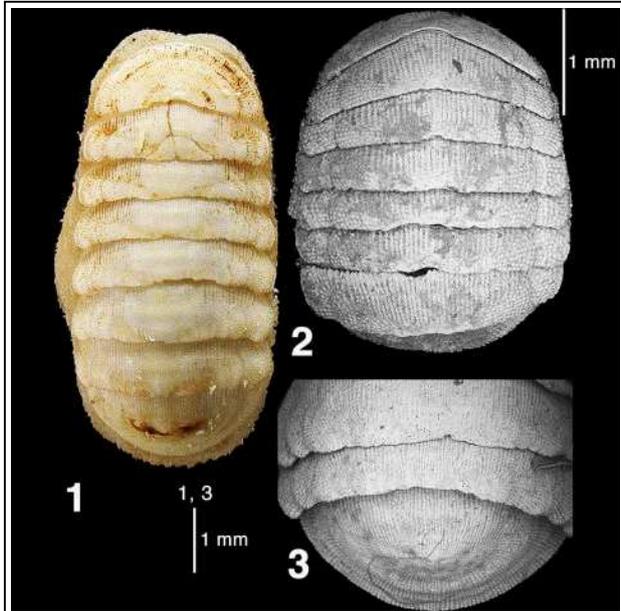
キタサメハダヒザラガイ *Leptochiton hakodatensis* (Thiele)

【選定理由】

近年本種は三重県英虞湾(木村・他, 2015)、伊勢湾口部の鳥羽市生浦湾(木村・他, 2015)、愛知県三河湾(木村, 2016; 早瀬・他, 2016)からキタサメハダヒザラガイ近似種として産出が報告された。齋藤・他(2016)により、これらは瀬戸内海の個体群とともに、それまで東北以北に分布するとされていたキタサメハダヒザラガイと同種とされた。本種は稲葉(1982)が東北・北海道型と定義した、「内海が太平洋側の分布限界である、外海では生息し得ないが、低温・低塩分の内海に生息している貝類群集」に含まれる。また本種の生息環境は、よく保全された多様性の高い貝類相を示す一部の内湾域に限られており、個体数も非常に少なく、絶滅の可能性が高い種であると評価された。生物地理的にも貴重な本種の保全は不可欠である。

【形態】

体長約 10 mm、潮間帯付近に生息するヒザラガイ類としては小型。体全体は礫などに付着している時には通常伸展していて、付着基盤から剥離すると腹側に屈曲する。伸展した体は縦方向に中央が隆起した扁平な小判型で、背面には 8 枚の殻板(貝殻)が並ぶ(図 1)。殻板、肉帯ともに淡黄白色で特徴的な色彩である。愛知県の潮間帯から浅海に生息する他のヒザラガイ類とは色彩の特徴だけでも区別できる。殻板は低く、背部は角張らず丸みを帯びる(図 2)。殻表の顆粒は、中間板の中央部では縦列であり、頭板、中間板側域、尾板後域では放射列となる(図 2, 3)。



南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深 2-4 m), 1995 年 3 月 8 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内での最初の分布確認例は 1995 年に三河湾湾口部日間賀島南沖の潮下帯よりドレッジで採集された 5 個体で(木村, 2016)、その後 2015 年、西尾市梶島の潮間帯より 1 個体採集されたにすぎない(早瀬・他, 2016)。現在までに、他の海域では分布が確認されていない。

【世界および国内の分布】

近年の研究ではオホーツク海南部、日本海北部、東北以北に分布する(齋藤, 2000)とされているが、横浜沖や長崎の分布記録もあり(瀧, 1965)、日本国内では北海道以外では本州から九州にかけての内湾環境に分布域をもつ可能性がある(早瀬・他, 2016)。

【生息地の環境／生態的特性】

潮通しの良い礫砂底に生息し、本種が生息する海域は貝類の多様性も高い。豊川や矢作川など比較的大きな河川流入がある上に水深も浅いため、冬季の水温低下の著しい三河湾の環境が北方を主分布域とする本種の生息に適している可能性もある(早瀬・他, 2016)。ヒザラガイ類は元々愛知県内の貝類の中でも分布記録が多い分類群ではないが、体全体が淡黄白色で非常に特徴的な本種の分布記録が近年まで全く無かったことから、以前から希少な種であった可能性も考えられる。生態的特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息状況は、【選定理由】・【分布の概要】を参照。英虞湾の本種の生息地は、潮通しの良い転石地で比較的個体数は多い。この生息地と比べると三河湾の 2 産地では著しく個体数が少ない。この個体数が著しく少ない要因として、本種は内湾域ではあるが潮通しの良い、泥分の少ない礫砂底に生息することから、水質汚濁、底質環境の泥質化、有機物量の増加などの影響を受けやすい種であることが考えられる。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。特に本種の生息基盤としての泥分の少ない礫砂底を含めた、潮間帯から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【特記事項】

生息水深帯がやや深く、モニタリングが困難な事もあり、国のレッドデータブックには掲載されていないが、瀬戸内海、伊勢湾の個体群については、今後絶滅危惧個体群とすることも考慮するのが望ましい。

【引用文献】

- 齋藤寛・濱村陽一・木村昭一・河辺訓受, 2016. キタサメハダヒザラガイの分布記録. 日本貝類学会平成 28 年度大会講演要旨集.  
早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島(三河湾)の潮間帯貝類相. かきつばた, (41): 27-39.  
稲葉明彦, 1982. 瀬戸内海の貝類. 181pp. 広島貝類談話会, 向島.  
木村昭一, 2016. 三河湾日間賀島沖で採集されていたキタサメハダヒザラガイ近似種. かきつばた, (41): 25-26.  
木村昭一・早瀬善正・河辺訓受・矢橋 真・林 誠司・河合秀高, 2015. 鳥羽市麻倉島のヒザラガイ類相(観察調査報告). かきつばた, (40): 17-22.  
齋藤 寛, 2000. サメハダヒザラガイ科. pp.5-9. In: 奥谷喬司(編著) 日本近海産貝類図鑑. 1173pp. 東海大学出版会, 東京.  
瀧 巖, 1965. ひざらがいが綱 (POLYPLACOPHORA). pp.5-13. In: 岡田 要(著) 新日本動物図鑑 [中]. 803pp. 北隆館, 東京.

(木村昭一)

サメハダヒザラガイ *Leptochiton hirasei* (Is. Taki et Iw. Taki)

【選定理由】

本種は、房総半島から九州の潮間帯から潮下帯の砂底上の転石下に分布する(齋藤, 2000, 2017)とされているが、東海地方では近年になって初めて、伊勢湾湾口部(木村・他, 2015)、三河湾湾口部(早瀬・他, 2019; 早瀬・木村, 2020)からの生息が記録された。

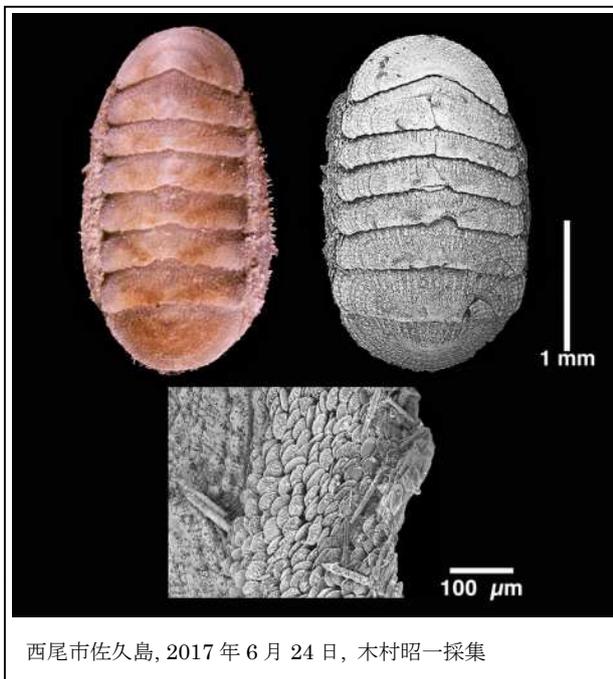
本種はサメハダヒザラガイ目の中では最も小型の種で、他のヒザラガイ類の幼貝と混同されやすい。また、やや深く底質に埋もれた石の下面に付着し、見つけにくく、過去に分布記録がなかったと考えられる。

県下では湾口部から外洋に面した淡水の影響を受ける転石地帯で生息が確認されており、近似種のキタサメハダヒザラガイ *Leptochiton hakodatensis* (Thiele) と比べてやや外洋寄りに分布する。本種の生息地は潮通しの良い内湾域の転石地で、他の貝類多様性も高い。県下での生息地点数、個体数も少なく、絶滅の可能性が高い種であると評価された。

【形態】

体長約 5 mm、サメハダヒザラガイ目としては最も小型の種。キタサメハダヒザラガイと近似するが、本種は殻、肉帯共に白色ではなく、淡褐色から赤みが強い褐色。また体長は遙かに小さく、肉帯の鱗片の形態も異なる。また同所的に生息することの多い普通種のヤスリヒザラガイ *Lepidozona coreanica* (Reeve) の同サイズの幼貝とは、現地では紛らわしいが、殻の彫刻が弱いことで、殻表を拡大して観察すれば、明確に区別される。

本種の殻板は低く、背部は角張らず丸みを帯びる。殻表の顆粒は、頭板、側域、尾板後域では放射列となるが、それ以外は縦列である。肉帯上の鱗片は、先端が丸みを持った長方形で 10 本以上の強い縦肋があり、周辺の棘は長いもので鱗片の 2 倍以上の長さで強い縦肋を持つ。



西尾市佐久島, 2017年6月24日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県下では、佐久島(早瀬・木村, 2019)、日間賀島、伊良湖(早瀬・他, 2019)で生息が確認されている。

【世界および国内の分布】

タイプ産地は紀伊半島(Taki, Is. & Taki, Iw., 1929)で、房総半島から九州の潮間帯から潮下帯の砂底上の転石下に分布する(齋藤, 2000, 2017)。瀬戸内海にも分布する(稲葉, 1982)。日本以外からの分布記録はない。

【生息地の環境／生態的特性】

外洋に面した内湾の、潮通しの良い、砂泥底上に転石が多い潮間帯に生息し、本種が生息する海域は他の貝類の多様性も高い。早瀬・他(2019)では、過去の記録との比較から、潮間帯の埋没石や転石下に生息する小形～微小種は、水質汚濁、底質環境の泥質化、有機物量の増加、貧酸素の発生等により著しく多様性が失われることが考察されている。生態的特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息状況は、【選定理由】・【分布の概要】を参照。本種の生息できるような生息環境自体が減少しており、これが最も大きな減少要因と考えられる。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。特に、本種の生息基盤としての前述したような生息環境を保全することが重要である。

【特記事項】

本種は、サメハダヒザラガイ科としては比較的分布域が南方で、生息水深も非常に浅い。サメハダヒザラガイ科には北方系や深海性の種が多く、冷水系の種群である。本種も稲葉(1982)が東北・北海道型と定義した、「内海が太平洋側の分布限界である、外海では生息し得ないが、低温・低塩分の内海に生息している貝類群集」に含まれる種と言えるかも知れない。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島(三河湾)の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15.  
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. ちりばたん, 50 (1): 33-79.  
稲葉明彦, 1982. 瀬戸内海の貝類. 181pp. 広島貝類談話会, 向島.  
木村昭一・早瀬善正・河辺訓受・矢橋 真・林 誠司・河合秀高, 2015. 鳥羽市麻倉島のヒザラガイ類相(観察調査会報告). かきつばた, (40): 17-22.  
齋藤 寛, 2000. サメハダヒザラガイ. in: 奥谷喬司(編著) 日本近海産貝類図鑑. pp. 4, 5. 東海大学出版会, 平塚.  
齋藤 寛, 2017. サメハダヒザラガイ. in: 奥谷喬司(編著) 日本近海産貝類図鑑. pp. 46, 728. 東海大学出版会, 平塚.  
Taki, Is. & Taki, Iw., 1929. Studies on Japanese chitons (3). Venus 1: 157-164.

(木村昭一)

ヒロクチカノコ *Neripteron* sp.

【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺のワンド状の水たまりや淀みの、泥底上に堆積した朽木や石の下面に付着して生息する事が多い。本種は河川水の影響が強い河口域ではあるが、流れが緩やかな止水的環境を好む。河口域の地形が護岸工事などで単純化され、常に流水にさらされるような環境に改変されると生息できない。また河川水の水量が豊かではなく、著しく富栄養化した河川の河口域では個体数が少ない。県内ではヨシ原湿地という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているので本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。現在確認されている生息地は10ヶ所以下である。絶滅の可能性が高い種であると評価された。

【形態】

殻径約20mmの半球形平巻きで螺塔が現れない。名前の通り殻口は広がる。蓋は半円形で、石灰質。南西諸島には近似種が数種存在するが、本種はそれらとは殻形態からも明らかに別種である。学名は確定していない。



上段：名古屋市庄内川河口, 2008年7月13日, 下段：西尾市矢作川河口, 2009年7月15日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように愛知県での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて現在10ヶ所以下である。庄内川、矢作川河口域では健全な個体群が残っているが、他の生息場所では個体数が非常に少ない。県内では最も広大で内湾性貝類の多様性の高い汐川干潟でも本種の個体数は著しく少ない。

【世界及び国内の分布】

日本、中国大陸、国内では東京湾・山口県北長門海岸以南～九州に分布する(福田・木村, 2012)。東京湾、三浦半島では絶滅(千葉県, 2000; 葉山しおさい博物館, 2001)し、三河湾、伊勢湾、瀬戸内海、有明海には健全な個体群が存在する。南西諸島以南の太平洋、インド洋に広く分布する近似種とは別種。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したように、ヨシ原湿地周辺の塩沼やヨシ原内の水たまりなど、直接河川水の当たらない淀んだ泥干潟を好む。泥上にも生息するが、朽ち木や転石があればその下面に集まる。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【特記事項】

県内は分布の東限になっている。千葉県(2000)では絶滅生物にランクされている。葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

【引用文献】

- 福田 宏・木村昭一, 2012. ヒロクチカノコ, p. 20. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.  
葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.  
千葉県, 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック動物編. 438pp.  
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54: 44-56.  
水産資源保護協会, 1996. 軟体動物. 日本の希少な野生水産生物に関する基礎資料(Ⅲ), 90pp.  
千葉県, 2000. 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック動物編. 438pp.

(木村昭一)

ミヤコドリ *Phenacolepas pulchella* (Lischke)

## 【選定理由】

本種は、三河湾に分布記録はあったものの、その根拠試料(標本)などが全く確認されず、愛知県下での生息が疑われる幻の種であった。しかし、2014年5・6月に行われた調査の際、知多郡美浜町河和(三河湾)の河口域で複数の本種が確認され、初めて愛知県下の本種の生息状況が示された(早瀬・木村, 2017)。その後、佐久島の一部海岸でも本種の生息が確認された(早瀬・木村, 2020)。愛知県下では、近年になって生息が明らかになったばかりで、これ以前の明確な生息記録がないため、減少傾向は不明であるが、全国的にも絶滅が危惧される種であり、三河湾での生息地が局地的であることから、絶滅の危険性の高い種と考えられる。三河湾においては、これまでに西日本を中心とする全国各地に知られる本種の生息域と比べて、生息地が極端に狭い範囲に限定されていることから、全国より高いランクに位置付けられた。

## 【形態】

成貝は、殻長(長径) 8.8~10.2 mm 程度の長楕円形で、膨らみの強い笠形の小型種である。殻は赤褐色を呈する。内面の後端には隔壁が生じない。殻頂は、殻の後端に位置し、殻頂部から細く顕著な放射肋が多数現われる。放射肋上には、微顆粒状突起が並ぶ。殻表には黒色付着物(硫化鉄)が沈着している場合が多くある。軟体は濃い赤色で、外套膜の縁には小さな指状突起が認められる。頭触角はきわめて細長く、基部には黒色のきわめて小さな眼を有する。



上段: 南知多町河和, 2014年5月16日, 下段: 西尾市佐久島, 2017年6月25日, 早瀬善正採集

## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

現時点では、知多郡美浜町河和および佐久島の、三河湾の2箇所の潮間帯に僅かな分布記録が知られる(早瀬・木村, 2017; 2020)。

## 【世界および国内の分布】

朝鮮半島にも分布するとされる(福田・木村, 2015)。房総半島・佐渡~南西諸島に分布するとされ、湾口に近い汽水域を好むようである(福田・木村, 2015)。

## 【生息地の環境/生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、三河湾の湾奥~湾口にかけての中間に位置し、かつ僅かな範囲の汽水環境に分布が限定されていると考えられる。伊勢湾奥の干潟環境では全く確認されていないことから、汽水環境ながら一定程度以上の、汽水環境としては高い塩分濃度が本種の生息には必要ではないかと推測される。深く埋没した石の下面のみに付着し、生息空間として海水の循環があり酸素の流通がある付着場所以外は、黒色の硫化物からなる還元的環境に生息する。特殊生息環境に棲む種とされる。卵嚢が6月に多数確認されており、この時期は、少なくとも本種の産卵期に該当すると考えられる(早瀬・木村, 2020)。殻の炭酸カルシウムが溶出して、殻表の彫刻が全く無くなり薄く脆くなった個体と、彫刻の残る若い個体や小形の幼貝までが同一時期、同一環境に生息している状況(早瀬・木村, 2017)から推測して、本種の寿命は、複数年あると思われる。

## 【現在の生息状況/減少の要因】

現時点の愛知県内では、河和(三河湾)と佐久島の潮間帯転石地の2箇所で生息確認されたのみである。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されていないが、生息場所はきわめて狭く局所的であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

## 【保全上の留意点】

本種の生息が確認される転石地などの微環境を維持することが重要である。

## 【特記事項】

浮遊幼生が広範囲に広がるが、定着できる環境が近年、急速に減少していると考えられている(福田・木村, 2015)。特に、愛知県下では、本種の生息に適した環境は殆どないと思われるので、現状の生息地の保全と個体群の保護が特に重要である。

## 【引用文献】

- 福田 宏・木村昭一, 2012. ミヤコドリ, p.26. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, xvii + 285 pp. 東海大学出版会, 秦野.  
早瀬善正・木村昭一, 2017. 河和(三河湾)の内湾潮間帯の貝類相, ちりぼたん, 47(1-4): 28-42.  
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相, ちりぼたん, 50(1): 33-79.

## 【関連文献】

- 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック 2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵 8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)

ツメナリミヤコドリ *Phenacolepas unguiformis* (Gould)

【選定理由】

本種は、三河湾の分布記録はあったものの、根拠試料(標本)などが全く確認されず、この記録に関しては、三河湾に広く分布するヒナユキズメ(670頁を参照)の誤認記録と判断された(早瀬・木村, 2020)。ただし、近年の調査により、愛知県下初記録として佐久島のほか、伊良湖岬や日間賀島にも生息が確認され、愛知県下での本種の存在が確認された(早瀬・他, 2019; 早瀬・木村, 2020)。しかし、いずれの生息地でも10個体に満たない程度の少数個体が確認された程度で、稀産種である。環境省レッドリスト2019では外海に面した環境に生息するため対象外の種と思われ、ランク外である。愛知県下では、近年になって生息状況が明らかになったばかりで、これ以前の明確な生息記録がないため、減少傾向は不明であるが、三河湾での生息地が湾口部のみで局地的であり、個体数も少ないことから、絶滅の危険性の高い種と考えられる。

【形態】

成貝は、殻長(長径)6.2~8.6mm程度の円みの強い楕円形で、膨らみがきわめて弱くほぼ平らな笠形の小形種である。内面の後端には、ごく浅い隔壁を有する。殻は、白~淡黄褐色を呈する。殻頂は、殻の後端に位置し、殻頂部からきわめて細く繊細な放射肋が多数現われ、弱い成長肋と交差し、布目状彫刻となる。周縁部では彫刻がやや強くなり、微細な鱗片状突起となる。軟体は淡紅色で、頭触角は細長い。



西尾市佐久島, 2017年6月24日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

現時点では、佐久島・日間賀島・伊良湖岬の、三河湾湾口部の3箇所の僅かな範囲の潮間帯に生息記録が知られる(早瀬・他, 2019; 早瀬・木村, 2020)。

【世界および国内の分布】

韓国には、本種の分布が知られる(権・他, 1993)。宮城県南三陸町での確認記録があり(木村・他, 2016)、それ以南の、大分県(濱田, 2008)や宮崎県(西, 2019)などの九州まで分布記録がある。亜熱帯域には本種の分布記録がないため、日本周辺の温帯域に分布範囲が限られると考えられる。

【生息地の環境/生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、三河湾の湾口に位置し、外海の影響の強い潮間帯下部の転石地である。生息地周辺では陸域から淡水が滲出している例が確認される。砂地に深く埋没した石の下面のみに付着し、生息空間として海水の循環があり酸素の流通がある付着場所は、酸化鉄と考えられる鉄さび様の茶褐色の付着物が石の表面を覆っている。特殊生息環境に棲む種とされる。6月には石の付着面に卵嚢が確認されており、この時期は、少なくとも本種の産卵期に該当すると考えられる。ミヤコドリ(604頁を参照)とは異なり、硫化物で黒色となる還元層周辺に生息することがない。

【現在の生息状況/減少の要因】

現時点の愛知県内では、佐久島・日間賀島・伊良湖岬の、三河湾湾口部の3箇所で生息確認されたのみである。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されていないが、生息場所はきわめて狭く局所的であり、個体数も少なく、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

【保全上の留意点】

本種の生息が確認される地域の環境を維持することが重要である。

【特記事項】

浮遊幼生が広範囲に広がるが、定着できる環境が近年、海岸部の護岸工事や開発により、急速に減少していると考えられる。特に、愛知県下では、本種の生息に適した環境(湾口部の潮間帯転石地)は殆どないと思われるので、現状の生息地の保全と個体群の保護が特に重要である。潮間帯転石地の環境をこれ以上開発しない必要がある。

【引用文献】

- 濱田 保, 2008. おおいたの貝 大分県産貝類目録・図譜, 136pp. 自刊, 大分.  
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相, ちりぼたん, 50(1): 33-79.  
早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島(三河湾)の潮間帯貝類相, かきつばた, (44): 1-15.  
権 伍吉・朴 甲萬・李 俊相, 1993. 原色韓国貝類圖鑑, 445pp. Academy Publishing Company, Seoul.  
木村昭一・早瀬善正・河辺訓受・湊 宏, 2016. 東日本大震災の津波により波伝谷地先に打ち上げられた貝類, ちりぼたん, 46(1-2): 84-90.  
西 邦雄, 2019. 宮崎市の海岸で見つけた海産貝, 九州の貝, (92): 13-15.

【関連文献】

環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)

オダマキ *Epitonium auritum* (Sowerby II)

【選定理由】

本種は外洋に面した内湾の潮下帯砂底にすむ。県内では内湾域潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は三河湾口部、伊勢湾知多半島沖などの潮通しの良い、有機質の少ない砂底の限られた場所で生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない(木村, 1996; 木村, 2000)。その後の調査でも、上述したような生息環境自体が県内にはほとんど存在せず、絶滅の可能性が高い種であると評価された。



南知多町内海沖(ドレッジ水深 2-5 m), 2000年7月28日,  
木村昭一採集

【形態】

殻長約 10 mm の高い塔形で、殻は淡褐色で 3 本の広い褐色帯がある。殻表には不規則な縦肋があり光沢がある。蓋は革質で褐色。

【分布の概要】

【県内の分布】

知多半島南部伊勢湾側から三河湾湾口部にかけて生息海域(潮下帯)があるが、その範囲は非常に狭くかつ個体数も非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本、西太平洋、国内では房総半島・佐渡島以南～九州まで分布する(木村, 2016)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように現在でも限られた場所で生貝が少数採集されているが、生息場所、個体数とも明らかに減少している。

【保全上の留意点】

上述したように県内潮下帯の環境を保全する。本種は有機質の少ない透水性の高い砂底で生息が確認されているので、特に底質の泥質化に注意を要する。

【引用文献】

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

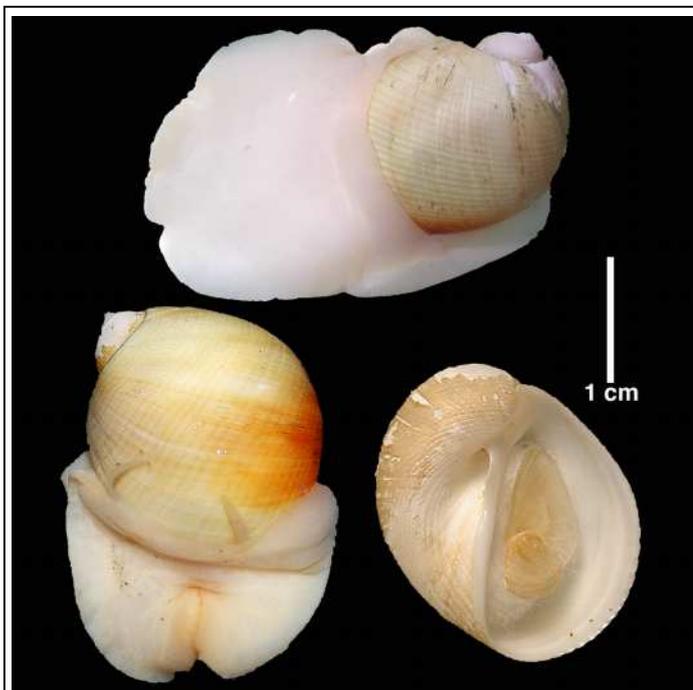
木村昭一, 2012. オダマキ, p. 62.in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

ネコガイ *Eunoticina papilla* (Gmelin)

【選定理由】

本種は内湾の泥質干潟から潮下帯にすむ。県内では、干潟と共に内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には三河湾奥部の干潟周辺に普通に見られたようであるが(愛知県科学教育センター, 1967)、1990-2000年にかけて死殻は各地で散見されるが、生貝が確認されている場所は稀であった(木村, 1996; 木村, 2000)。その後の調査でも生息が確認される場所は少ない。引き続き絶滅の可能性が高い種であると評価された。



蒲郡市三谷地先人工干潟, 2005年7月21日, 木村昭一採集

【形態】

殻径約30 mmの洋なし型で殻はやや厚い。殻表は細かい螺溝が刻まれ白色、生時には薄い淡褐色の殻皮で覆われる。蓋は革質で殻口より小さく、大ききの異なる半円を組み合わせたような形をしている。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内で死殻は比較的広範囲で採集されるが、生貝は少ない。蒲郡市三谷地先人工干潟で一時的に比較的多くの生貝(図示画像)が採集された(木村, 2005)が、その後の調査でも生貝が確認されることは稀である。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、インド洋、太平洋。国内では房総・男鹿半島以南～南西諸島に分布する(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。本種は潮間帯にも分布するが水深20 mまでの潮下帯にも分布し、二枚貝類の殻に穴を開けて捕食する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように現在でも三河湾奥から湾口部にかけて比較的新鮮な死殻は採集できるが、生貝はきわめて稀である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 愛知県科学教育センター, 1967. 愛知の動物. 222pp.  
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報):3-19. 全国高等学校水産教育研究会.  
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.  
木村昭一, 2005. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相 続報. かきつばた, (31): 29-31.  
木村昭一, 2012. ネコガイ, p. 57.in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

ヤマトクビキレ *Truncatella pfeifferi* Martens

【選定理由】

本種は、内湾からやや外洋に面した内湾の塩性湿地の高潮線付近に発達したヨシ原内や転石下に生息する。県内ではヨシ原湿地やその上部へ連続する陸上植生は、護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。特に塩性湿地の陸上に近い部分は、護岸工事などで破壊されやすい。近年の三河湾島嶼域の調査でも、飛沫帯より上部の環境が保全された狭い範囲のみで生息が確認されたが、県内での本種の生息場所は非常に少なく、絶滅の可能性が高い種であると評価された。



西尾市佐久島, 2017年6月25日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約7mmの小型種。殻は淡赤褐色の円筒形で重厚。成貝では殻口が肥厚し、初期の螺塔が失われる。多くの個体では殻表に強い縦肋を持つが、螺肋が全くない個体まで個体変異がある。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように愛知県での生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)では1カ所生息地があった。その後、渥美半島先端部の三河湾側に1カ所生息地を確認した。木村・木村(1999)で報告した生息地は非常に狭い範囲であったが、2005年頃親水護岸工事で完全に消失し、その付近でも全く生息が確認できない。その後の調査で三河湾内では本種の棲息地は点在していることが明らかになったが、多くの棲息地は1m<sup>2</sup>にも満たない範囲内に限られていた。最も多産した佐久島においても、本種の棲息場所は数m<sup>2</sup>にも満たない限定的な範囲内であった(早瀬・木村, 2020)。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島。国内では北海道南部から種子島まで分布する。国内に分布する本科には近年未記載種が多数存在する事が知られており(福田・他, 2017)、分類学的な再検討に伴い本種の分布域も見直される可能性がある。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生にかけての打ち上げ物の下や転石下に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【特記事項】

早瀬・木村(2020)で、佐久島より本種に近似した *Truncatella* sp. ハクボククビキレ(絶滅危惧ⅠB類)が記録された。

【引用文献】

福田 宏・亀田勇一・平野尚浩・久保弘文・早瀬善正・齊藤 匠, 2017. 日本産クビキレガイ科(新生腹足類:クビキレガイ上科)の再検討に向けて. *Molluscan Diversity* 5 (1-2): 33-77.

早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. *ちりぼたん*, 50 (1): 33-79.

木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. *日本ベントス学会誌*, 54: 44-56.

(木村昭一)

ヨシダカワザンショウ “*Angustassiminea*” *yoshidayukioi* (Kuroda)

【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地とそれより上部の陸上植生にかけて分布する。県内ではヨシ原湿地やその上部へ連続する陸上植生は護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村・木村, 1999)。特に、本種は他の内湾生のカワザンショウガイ科貝類と比較して生息帯が上部に位置するが、ヨシ原湿地の陸上に近い部分は護岸工事などで破壊されやすいため、生息場所の減少が心配される。県内のカワザンショウガイ科貝類としては最も絶滅の可能性が高い種と評価された。



矢作川河口, 1994年8月9日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約 3 mm の微小種。カワザンショウガイ科は小型種が多く、形態的にも近似していて同定は難しい。本種は貝殻の光沢が強いこと、肉眼ではわかりにくいですが臍孔が狭いが開いている点で県内産の他種と区別できる。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内での生息場所は著しく減少したと考えられる。木村・木村(1999)では7カ所生息地があった。カワザンショウガイ科貝類は生息地には群生するケースが多いが、本種の個体数はどの生息地でも少ない。

【世界及び国内の分布】

日本固有種の可能性が高く(朝鮮半島南部からの記録は未記載の別種)、北海道南部、下北半島、八郎潟～九州南部東京湾に分布する(福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生にかけての、落葉の下や湿った土壌の表面に生息する。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地と上部の陸上植生を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. ヨシダカワザンショウ, p. 46.in : 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.  
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54: 44-56.

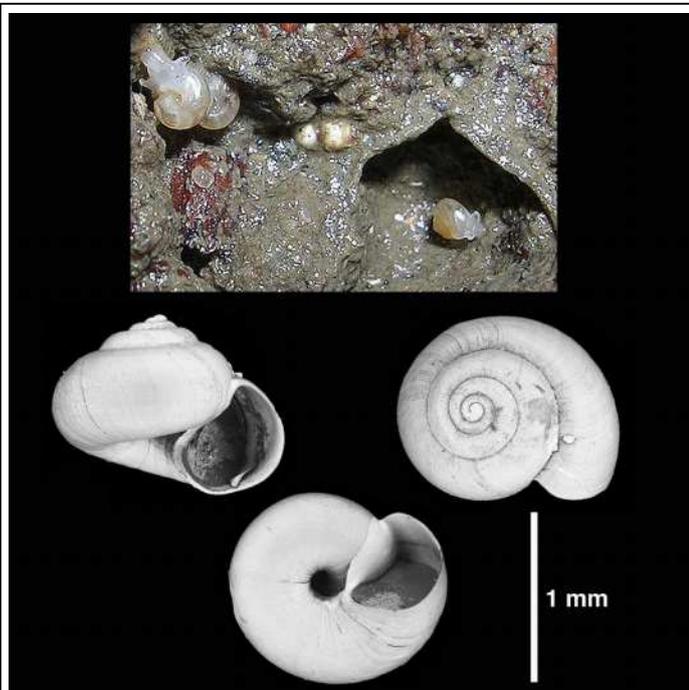
(木村昭一)

カハタレカワザンショウ *Assimineidae* gen. et sp.

【選定理由】

本種は和名だけが提唱された未記載種で、属位についても不明である(和田ほか, 1996; 福田, 2012)。県内では内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地内の転石下より採集された(木村・木村, 1999)。本来は内湾域の転石地の深く埋もれた石の下面が生息環境である。その後の調査で、河和(三河湾)の砂礫が堆積した上部付近の埋没石の裏より5個体が採集された(早瀬・木村, 2017)。県内における生貝の記録は2例しかない。

本種は微小種でかつ特殊な環境に棲むので発見が難しい種ではあるが、県内での生息記録の少なさから、絶滅の可能性が高い種であると評価された。



南知多町河和, 2014年5月16日, 早瀬善正採集

【形態】

カワザンショウガイ科としては特異な形態で、螺塔が低く臍孔は大きく開く。殻径が約1.5 mm程度の微小種。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように現在まで確認された生息地は2ヶ所のみである。

【世界及び国内の分布】

現在まで日本でのみ発見されている。東京湾(小櫃川河口)・油谷湾~九州南部(川内川河口)に分布する(福田, 2012)。東海地方では英虞湾(河辺, 2000)でも生息が確認されている。

【生息地の環境/生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況/減少の要因】

本種は内湾から湾口部の河口域の特殊な生息環境に生息し、生息場所自体が護岸工事や埋め立てなどで容易に改変もしくは消失する可能性が高い。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯付近の環境を保全する。干潟の埋め立てをこれ以上行わないこと、護岸工事については干潟側を一切改変しない工法などを用いて施工する必要がある。工事の過程で重機を干潟側に一時的に乗り入れることだけでも大きな影響を及ぼすと考えられる。

【特記事項】

本種の和名の由来は「彼は誰」であり「カワタレ」と表記するのは誤りである(福田, 2012)。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. カハタレカワザンショウ. p. 53.in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 早瀬善正・木村昭一, 2017. 河和(三河湾)の内湾潮間帯の貝類相. ちりぼたん, 47(1-4): 28-42.
- 河辺訓受, 2000. 志摩地方採集・観察調査会報告. かきつばた, (26): 21-24.
- 木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54: 44-56.
- 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

## ワカウラツボ *Wakauraia sakaguchii* (Kuroda et Habe)

### 【選定理由】

本種は、内湾奥の河口域に発達したヨシ原湿地周辺のやや深く埋もれた転石や朽ち木の下に生息する。県内ではヨシ原湿地という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる(木村, 1989; 木村・木村, 1999)。年による変動も大きい。庄内川河口域、藤前干潟には健全な個体群が確認されている。その他の生息地での個体数は非常に少ない。絶滅の可能性が高い種であると評価された。

### 【形態】

殻は殻長約 5 mm と小型で、長卵形。臍孔はなく、蓋は革質で薄い。近似種のカワグチツボ *Fluviocingula elegantula* (A. Adams) とは臍孔がない点、殻が厚い点などで区別される。



名古屋市庄内川河口, 2008年7月13日, 木村昭一採集

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

上述したように生息場所は著しく減少したと考えられ、木村・木村(1999)を含めて現在4カ所である。庄内川河口域・藤前干潟(名古屋市)以外の生息地では個体数は非常に少ない。

#### 【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島南部(順天湾)、国内では三河湾～九州に分布する(福田・久保, 2012)。

### 【生息地の環境／生態的特性】

県内では、上述したようなヨシ原湿地周辺の10 cm以上深く埋もれた石や朽ち木の下面に付着している。稀にヨシ原群落内の小さな水たまりにたまった朽ち木や落ち葉に付着している。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

上述したようなヨシ原湿地が護岸工事などで破壊され、生息地が減少している。

### 【保全上の留意点】

上述したようなヨシ原湿地を保全することはいうまでもなく、周辺水域の水質も保全する必要がある。

### 【特記事項】

県内の生息地は分布の東限になっている。模式産地の和歌山県和歌浦では環境悪化のため採集されず、有明海から再発見されるまで長らく幻の貝であった(木村, 1987)。

レッドデータブックなごや2004(木村, 2004)では、本種と正しく同定された藤前干潟産の生貝標本が図示されていたが、レッドデータブックなごや2015(木村 加筆 川瀬, 2015)では福岡県産の標本に差し替えられている。その地で採集された貝類の画像はレッドデータブックの大きな資料(データ)の一つなので、他産地の標本はなるべく使用しないことが望ましい。

### 【引用文献】

- 福田 宏・久保弘文, 2012. ワカウラツボ, p. 38. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.  
木村昭一, 1987. ワカウラツボを有明海にて採集. 南紀生物, 29(2): 95.  
木村昭一, 1989. ワカウラツボを汐川干潟(三河湾)にて採集. 南紀生物, 31(2): 130-131.  
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54: 44-56.  
木村昭一, 2004. ワカウラツボ, p. 286. in: レッドデータブックなごや2004 動物編. 368pp. 名古屋市環境局.  
木村昭一 加筆 川瀬基弘, 2015. ワカウラツボ, p. 428. in: レッドデータブックなごや2015 動物編. 503pp. 名古屋市環境局.

(木村昭一)

## アラウズマキ *Circulus duplicatus* (Lischke)

### 【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も、日間賀島の潮間帯の転石下や同島南沖水深 2-10 m の砂泥底より死殻は比較的普通に採集されたが、生貝は確認されなかった (木村, 1995, 1996)。近年の三河湾内の調査では、沖島と梶島で死殻が少数確認され (早瀬・他, 2015, 2016)、佐久島 (早瀬・木村, 2020) では非常に狭い範囲であるが、潮通しが良く、礫や石の多い潮間帯砂泥底の埋もれ石下面から比較的多くの生貝が確認され、日間賀島 (早瀬・他, 2019) でも生貝が普通に確認された。急速な回復状況が確認されたので、前回 (CR) よりランクダウンすべき種と評価された。



西尾市佐久島, 2017年6月24日, 早瀬善正採集

### 【形態】

殻径約 5 mm の微小な円盤形で殻は厚い。殻周辺に太い螺肋が角張る。臍孔は広い。

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

県内では近年、佐久島、日間賀島で生貝が確認されている。

#### 【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島に分布し、日本では房総・男鹿半島以南から九州まで分布する (福田, 2012)。

### 【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように、県内では長期間生貝が採集されていなかったが、近年の三河湾内の潮通しの良い礫の多い砂質干潟から転石地にかけての底質の有機物の堆積量が減少し、無酸素層の発生が軽減され、埋もれ石の下面に生息する貝類の回復状況が確認されている。本種はそのような貝類を代表する種といえる。

### 【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

### 【引用文献】

- 福田 宏, 2012. アラウズマキ, p. 41.in : 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 早瀬善正・木村昭一・大貫貴清, 2015. 沖島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相. かきつばた, (40): 23-30.
- 早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島 (三河湾) の潮間帯の貝類相. かきつばた, (41): 27-39.
- 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
- 早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島 (三河湾) の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15.
- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

(木村昭一)

シラギク *Pseudoliotia pulchella* (Dunker)

【選定理由】

本種は内湾の潮下帯砂泥地にすむ。内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も、日間賀島の潮間帯の転石下や同島南沖水深 2-10 m の砂泥底より死殻は比較的多く採集されたが、生貝は採集できなかった (木村, 1995, 1996)。近年の三河湾内の調査では、前島 (早瀬・他, 2015b)、沖島 (早瀬・他, 2015a)、梶島 (早瀬・他, 2016)、佐久島 (早瀬・木村, 2020)、日間賀島 (早瀬・他, 2019) において、潮通しの良い礫や石の多い潮間帯砂泥底の埋もれ石下面から比較的多くの生貝が確認された。急速な回復状況が確認されたので、前回 (CR) よりランクダウンすべき種と評価された。



【形態】

殻径約 3 mm の微小な円盤形で殻は厚い。殻表には太い螺肋と縦肋が交差して、格子状になる。臍孔は広い。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、県内では近年回復傾向が認められ、三河湾の広い範囲で生貝が採集されるようになった。生息地自体の面積は依然として小さく、分断されている。また本種は、特殊な環境に限定的に生息するが、個体数が比較的多い生息地も認められた。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島に分布し、日本では三陸海岸・男鹿半島～九州まで分布する (福田, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように、県内では長期間、生貝が採集されていなかったが、近年の三河湾内の潮通しの良い礫の多い砂質干潟から転石地にかけての底質の有機物の堆積量が減少し、無酸素層の発生が軽減され、埋もれ石の下面に生息する貝類の回復状況が確認されている。本種はそのような貝類を代表する種である。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. シラギク, p. 42. in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 早瀬善正・木村昭一・大貫貴清, 2015a. 沖島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相. かきつばた, (40): 23-30.
- 早瀬善正・大貫貴清・吉川 尚・松永育之・社家間太郎, 2015b. 前島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相 - 特徴的な 16 種の記録. ちりぼたん, 45 (3): 105-122.
- 早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島 (三河湾) の潮間帯の貝類相. かきつばた, (41): 27-39.
- 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.
- 早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島 (三河湾) の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15.
- 木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報 (第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
- 木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報 (第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

(木村昭一)

スミスシラゲガイ *Mitrella yabei* (Nomura)

## 【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖で生貝が採集されているが、個体数は非常に少ない(木村, 1996; 木村, 2000)。その後の調査では、2008年に名古屋港沖で死後間もない死殻が採集されたが、生息が確認できない。和田ほか(1996)では、危険とランクされている。引き続き、絶滅の可能性が高い種であると評価された。

## 【形態】

殻長約 10 mm の長い紡錘形の貝で、殻底は強くくびれ、殻口は肥厚しない。殻表は黄褐色で、不規則な褐色の縦帯をもつ。



1: 名古屋市名古屋港沖(ドレッジ水深 5-15 m), 2008年 10月 9日,  
2: 南知多町内海沖(ドレッジ水深 15 m), 2001年 7月 31日,  
木村昭一採集

## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

上述したように、県内潮下帯での個体数は非常に少ない。名古屋港沖、知多半島南部から伊勢湾湾口部で死殻が採集されるが、生貝が確認できない。渥美半島から渥美外海にかけての潮下帯砂底には近似種のシラゲガイ *Mitrella lischkei* (Smith) が分布する(木村, 2017)。

## 【世界及び国内の分布】

日本、韓国(関, 2001)。国内では三陸海岸以南から九州まで分布する。

## 【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように近年生貝が採集出来ない。古い死殻が稀に採集されるのみで、危機的生息状況である。

## 【保全上の留意点】

上述したように県内潮下帯の環境を保全する。本種はアマモ場周辺で生息が確認されているので、同様に保全することが必要であろう。

## 【特記事項】

生息水深帯がやや深く、モニタリングが困難な事もあり、国のレッドデータブックには掲載されていないが、今後絶滅危惧種とすることも考慮するのが望ましい。

## 【引用文献】

関德基, 2001. 新原色韓国貝類図鑑. 332pp. 関貝類博物館, 韓国.

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

木村昭一, 2017. 伊良湖漁港内で採集された貝類. かきつばた, (42): 6-12.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

## アオモリムシロ *Reticunassa hypolia* (Pilsbry)

### 【選定理由】

今までにアオモリムシロ *Reticunassa hypolia* (Pilsbry)、クロスジムシロ *Reticunassa fratercula* (Dunker)、ウネムシロ *Reticunassa hiradoensis* (Pilsbry) は、全て同一種の亜種関係に位置付けられるなど分類が混乱していた (肥後・後藤, 1993; Higo et al., 2001; 土屋, 2000)。しかし、花木・他 (2014) による各種のミトコンドリア DNA による解析の結果では、3種は独立種で、また県下にはアオモリムシロ (タイプ産地: 青森県陸奥湾) が分布すると判断した (早瀬・他, 2019)。

県下では日間賀島、知多半島南端部 (早瀬・他, 2019) で生息が確認されている。日間賀島では潮間帯岩礁の砂溜まりで小型海藻の基部や岩礁の周囲などに 10 個体に満たない少数の生貝が確認された (早瀬・他, 2019) に過ぎないが、知多半島南端部の 2ヶ所では健全な個体群が確認された (木村, 未発表資料)。

本種は県下では近年 3ヶ所の生息地が確認されているが、いずれも潮間帯中部付近に生息し、垂直分布の幅が非常に狭い。これらの生息状況より、絶滅の危険性が高い種であると評価された。

### 【形態】

殻長 13 mm 前後、雌個体は雄個体よりやや大きい。殻質は厚く、殻表にはうね状に顆粒突起が並んでいる。愛知県産個体の殻の色彩は黄褐色から灰褐色で黒色、橙色、黄色が入り交じる個体が多く、タイプ産地の個体と比べると変異が大きく、淡色で明るい色彩の個体が多い。ウネムシロにもやや近似するが、ウネムシロは大型で、螺塔がやや高く、殻の色彩が黄・橙・黒の単色もしくは灰褐色下地に白い色帯が入る 4タイプが出現し (木村・木村, 2013)、色彩での区別も容易である。またウネムシロの雌と雄個体に殻の大きさに差はない。近似種で未記載種のアツミムシロ *Reticunassa* sp. とも近似するが、アツミムシロは殻が細く、殻表の彫刻が弱く、色彩変異も少ない。また、雌個体は雄個体より著しく大型である。



南知多町日間賀島, 2018年6月16日, 木村昭一採集

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

本種としての県内での採集記録は、早瀬・他 (2019) が初めてであるが、それ以前の 1995年8月にも日間賀島で生貝 2個体が採集されていた (早瀬・他, 2019)。その後、知多半島南部の 2ヶ所で健全な個体群が確認された。

#### 【世界および国内の分布】

本種の分布域は従来、三陸以北、北海道の潮間帯から潮下帯 (例えば, 土屋, 2017) と言うように、北方系種と考えられ、北海道以南には近似種のクロスジムシロが分布するとされる (例えば, 土屋, 2017) ことが多かった。しかし、花木・他 (2014) では本種の分布域は南側に広く、日本海側は山口県、太平洋側は三重県 (伊勢湾湾口部) まで分布する事が明らかとなった。伊勢湾湾口部沿岸 (三重県側) には本種の健全な個体群の生息地が比較的多く現存している。クロスジムシロは、済州島 (韓国) に分布している (木村, 未発表資料)。また、本種と近似した標本が新原色韓国貝類図鑑 (関, 2001) に図示されているが、画像だけの判断は難しく、本種が韓国に分布するかどうかは検討を要する。また県下での本種の垂直分布は潮間帯の中潮帯付近に限定されており、潮下帯には生息していない。

### 【生息地の環境／生態的特性】

本種は外洋に面した潮通しの良い内湾の潮間帯 (中潮線付近) の岩礁周辺の砂溜まりで小型海藻の基部や岩礁の周囲などに生息する。また本種の生息環境には陸域からの淡水のしみだしがある場合が多い。本種の生息できる場所は、貝類の多様性が高い。腐肉食性で、死肉などに集まることもある。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

県下では生息海域は狭く、個体数は多くない。生息環境自体が消失したことが一番大きな要因と考えられる。

### 【保全上の留意点】

本種の生息環境である上述したような生息環境を保全することが重要であろう。

### 【特記事項】

本種の種名で県下よりの生息記録は早瀬・他 (2019) が初めてで、それ以前の報告ではクロスジムシロとして記録されているが、本種の誤りである。

### 【引用文献】

- 関德基, 2001. 新原色韓国貝類図鑑. 332pp. 関貝類博物館, 韓国.  
花木勇太・香取祥人・林 誠司・木村昭一, 2014. ミトコンドリア DNA によるクロスジムシロ種群の予察的系統解析. *Venus* 72 (1-4): 148.  
早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島 (三河湾) の潮間帯貝類相. *かきつばた*, (44): 1-15.  
木村昭一・木村妙子, 2013. オリイレヨウバイ科.in: 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典 (著) 干潟ベントスフィールド図鑑. pp. 33, 145-145. 日本国際湿地保全連合, 東京.  
土屋光太郎, 2000. クロスジムシロ.in: 奥谷喬司 (編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. pp. 450-451. 東海大学出版部, 平塚.

### 【関連文献】

- 日本ベントス学会 (編), 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版部, 秦野.

(木村昭一)

ヒメムシロ *Reticunassa multigranosa* (Dunker)

【選定理由】

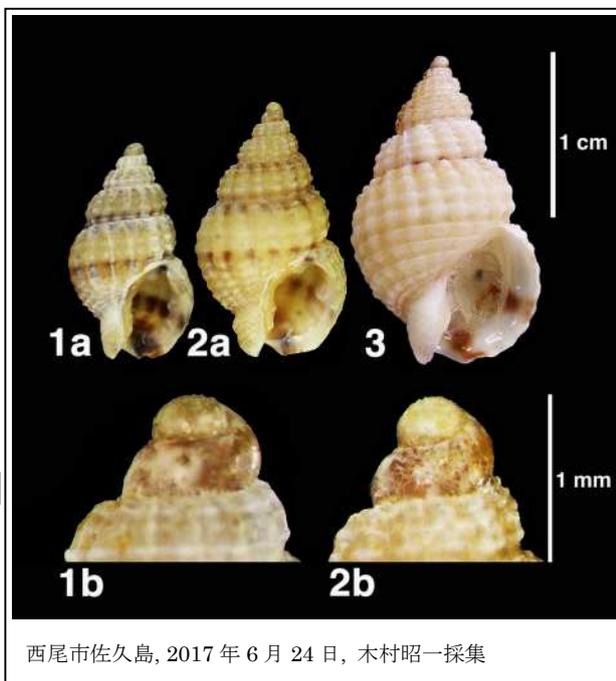
【形態】の項目に記述するが、本種には内湾型と外洋型の2型が知られており(木村・木村, 2013)、別種の可能性も高く、分類学的な再検討が必要であるが、今回は1種として扱う。

本種は、内湾奥の潮間帯下部から水深5 m程度の潮下帯の、潮通しの良いよく保全されたアマモの多い砂泥底及び外洋に面した湾口部の砂泥底に生息し、本種の生息できる場所は、貝類の多様性が高い。

本種は、これまで三河湾では生息が確認されておらず、早瀬・他(2016)で死殻のみの確認ではあるが、初めて本種の生息が示唆された。その後、木村(2017)により伊良湖港(三河湾)にて県下で初めての生貝を報告した。いずれの生息地でも個体数が非常に少なく、生息水深帯もやや深い潮下帯まで及ぶので、モニタリングにやや難しい面があるが、危機的な生息状況より、絶滅の危険性が高い種と評価された。

【形態】

本種は2型が知られている(木村・木村, 2013)が、内湾型(図1)は、殻が細長く濃色で、殻の大きさ、色帯の濃淡の変異幅が小さい。外洋型(図2, 3)の殻は殻径が大きく円みが強く大形で、色彩は淡色であり、殻の大きさ、色帯の濃淡の変異幅(多様性)も大きい(早瀬・木村, 2020)。内湾型では、殻長10 mm前後、外洋型では三河湾では10-15 mmの個体が多く、大型の個体では20 mmを越える。また、胎殻の形状にも相違があり、内湾型の胎殻(図1b)は、外洋型(図2b)と比較して螺管が太く緩く巻き、殻径は大きい(木村・木村, 2013; 早瀬・木村, 2020)。



【分布の概要】

【県内の分布】

本種の県内での採集記録は、早瀬・他(2016)で初めて本種の死殻の採集報告がされ、木村(2017)により初めて県下(伊良湖港: 三河湾)での生貝採集報告がされた。その後、佐久島(早瀬・木村, 2020)、日間賀島(早瀬・他, 2019)での生息が確認された。

【世界および国内の分布】

中国北部、韓国、フィリピン、北海道以南の潮間帯から水深20 mの砂泥底に分布するとされている(土屋, 2017)が、フィリピンにおける本種の分布には疑問が残る。

本種の内湾型は東北地方以南から三河湾、伊勢湾、英虞湾、瀬戸内海、外洋型は房総半島、三河湾・伊勢湾湾口部、熊野灘沿岸内湾で生息が確認されている(木村, 未発表資料)。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は、内湾奥の潮間帯下部から水深5 m程度の潮下帯の、潮通しの良いよく保全されたアマモの多い砂泥底及び外洋に面した湾口部の砂泥底に生息し、本種の生息できる場所は、貝類の多様性が高い。腐肉食性で、籠網や漁網に絡まった死肉などに集まることがある。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在県下では生息海域は狭く、個体数は少ない。上述のような本種の生息環境自体が消失したことが一番大きな要因と考えられる。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である上述したような生息環境を保全することが重要であろう。

【特記事項】

生息水深帯がやや深く、モニタリングが困難な事もあり、国のレッドデータブックには掲載されていないが、今後絶滅危惧種とすることも考慮するのが望ましい。また今後2型についての分類学的な検討が必要である。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島(三河湾)の潮間帯貝類相. かきつばた, (41): 27-39.  
早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島(三河湾)の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15.  
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. ちりばたん, 50(1): 33-79.  
木村昭一, 2017. 伊良湖漁港内で採集された貝類. かきつばた, (42): 6-12.  
木村昭一・木村妙子, 2013. オリイレヨフバイ科.in: 鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典(著) 干潟ベントスフィールド図鑑. pp. 33, 145-145. 日本国際湿地保全連合, 東京.  
土屋光太郎, 2017. ヒメムシロ.in: 奥谷喬司(編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版]. pp. 247, 916. 東海大学出版部, 平塚.

【関連文献】

- 日本ベントス学会(編), 2012. 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック. 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

バイ *Babylonia japonica* (Reeve)

## 【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯砂泥底にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は1960年代には多産し、バイ籠で採捕されて食用に供されていた(愛知県科学教育センター,1967;豊浜漁協聞き取り調査)。しかし、急速に減少し、三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖では死殻さえ稀であった(木村,1996;木村,2000)。その後、2000年代半ばより渥美外海でトロール漁船によって生貝が水揚げされる事があり、回復傾向が確認されている。伊勢湾三重県側では本種を対象とした漁業も行われるようになった。それに対して愛知県側では、伊勢湾湾口部から渥美外海で底引き網漁によって混獲されるが、その頻度も低く、個体数は少ない。絶滅の可能性が高い種であると評価された。



南知多町豊浜沖(トロール漁), 2019年8月8日, 木村昭一採集

## 【形態】

殻長約70 mmの卵形の貝で、殻は厚く平滑。殻表には褐色の斑列があるが、殻表が厚い褐色の殻皮で覆われる個体では斑列は不明瞭になる。蓋は革質で厚く、殻口を全てふさぐ。

## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

上述したように県内の内湾域の潮下帯では、ほとんど生貝が採集されない。伊勢湾湾口部から渥美外海で底引き網漁によって混獲されるが、その頻度も低く、個体数は少ない。

## 【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、国内では北海道南部以南～九州に分布する(山下,2012)。

## 【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息環境の悪化のほか、本種については防汚剤に含まれる有機スズ化合物に起因する雌の雄化(インポセックス)による個体数の減少が報告されている(堀口,1998)。現在有機スズ化合物が含有する防汚剤は製造中止されている。

## 【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

## 【特記事項】

水産資源保護協会(1996)では希少にランクされ、葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅にランクされている。

## 【引用文献】

堀口敏広,1998. インポセックス 巻貝類における雌の雄化現象. 海洋と生物, 117: 283-288.

木村昭一,1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一,2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

水産資源保護協会,1996. 軟体動物. 日本の希少な野生水産生物に関する基礎資料(Ⅲ), 90pp.

葉山しおさい博物館,2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏,1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

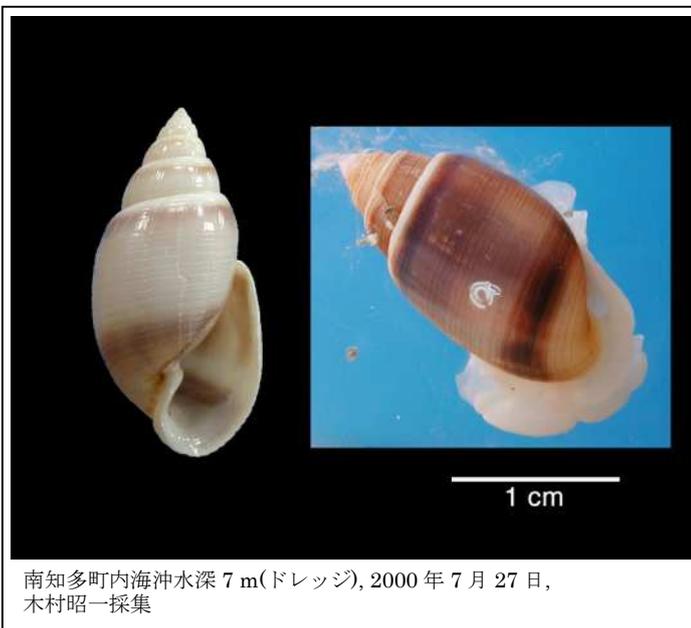
山下博由,2012. バイ, p. 72. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

## オオシノミガイ *Japonactaeon sieboldii* (Reeve)

### 【選定理由】

本種は、湾口部から外洋に面した海岸の潮間帯下部から潮下帯の砂底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も明らかに生息場所、個体数とも減少している。1999年からの3回(30地点以上)、知多半島伊勢湾側から三河湾湾口部の海域をドレッジにより調査した結果、知多半島伊勢湾側より少数の生貝が採集され(木村, 2000)、年による個体数の変動は大きい、2015年の調査でも引き続き生息が確認された。前回(EN)よりランクダウンするべき種と評価された。



### 【形態】

殻長約20mmで、殻は長卵形、薄質で光沢がある。境界の不明瞭な褐色の色帯が2本あり、殻表全面に細い螺溝をめぐらす。

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少し、生貝は個体数が少なく、生息する範囲も狭い。県内では潮間帯で生貝が確認されていない。

#### 【世界及び国内の分布】

日本、中国大陸、国内では東北地方～九州に分布する(木村, 2012)。

### 【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように潮下帯の環境は悪化しているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。生貝は透水性の高い潮下帯(水深約10mまで)の砂底に限定され、生息範囲が狭い。

### 【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

### 【特記事項】

葉山しおさい博物館(2001)では相模湾の個体群が消滅寸前にランクされていたが、年による個体数の変動は大きい、近年回復傾向が確認されている(木村, 未発表資料)。

### 【引用文献】

- 葉山しおさい博物館, 2001. 相模湾レッドデータ 貝類, 104pp.  
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.  
木村昭一, 2012. オオシノミガイ, p. 80.in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

コシノミガイ *Pupa strigosa* (Gould)

【選定理由】

本種は内湾から湾口部の干潟から潮下帯の砂泥底に生息する。県内では内湾域の干潟から潮下帯の環境が急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も明らかに生息場所、個体数とも激減している。1999年からの3回(30地点以上)、知多半島伊勢湾側から三河湾湾口部の海域をドレッジにより調査した。その結果、知多半島南部沖の伊勢湾側で少数の生貝が採集されたが、その生息範囲は狭く、その他の海域では生貝が採集されなかった(木村, 2000; 木村, 未発表資料)。その後も同所で生貝が確認されているが、県内ではその他の生息地が見つかっていない。絶滅の可能性が高い種であると評価された。



南知多町内海沖水深7m(ドレッジ), 2000年7月27日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約10mmで、殻は長卵形、やや厚質で光沢がある。殻表全面にやや強く粗い螺溝をめぐる。方形の灰色小斑が螺溝の間に多数並ぶ。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少し、死殻は伊勢湾、三河湾湾口部で稀に採集されるが、生貝が採集される範囲はさらに狭く、個体数も少ない。

【世界及び国内の分布】

日本、南シナ海。国内では福島県以南に分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟から潮下帯の環境は悪化しているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。県内では生貝は透水性の高い潮下帯(水深約10mまで)の砂底に限定され、生息範囲が著しく狭い。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

韓国では分布記録があるが、関(2001)が本種として図示した標本は別種である。

【引用文献】

関德基, 2001. 新原色韓国貝類図鑑. 332pp. 関貝類博物館, 韓国.  
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

(木村昭一)

カミスジカイコガイダマシ *Cylichnatys yamakawai* (Yokoyama)

【選定理由】

本種は、北海道南部～九州の内湾奥部干潟の中・低潮帯の砂泥底、軟泥底、アマモ場に見られる (福田, 2012)。全国的に生貝の記録は少ない種で、良好な状態の干潟に生息が限定される (福田, 2012)。

県下では干潟での確認例はほとんどなく、水深 20 m までの潮下帯の砂泥底より採集される事が多い。生貝の採集例は稀であるが、三河湾湾口部、伊勢湾 (知多半島南部沖)、伊勢湾湾口部などの潮下帯の砂泥底より死後間もない死殻と共に生貝も確認されている。生息水深帯がやや深いのでモニタリングの難しい面があるが、生貝の個体数は非常に少なく、絶滅の危険性が高い種と評価された。

【形態】

殻は殻長 8 mm で円筒形、白色半透明で殻表全体に細い波状の螺溝を巡らせる。死後時間が経つと殻は白濁し、透明感がなくなる。

【分布の概要】

【県内の分布】

死殻は前述の通り比較的広い範囲で見られるが、県下で生貝が確認されている海域は狭い。知多半島内海沖 (伊勢湾)、日間賀島沖 (三河湾湾口部) の潮下帯から水深 20 m の砂泥底よりドレッジで個体数は少ないながら生貝が採集されている。

【世界および国内の分布】

北海道南部から南シナ海の潮間帯から水深 100 m に分布する (堀, 2017)。

【生息地の環境／生態的特性】

伊勢湾、三河湾では本種が潮間帯に生息するという記録はない。生息水深のやや深い本種の生息環境についての情報は多くない。本種の生貝が普通に採集された 2000 年の知多半島内海沖の生息環境について記述する。当時は中部国際空港造成のための埋め立てが行われる前で、反時計回りで伊良湖水道から外洋水が伊勢湾内を環流しているが、その影響を受け、潮通しがよく水深 10 m までは底質に硫化水素の発生がなく、透水性の高い有機質の少ない砂底で、ナメクジウオ (原索動物) が普通に生息していた (木村, 2000 ; 木村, 2009)。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような生息地の環境自体が現在県下内湾域にはほとんど存在せず、減少の要因と考えられる。

【保全上の留意点】

本種の生息環境である上述したような生息環境を保全することが重要であろう。

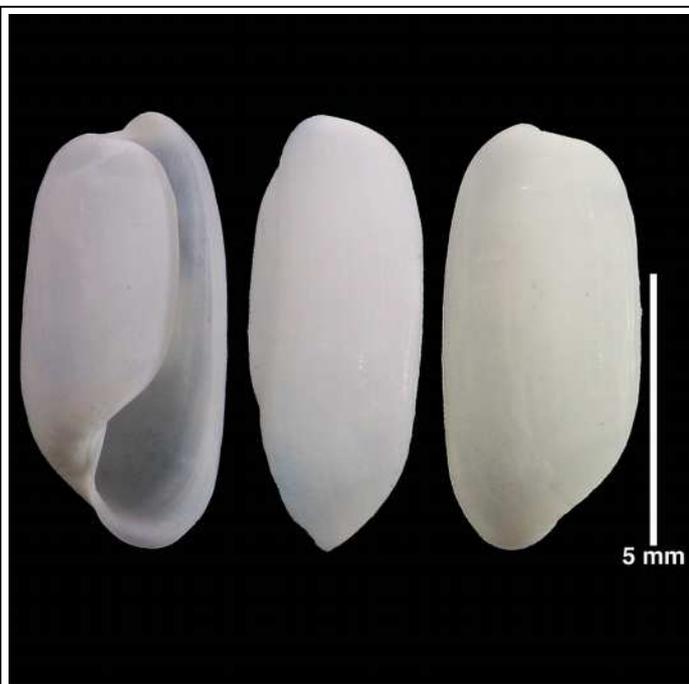
【特記事項】

福田 (2012)、堀 (2017) は本種の種小名を *angustus* としたが、*angusta* が正しいものの、本種の種名と異なる (福田, 2019)。

【引用文献】

- 福田 宏, 2012. カミスジカイコガイダマシ, p.81.in : 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 福田 宏, 2019. 軟体動物門. In : 岡山県野生動物植物調査検討会 (編) 岡山県野生動物目録 2019 ver. 1.0, 岡山県環境文化自然環境課, 岡山. [http://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/602836\\_5066757\\_misc.pdf](http://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/602836_5066757_misc.pdf)
- 堀 成夫, 2017. カミスジカイコガイダマシ.in : 奥谷喬司 (編著) 日本近海産貝類図鑑 [第二版] . pp. 438, 1095. 東海大学出版部, 平塚.
- 木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類 (予報) . かきつばた, (26): 18-20.
- 木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, (33): 14-20.
- 木村昭一, 2009. ナメクジウオ.in : 愛知県環境部 (編) , 2009. レッドデータブックあいち 2009, 621p. 愛知県.

(木村昭一)



南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深 10-20 m), 1995 年 2 月 9 日, 木村昭一採集

スオウクチキレ *Evalea suoana* (Hori et Nakamura)

## 【選定理由】

2014年7月に行われた調査の際、沖島(三河湾)で1個体のみ確認された(早瀬・他, 2015)。その後、2016年と2017年の調査では、佐久島(三河湾)において、本種のまとまった個体群が確認された(早瀬・木村, 2020)。愛知県下では、2014年以前の本種の分布記録はない。生息密度が低く、分布域も狭い稀少種である。三河湾では、国内に知られる他の生息域と比べても、生息域がより狭く限定的であることから、環境省レッドリスト2019よりも高いランクに位置付けられた。愛知県下では、近年になって初めて存在が確認された種であるため、減少傾向は不明であるが、全国的にも絶滅が危惧される種であり、三河湾での生息地が局地的であることから、絶滅の危険性の高い種と考えられる。

## 【形態】

殻長2.4 mm、殻径1.1 mm程度の丸みを帯びた紡錘形の微小種である。殻はやや厚く、各螺層には細く明瞭な螺溝が刻まれるため、幼層を除く螺塔部には3~4本、殻底には4本の帯状の幅広い螺肋を有する彫刻となる。軟体は淡黄色で頭触角は先の尖る二等辺三角形形状である。

## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

現時点では、沖島(三河湾)の潮間帯より生貝1個体のみ生息記録(早瀬・他, 2015)のほか、佐久島(三河湾)でのまとまった個体群の存在が知られる(早瀬・木村, 2020)。

## 【世界および国内の分布】

相模湾(内田, 2018)、三河湾、田辺湾奥(三長・三長, 2015)の分布記録を除くと、今のところ、瀬戸内海、宇和海、有明海にしか見出されていない(福田, 2012)。

## 【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、沖島・佐久島(三河湾)の潮間帯の転石地である。転石下のカリガネエガイの周囲に付着する個体を確認された。本種は、内湾のカリガネエガイにのみ外部寄生するとされる(福田, 2012)。ただし、例外的に、田辺湾奥ではトマヤエガイ、相模湾ではアオカリガネエガイに外部寄生する例も知られている(三長・三長, 2015; 内田, 2018)。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、沖島・佐久島(三河湾)の潮間帯転石地で生息確認されたのみである。三河湾内の他の島嶼域でも調査を行ったが、本種の生息地はこの2島以外では確認されなかった。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されてはいないが、生息場所はきわめて狭く局所的であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

## 【保全上の留意点】

現在、本種の生息が確認される転石地の微環境を維持することが最も重要である。

## 【特記事項】

本種の寄生対象種であるカリガネエガイは三河湾内に広く生息するが、その殆どの場所において、本種は生息していない。佐久島(三河湾)は、相模湾での2個体のみ分布記録(内田, 2018)を除くと、現時点での本種のまとまった個体群が確認される東限生息地であり、この地域の個体群の存在が重要であり、保護する必要がある。記載時の属は *Boonea* であったが、近年、所属が変更された(堀, 2017)。

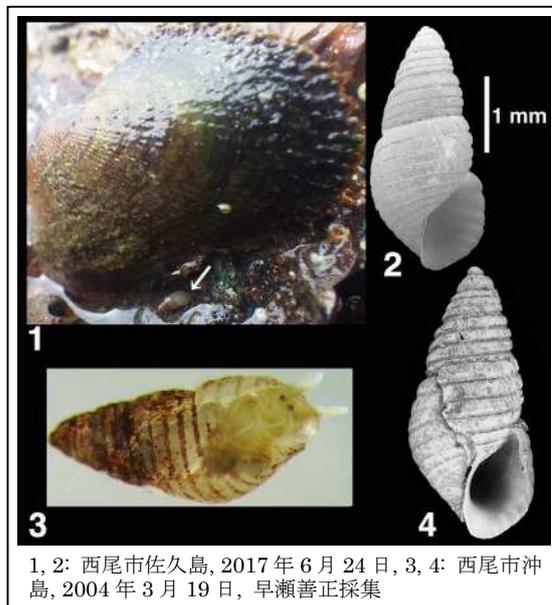
## 【引用文献】

- 福田 宏, 2012. スオウクチキレ, p.84. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, xvii + 285 pp. 東海大学出版会, 秦野.  
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相, ちりぼたん, 50 (1): 33-79.  
早瀬善正・木村昭一・大貫貴清, 2015. 沖島(三河湾)の転石地潮間帯の貝類相, かきつばた, (40): 23-30.  
堀 成夫, 2017. トウガタガイ科, pp.452-466, 1105-1123. in: 奥谷喬司(編著), 日本近海産貝類図鑑 [第二版], 1375 pp. 東海大学出版部, 平塚.  
三長孝輔・三長秀男, 2015. 和歌山県田辺湾奥干潟に生息する貝類Ⅱ, かきつばた, (40): 2-16.  
内田益次, 2018. 鎌倉市和賀江島に生息する貝類 第3報, かきつばた, (43): 43-44.

## 【関連文献】

- Hori, S. & Nakamura, Y., 1999. Two new species of the Pyramidellidae (Orthogastropoda: Heterobranchia) parasitic on bivalves in Yamaguchi Prefecture. *Venus*, 58 (4): 165-174.  
環境省自然環境局野生生物課稀少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)



1, 2: 西尾市佐久島, 2017年6月24日, 3, 4: 西尾市沖島, 2004年3月19日, 早瀬善正採集

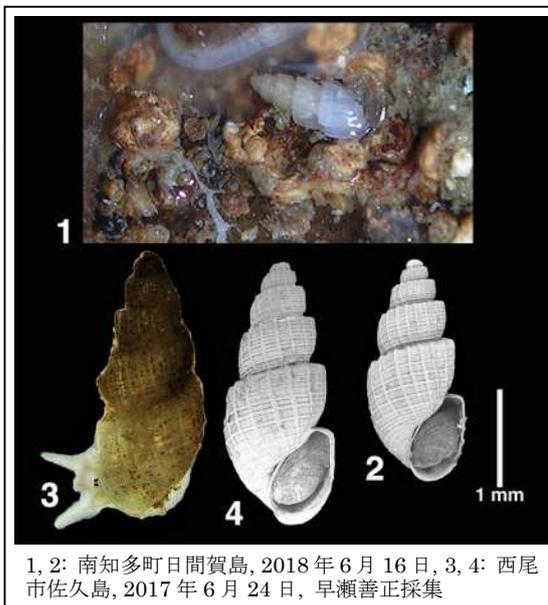
シダイタノウラクチキレ *Parthenina* sp.

## 【選定理由】

2016年と2017年の6月に行われた調査の際、佐久島(三河湾)において、愛知県下で初めて生息確認された種である(早瀬・木村, 2020)。その後、2018年6月に行われた日間賀島(三河湾)調査の際にも、生息が確認された(早瀬・他, 2019)。このほか、伊勢湾(南知多町内海海岸)でも2017年3月に死殻が確認されている(河合, 2018)。生息密度が低く、分布域も狭い稀少種である。これまでに国内各地で分布が知られているが、三河湾では、生息密度が低く、生息地も狭い範囲に限定されることから、本種を高いランクの絶滅危惧種に位置付けた。愛知県下では、近年になって初めて存在が確認された種であるため、減少傾向は不明であるが、三河湾での生息地が局地的であることから、愛知県下では、絶滅の危険性の高い種と考えられる。

## 【形態】

殻長2.6 mm、殻径1.1 mm程度の細くやや短い塔形の微小種である。殻は薄いがやや丈夫で、各螺層には間隔が規則的な細い螺肋および成長肋が交差し、格子目状彫刻となる。縫合は特に深いため、各螺層が階段状になる。胎殻は異旋するため、若干傾いている。軟体は汚白色で頭触角は先の尖る二等辺三角形形状である。眼は黒色で頭部の中央に一对近接して並ぶ。



1, 2: 南知多町日間賀島, 2018年6月16日, 3, 4: 西尾市佐久島, 2017年6月24日, 早瀬善正採集

## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

現時点では、三河湾の佐久島と日間賀島の潮間帯より生貝の生息記録が知られる(早瀬・木村, 2020; 早瀬・他, 2019)。伊勢湾(南知多町内海海岸)では、打ち上げ死殻が確認(河合, 2018)されており、愛知県下では、伊勢湾側においても生息している可能性が高い。

## 【世界および国内の分布】

世界的な分布状況については明らかでない。国内では、和名の由来となった山口県上関町四代田ノ浦(Fukuda et al., 2000)のほか、広島県(濱村, 2004)、和歌山県(三長・三長, 2015; 江川, 2016)、愛知県、神奈川県(内田, 2016)に分布が知られており、現状では少なくとも西日本から関東にかけての温帯域に広く分布すると考えられる。

## 【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の生息確認地の環境は、佐久島および日間賀島(三河湾)の潮間帯の転石地である。砂地に埋没した石の酸化鉄によると思われる茶褐色となる石裏に、他の付着生物や特殊生息環境に棲む種とされる貝類などと共に付着する個体が確認された。埋没石の埋没面が黒色の硫化物で覆われるような場所には確認されなかった。本種などが所属するトウガタガイ科は、いずれの種も外部寄生の生態を示すとされ、本種も何らかの無脊椎動物の体液を吸い餌料としている外部寄生種と考えられる。ただし、現時点で本種の寄生対象種は明らかとなっていない。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、三河湾の佐久島と日間賀島2島で生息確認されたのみであるが、伊勢湾側でも死殻が確認されており、愛知県下で広く分布している可能性も考えられる。ただし、これまでの調査では、佐久島と日間賀島より湾奥の島では確認されていないので、三河湾および伊勢湾の湾口部の転石地に生息が限定されるものと推測する。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されていないが、生息場所はきわめて狭く局地的であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

## 【保全上の留意点】

本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。

## 【特記事項】

現時点では本種の学名は明確になっていない。寄生対象種である無脊椎動物も明らかになっていないことより、生息地域全体の生物群に関して、海岸環境を含めて保護する必要がある。

## 【引用文献】

- 江川和文, 2016. 和歌山市周辺のトウガタガイ科貝類(2), かきつばた, (41): 47-52.  
 Fukuda, H., Asami, T., Yamasita, H., Sato, M., Hori, S. & Nakamura, Y., 2000. Marine molluscan and brachiopod fauna of Tanoura, Nagashima Island, Kaminoseki-cho, Yamaguchi Prefecture, Japan. The Yuriyagai, 7 (2): 115-196.  
 濱村陽一, 2004. 芸南の海産貝類図鑑, 222pp. 蘭島文化振興財団, 呉.  
 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相, ちりぼたん, 50 (1): 33-79.  
 早瀬善正・木村昭一・西浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島(三河湾)の潮間帯貝類相, かきつばた, (44): 1-15.  
 河合秀高, 2018. 南知多町内海海岸において打ち上げ採集で得られた貝類, かきつばた, (43): 30-34.  
 三長孝輔・三長秀男, 2015. 和歌山県田辺湾奥部干潟に生息する貝類Ⅱ, かきつばた, (40): 2-16.  
 内田益次, 2016. 鎌倉市和賀江島に生息する貝類, かきつばた, (41): 42-45.

## 【関連文献】

- 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵8 + xliii + 455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)

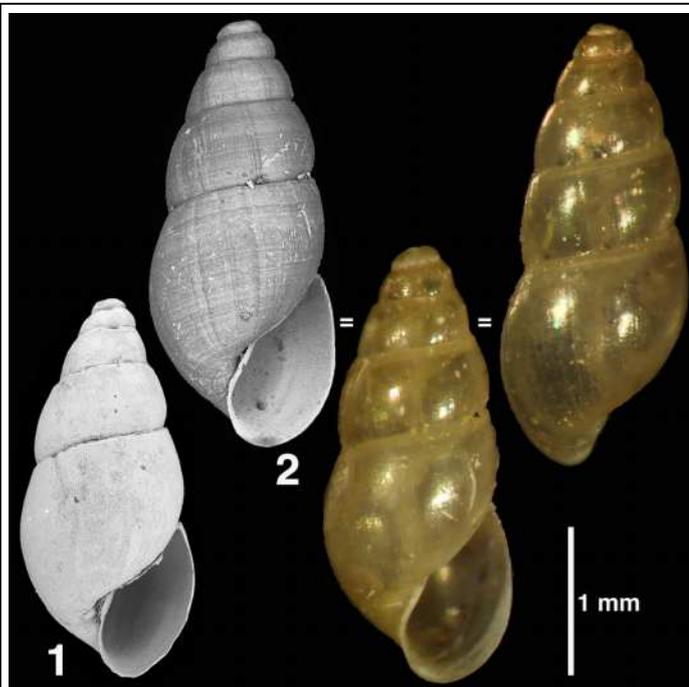
ヌカルミクチキレ "*Sayella*" sp.

【選定理由】

本種は和田ら(1996)で和名だけが提唱された未記載種である。内湾奥の泥干潟にヨコイトカケギリ(トウガタガイ科)やカワグチツボ、エドガワミズゴマツボと共に生息する。三河湾、伊勢湾の干潟から潮下帯に広く分布するヨコイトカケギリと比べて、本種は生息範囲が狭く、県内では汐川干潟の奥部の泥干潟でのみ生息が確認されているにすぎなかった(藤岡・木村,2000)。その後、伊勢湾沿岸庄内川河口(木村,2010)、三河湾沿岸河和(早瀬・木村,2017)などで本種の生貝や死殻が確認されている。本種は未記載種であるが、県内における前述のような生息環境は比較的調査が行われている。しかし、本種の生息地は少なく生息面積も小さく、個体数も少ない。絶滅の可能性が高い種であると評価された。

【形態】

殻長約4mmの微小種。殻は細い紡錘形、黄褐色で成長脈は弱く、光沢が強い。殻口軸唇には弱い襞が1本ある。同所的に生息するカワグチツボとは一見よく似ているので、混同されやすいが、本種はさらに小型で殻表が平滑で光沢があるので区別は容易である。



1: 南知多町河和, 2014年5月16日, 早瀬善正採集, 2: 豊橋市汐川干潟, 1995年8月3日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように生息場所は限られていて、生息が確認される場所は少ないが、汐川干潟では健全な個体群の生息が確認されている。美浜町布土(河合,1998)からも死殻が記録された。

【世界及び国内の分布】

未記載種であり日本でのみ記録されている。日本では陸奥湾、尾駱沼、小川原湖、志津川湾、浜名湖、三河湾、伊勢湾、田辺湾、和歌、徳島県阿南市、周防灘西部、宮崎市一ツ葉入り江、中海、油谷湾、天草等に分布する(福田・久保,2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように県内では、内湾干潟は比較的調査が進んでいるが、生息地は非常に少ない。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 藤岡えり子・木村妙子, 2000. 三河湾奥部汐川干潟の1998年春期における底生動物相. 豊橋市自然史博物館研究報告, 10: 31-39.
- 福田 宏・久保弘文, 2012. ヌカルミクチキレ, p. 88. in: 日本ベントス学会(編)干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.
- 早瀬善正・木村昭一, 2017. 河和(三河湾)の内湾潮間帯の貝類相. ちりぼたん, 47(1-4): 28-42.
- 河合秀高, 1998. 内湾性稀少種サザナミツボの新産地. かきつばた, (24): 16-17.
- 木村昭一, 2010. ヌカルミクチキレ, p. 208. in: レッドデータブックなごや2010(2004年版補遺), 316pp. 名古屋環境局.
- 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

ウスコミミガイ *Laemodonta exaratooides* Kawabe

【選定理由】

本種は、内湾域の転石地の深く埋もれた石の下面が生息環境である。打ち上げられた貝殻が知多半島の4カ所で採集されているが(河合, 1999)、生息が確認されたのは蒲郡市西浦半島の先端部の転石地が初めてであった(木村, 2001)。その後の三河湾島嶼域等の調査で多くの生息地が追加されたが、いずれの生息地でも生息面積は小さく、個体数は少ない。絶滅の可能性が高い種であると評価された。



上段: 蒲郡市西浦町, 1999年7月2日, 下段: 西尾市吉良町梶島, 2015年6月6日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約7 mm、殻は卵形で殻表は短い針毛のはえた殻皮で覆われる。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内の生息場所は蒲郡市の1カ所で初めて記録された(木村, 2001)。近年の調査で前島(早瀬・他, 2015b)、沖島(早瀬・他, 2015a)、梶島(早瀬・他, 2016)、佐久島(早瀬・木村, 2020)、河和(早瀬・木村, 2017)、日間賀島(早瀬・他, 2017)などで生息が確認された。前島、沖島以外では確認された個体数が非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、国内では本州東北地方以南～九州に分布する(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

内湾からやや外洋にかけての潮上帯転石地の、深く埋もれた石の下面が生息環境である。元々愛知県には多い生息環境ではないが、伊良湖岬のように海岸の護岸工事によって転石地、特に潮上帯部分は陸地に近く破壊されやすい。

【保全上の留意点】

上述したような生息環境を破壊しないよう、不必要な護岸工事をしないことが重要である。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一・大貫貴清, 2015a. 沖島(三河湾)の転石地潮間帯の貝類相. かきつばた, (40): 23-30.  
早瀬善正・大貫貴清・吉川 尚・松永育之・社家間太郎, 2015b. 前島(三河湾)の転石地潮間帯の貝類相 - 特徴的な16種の記録. ちりぼたん, 45 (3): 105-122.  
早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島(三河湾)の潮間帯の貝類相. かきつばた, (41): 27-39.  
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. ちりぼたん, 50 (1): 33-79.  
早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島(三河湾)の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15.  
河合秀高, 1999. 知多半島で得られたオカミミガイ類. かきつばた, (25): 12-13.  
木村昭一, 2001. 蒲郡市西浦半島転石地のオカミミガイ科貝類. かきつばた, (27): 20-21.  
木村昭一, 2012. ウスコミミガイ, p. 96.in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

ナギサノシタタリガイ *Microtralia acteocinoides* Kuroda et Habe in Habe

【選定理由】

県内では汐川干潟の河口域に発達したヨシ原湿地内より採集された(木村, 1994; 木村・木村, 1999)。打ち上げられた貝殻は知多半島2カ所から記録された(河合, 1999)。本来は内湾からやや外洋にかけての潮上帯付近の転石地の深く埋もれた石の下面が生息環境である。蒲郡市西浦半島の先端部の転石地は本種に好適な生息環境が存在し、健全な個体群を確認した(木村, 2001)。本種はウスコミミガイ *Laemodonta exaratooides* Kawabe と同所的に生息することが多いが、県内ではウスコミミガイと比べて生息地はさらに少ない。このような生息状況から、絶滅の可能性が高い種であると評価された。



左：蒲郡市西浦町, 1999年7月2日, 右：田原市汐川干潟, 1993年11月4日, 木村昭一採集

【形態】

オカミミガイ科としては最も小型種で、殻長4 mm程度。殻は長い卵形で、白色半透明。軟体部も白色で、触角の先端は細くなる。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように県内には本種の生息環境が少なく、木村・木村(1999)のほか、1999年の調査で蒲郡市西浦半島先端部(木村, 2001)に生息地を確認した。

【世界及び国内の分布】

日本固有種。西太平洋に広く分布するとする説もあるが、全てが同一種であるかどうかは検討を要する。国内では北海道南部から琉球列島まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

内湾からやや外洋にかけての潮上帯転石地の、深く埋もれた石の下面が生息環境である。元々愛知県には多い生息環境ではないが、伊良湖岬の生息地のように海岸の護岸工事によって破壊される例も少なくない。本種の生息地である転石地、特に潮上帯部分は陸地に近く海岸の護岸工事等により破壊されやすい。

【保全上の留意点】

上述したような生息環境を破壊しないよう、不必要な護岸工事をしないことが重要である。

【引用文献】

- 河合秀高, 1999. 知多半島で得られたオカミミガイ類. かきつばた, (25): 12-13.  
木村昭一, 1994. 汐川干潟(愛知県)で採集されたナギサノシタタリガイ. 南紀生物, 36(1): 75-76.  
木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ペントス学会誌, 54: 44-56.  
木村昭一, 2001. 蒲郡市西浦半島転石地のオカミミガイ科貝類. かきつばた, (27): 20-21.

(木村昭一)

アサヒキヌタレガイ *Solemya japonica* (Dunker)

【選定理由】

個体群・個体数の減少、生息条件の悪化が選定理由としてあげられる。本種はキヌタレガイ *Solemya pusilla* Gould (愛知県ランク NT) の近似種であるが、さらに外洋水の影響の強い潮下帯のアマモ場周辺の砂泥底に生息することが多い。キヌタレガイが生息する三河湾湾口部の砂泥底からは死殻さえ採集されなかった(木村, 1996; 2000)。しかし、浜名湖、三重県側の伊勢湾口部、英虞湾では生貝が継続的に確認されており、近年三河湾湾口部で操業する底引き網の漁層中より少数の死後間もない死殻が採集されたので、愛知県内にも生息していると判断された。その後のドレッジ調査、渥美外海で操業する底引き網漁業の漁層調査でも生貝は採集されていないが、比較的多くの死殻が採集された。絶滅の可能性が高い種であると評価された。



渥美半島伊良湖沖(トロール漁), 2016年8月9日, 木村昭一採集

【形態】

殻長 20 mm。殻は円筒形で厚い殻皮におおわれ非常に薄く、石灰分が少なく軽く脆い。キヌタレガイと近似するが、殻質はやや厚く、殻の色彩は濃く淡黄褐色の放射肋が明瞭で数が多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、近年三河湾湾口部で新鮮な死殻が採集されたにすぎない。本種の殻には石灰分が少なく、死後比較的早期に分解するので、おそらく付近に生息域が存在すると判断された。

【世界および国内の分布】

日本、中国大陸に分布し、国内では北海道から九州の内湾から湾口部の潮間帯から水深 20 m 程度の砂泥底に生息する(木村, 2012)。キヌタレガイより外洋水の影響の強い海域を生息環境とする場合が多い(木村, 2012)。現在干潟で生きた個体が確認されることは非常に少ない。浜名湖や瀬戸内海では潮間帯のアマモ場で生きた個体が確認されている。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾から湾口部の潮間帯から水深 20 m 程度のアマモ場周辺の砂泥底に生息する。鰓には硫化水素を用いて有機物を合成する化学合成細菌が共生している。その他の生態的な特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息状況は、【選定理由】の項参照。本種は潮通しの良い良好なアマモ場周辺に生息するので、アマモ場の消失は無論、干潟の埋め立て、無酸素水塊の発生、水質汚濁の影響を受けやすい。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。干潟から潮下帯に連続する生息環境を保全する事が重要である。

【引用文献】

- 木村昭一, 2012. アサヒキヌタレガイ, p.106.in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野市.  
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.  
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

【関連文献】

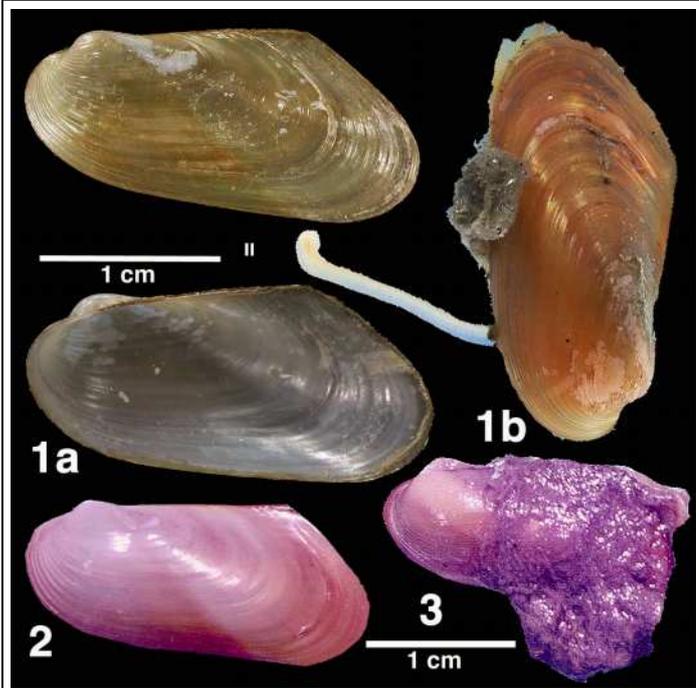
- 秀島佑典・木村妙子・木村昭一・佐藤達也, 2014. 生浦湾における貝類群集と底質環境の季節変動. Venus, 72(1-4): 139.  
鈴木孝男・木村昭一・木村妙子・森 敬介・多留聖典, 2013. 干潟生物調査ガイドブック 全国版(南西諸島を除く), 269pp. 日本国際湿地保全連合, 東京.

(木村昭一)

ツヤガラス *Jolya rhomboidea* (Reeve)

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての潮下帯泥底にすむ。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種は三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖の水深5-20 mの泥底より採集されたが、個体数は非常に少ない(木村, 1996: 木村, 2000)。和田・他(1996)では危険にランクされている。近年の名古屋港沖、三河湾、伊勢湾湾口部でのドレッジ及び小型底引き網による調査で、個体数は少ないが、生貝が採集されるようになった。この回復傾向を受けて、前回(EN)よりランクダウンするべき種と評価された。



1: 名古屋市名古屋港沖(ドレッジ水深15 m), 2008年10月9日,  
2, 3: 南知多町日間賀島南沖(ドレッジ水深10 m), 1994年10月1日,  
木村昭一採集

【形態】

殻長80 mmを越える種であるが、近年県内で採集される個体は殻長30 mm程度。後方に広がる長方形の貝で殻は非常に薄い。殻皮は薄く栗色で光沢が強い。生時には泥をかむった繭状の巣(図3)に入っている。

【分布の概要】

【県内の分布】

三河湾湾口部、伊勢湾名古屋港沖(図1a:殻, 1b:生体)、知多半島沖の潮下帯の泥底に分布するが、個体数は非常に少ない。

【世界及び国内の分布】

日本、熱帯インド、西太平洋。国内では陸奥湾以南から九州まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも著しく減少していると考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第35報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

オヤイツオキナガイ *Exolaternula* sp.

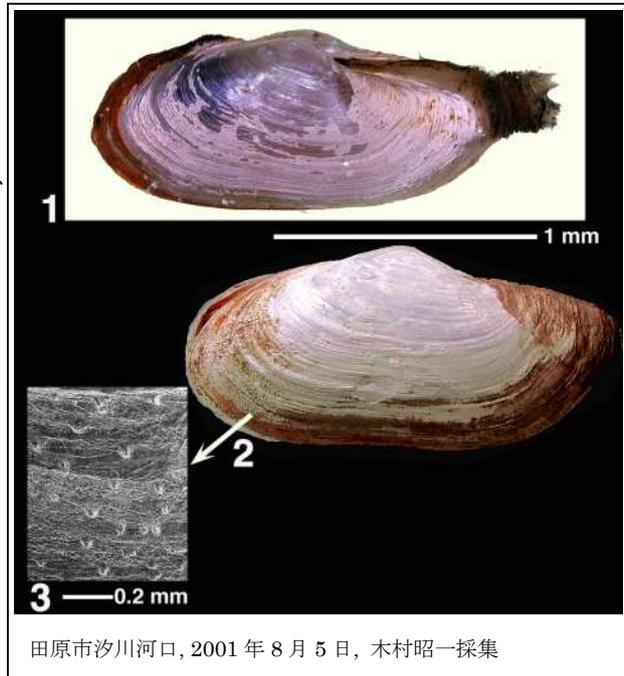
【選定理由】

本種は分布の項に示すように日本国内でも分布域は非常に狭く、各生息地は分断されている。中潮線付近に垂直分布の中心があり、近似種の中では最も陸寄りにある。そのため、護岸工事などで生息地が破壊されやすい。

本県でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、生息数とも著しく減少したと考えられる。本種は小型種で、ソトオリガイの幼貝と混同されているためか生息記録は非常に少ない。現在県内では汐川干潟の泥底に健全な個体群が残っているが、他の場所では死殻も稀である。絶滅の可能性が高い種であると評価された。

【形態】

殻長約 20 mm。日本産オキナガイ科貝類として現在までに 5 種(本種、ソトオリガイ *Exolaternula lautaudi* (Mittre, 1844)、コオキナガイ *Laternula impura* (Pilsbry, 1901)、オキナガイ *Laternula anatina* (Linnaeus, 1758)、ヒロクチソトオリガイ *Laternula truncata* (Lamarck, 1818)) が知られているが、本種は他の 4 種と比べて著しく小型である。殻は白色で非常に薄く脆い。貝殻の外部形態では最もソトオリガイと近似するが、本種の殻は小型であることで容易に区別される。ソトオリガイの幼貝とも、本種の後端が細くなり鈍く尖るのに対して、ソトオリガイの後端は断裂状で細まらないので明確に区別できる。後端が細くなる点ではコオキナガイに近似するが、コオキナガイの殻は大型で、殻長に対する殻幅が大きく、外形は丸みを帯び、膨らみも強いので区別できる。なお、本種の殻表の微細構造(図 3)はオキナガイ科の他の 4 種とは大きく異なる。



田原市汐川河口, 2001 年 8 月 5 日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少したと考えられる。1990 年代に汐川干潟の汐川河口付近で発見され、長らく豊川河口域から汐川河口域までの三河湾東部の狭い範囲でのみ生息が確認されていた(木村, 2012)。その後、四国・瀬戸内海・九州西岸で生息が確認されている。三河湾西部や伊勢湾では詳細な調査を行っているにもかかわらず、本種の生息地は見つかっていない。

【世界及び国内の分布】

本州は未記載種であるので記録自体が少ないと考えられるが、南西諸島、韓国西部から南部(済州島を含む)、中国中部、台湾北部、フィリピン中部での調査では本種は見つからず(木村, 未発表資料)、貝類相の近似する中国(QI, 2004)、朝鮮半島(関, 2001)などの文献記録にも見あたらないので、日本固有種の可能性が高い。瀬戸内海・四国北部・九州西岸の内湾域で本種と同定できる種が採集されているが、正式な報告はない。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したように干潟の環境が悪化しているため、本種の生息場所、生息数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

本種はレッドデータブックあいち 2002 動物編ではコオキナガイと誤同定されて掲載された経緯がある。また、本種はレッドデータブックあいち 2009 動物編でオキナガイ属の 1 種 *Laternula* sp. として初めてその存在が明らかになり、環境省のレッドリストにもオキナガイ属の 1 種 *Laternula* sp. として掲載されている(環境省, 2018)。

本書で本種の和名を新称した。和名は、愛知県で有数の干潟である汐川干潟の保全活動に尽力された「汐川干潟を守る会」代表の故 小柳津 弘氏(2005 年 89 才にて永眠; 小柳津, 2012) に献名した。

【引用文献】

- 関德基, 2001. 新原色韓国貝類図鑑. 332pp. 関貝類博物館, 韓国.  
木村昭一, 2012. *Laternula* sp. オキナガイ属の 1 種, p. 169.in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.  
小柳津 弘, 2012. 汐川干潟の保護運動回想記. 315pp. 汐川干潟の保護運動回想記刊行委員会.  
QI Zhongyan, 2004. Seashells of China. 418 pp, 193 pls. China Ocean Press, Beijing. China.

(木村昭一)

キザミウロコガイ属の一種 *Galeomma* sp.

## 【選定理由】

2016年と2017年の6月に行われた佐久島(三河湾)調査での、愛知県初記録種である(早瀬・木村, 2020)。2018年6月に行われた日間賀島の調査でも、2例目の生息が確認された(早瀬・他, 2019)。現時点では、三河湾の湾奥～湾口にかけての中間的位置のみに確認され、分布域も狭い範囲に限定され、個体数密度もきわめて少ない種である。これまでに日本各地での分布が知られているが、愛知県下では、近年になって初めて存在が確認された種であるため、愛知県下での減少傾向は不明である。しかしながら、三河湾では、生息密度が低く、生息地も狭い範囲に限定されることから、本種は高いランクの絶滅危惧種と判断された。三河湾では、本種の分布域が潮通しの良い内湾環境に限られており、さらに、埋没石の下などの僅かな隙間の微環境下のみで生息することから、閉鎖的内湾での夏季の貧酸素水塊の発生や海域の富栄養化に伴う海底へのドロ化、浅海域の開発などの環境悪化も懸念されるため、絶滅の危険性を高く考慮すべき種である。

## 【形態】

殻長6.8～8.5 mm、殻高4.5～5.2 mm程度の丸みを帯びた長楕円形の小型種である。殻はきわめて薄く脆く、半透明白色。殻表は弱い成長線が見られるほか、微顆粒で覆われ磨りガラス様で、鈍い光沢を有する。生時は、外套膜が殻頂部以外の殻表の大部分を覆い、外套膜上には外套膜突起は認められない。外套膜上には有機物と思われる黄褐色の泥状の付着物を付ける。



西尾市佐久島, 2017年6月25日, 早瀬善正採集

## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

現時点では、佐久島と日間賀島の2島(三河湾)の潮間帯より生息記録が知られる(早瀬・木村, 2020; 早瀬・他, 2019)。

## 【世界および国内の分布】

国外での分布は明らかになっていないが、日本を中心とする温帯域の固有種と思われる。日本固有種の可能性も考えられる。三河湾のほか、瀬戸内海; 広島県(濱村, 2004)、相模湾; 神奈川県(内田, 2016)にも分布が知られている。

## 【生息地の環境／生態的特性】

愛知県内での本種の確認地の環境は、佐久島と日間賀島(三河湾)の潮間帯下部の転石地である。生息地周辺では陸域から淡水が滲出している例が確認される。本種は一般的な二枚貝と同様に、浮遊する有機体の懸濁物質(SS)を鰓の繊毛の動きで摂食すると考えられる。本種などが外套膜を発達させ、腹足類(巻貝類)の様に匍匐することは、外敵防御のための擬態の可能性が考えられている(大貫・早瀬, 2016; Ohtsuka et al., 2017)。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

現時点の愛知県内では、佐久島と日間賀島(三河湾)で確認されたのみである。埋没石の酸化鉄によると思われる茶褐色となる埋没面に、少数個体が付着するのが確認された。埋没石の埋没面が黒色の硫化物で覆われるような場所には確認されなかった。これまでの調査では、佐久島と日間賀島より生息が知られるが、湾奥および湾口では確認されていないので、三河湾の湾奥～湾口にかけての中間的位置(生息地の2島周辺)の転石地のみに生息が限定されるものと推測する。最近、愛知県下での存在が確認されたばかりの種であり、減少傾向が確認されていないが、生息場所はきわめて狭く局地的であり、周辺での環境の悪化や開発行為などがあれば直ちに個体群消滅につながる。

## 【保全上の留意点】

本種の生息が確認される地域の自然環境を維持することが重要である。

## 【特記事項】

近似する記載種が見当たらず、現時点では本種の学名が明らかになっていない。未記載種の可能性も考えられる。愛知県下では、これまでの調査により、三河湾の湾奥～湾口にかけて複数のウロコガイ上科貝類が微環境ごとに棲み分けをしているような分布状況が推察された。三河湾という一つの湾内で、同じグループ(ウロコガイ上科)の稀少貝類が、微環境ごとに出現種の変化を示すことは、生物面から見た環境指標ともなり得るので、本種をはじめとするウロコガイ上科は、各絶滅危惧種の生息環境の指標種としても、有効なグループの一つである。このような側面からも、三河湾での本種個体群の存在は重要であり、保護する必要がある。

## 【引用文献】

- 濱村陽一, 2004. 芸南の海産貝類図鑑, 222pp. 蘭島文化振興財団, 呉.  
 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相, ちりぼたん, 50(1): 33-79.  
 早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島(三河湾)の潮間帯貝類相, かきつばた, (44): 1-15.  
 Ohtsuka, S., Hasegawa, K., Kimura, T., Miyake, H., Kondo, Y., Iida, K., Pagliawan, H. & Metillo, E., 2017. Possible mimicry in the Galeommatid bivalves *Scintilla philippinensis* (Bivalvia: Galeommatidae) to nudibranchs and crabs. *Venus*, 75(1-4): 93-98.  
 大貫貴清・早瀬善正, 2016. 貝類, pp.194-231. in: 石川智士・吉川 尚(編), 幅豆の海と人びと, 口絵14+xvii+362pp.+v. 総合地球環境学研究所, 京都.  
 内田益次, 2016. 鎌倉市和賀江島に生息する貝類, かきつばた, (41): 42-45.

## 【関連文献】

- 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室(編), 2014. レッドデータブック2014 - 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - 6 貝類, 口絵8+xlxiii+455pp. ぎょうせい, 東京.

(早瀬善正)

ニッポンマメアゲマキ *Pseudogaleomma japonica* (A. Adams)

## 【選定理由】

愛知県内では近年、三河湾と知多湾で確認された。三河湾の梶島・佐久島のほか、知多湾の1箇所では比較的多くの個体が確認されたものの、愛知県下の他の多くの地域では確認されない。内湾域潮間帯の埋もれた石の下という特殊な生息環境のみに生息する希少な種である。近年になり、愛知県内における生息が知られた種であり、減少傾向は把握できないが、愛知県内では高度経済成長期に本種が生息できる良好な内湾環境や潮間帯の浅海域環境が埋め立てられ激減した。したがって、現状での本種の生息環境は愛知県内ではきわめて限られた場所のみである。

## 【形態】

殻長 10 mm 程度の細長い楕円形の殻を有する小型種である。殻の色彩には白と淡黄色の2型が見られる。生時は、殻を半開して埋没石の裏に足でしっかりと付着している。殻は白色半透明の外套膜で完全に覆われ、外套膜上には2種類の形状の異なる短い突起が多数突出するので、一見、二枚貝には見えない形状である。

## 【分布の概要】

## 【県内の分布】

愛知県内では、前島・梶島・佐久島(三河湾)(早瀬・他, 2015, 2016; 早瀬・木村, 2020)と河和(知多湾)(早瀬・木村, 2017)で確認されている。潮間帯下部の埋没石の下より確認されている。

## 【世界および国内の分布】

房総・男鹿半島～九州、朝鮮半島に分布。沖縄島や中国大陸沿岸にも近似した種が分布しているが、比較検討が進んでおらず、詳しい分布範囲は不明とされる(山下, 2012)。

## 【生息地の環境／生態的特性】

内湾域の潮間帯に生息する。埋没石の裏に足でしっかりと付着している。周辺が還元層となる環境に生息する。本種の生態的特性として、周囲が還元環境でありながら、淡水が滲出しているために酸素や海水の循環があるきわめて特殊な微環境のみに生息している。繁殖に関しては、成貝が直接D型幼生を産出する。三河湾では湾口部の外洋要素の特に強い環境及び泥干潟になるような潮通しの悪い湾奥には生息せず、それらの中間的な位置の、潮通しの良い内湾環境の転石地のみに生息する種と考えられる。

## 【現在の生息状況／減少の要因】

内湾域の潮間帯下部の埋没石の下に生息する。愛知県内では一部の場所においては、比較的多くの個体の生息が確認されており、健全な個体群が維持されているものと推測する。しかし、このような場所はごく稀な例であり、愛知県内で本種が確認されること自体稀である。愛知県内では、本種が生息可能な良好な内湾環境や潮間帯の環境が高度経済成長期に激減した。

## 【保全上の留意点】

現状の生息地も小規模の改変行為で消滅するようきわめて狭い区域であり、個体群の存続が危惧される。本種の健全な生息地の改変行為を行わないことが重要である。

## 【特記事項】

本種をはじめ、埋没石下の特殊生息環境に棲む種が確認される場所には、他の希少な種も多種共存しており、きわめて多様性の高いホットスポットとなっている。単に特定の種を評価対象種に位置付けるのみではなく、これらの種の生息する環境と貝類相を合わせ「特殊環境貝類保護地」に指定するなど、今後は、環境を含む包括的な保護を考える必要がある。

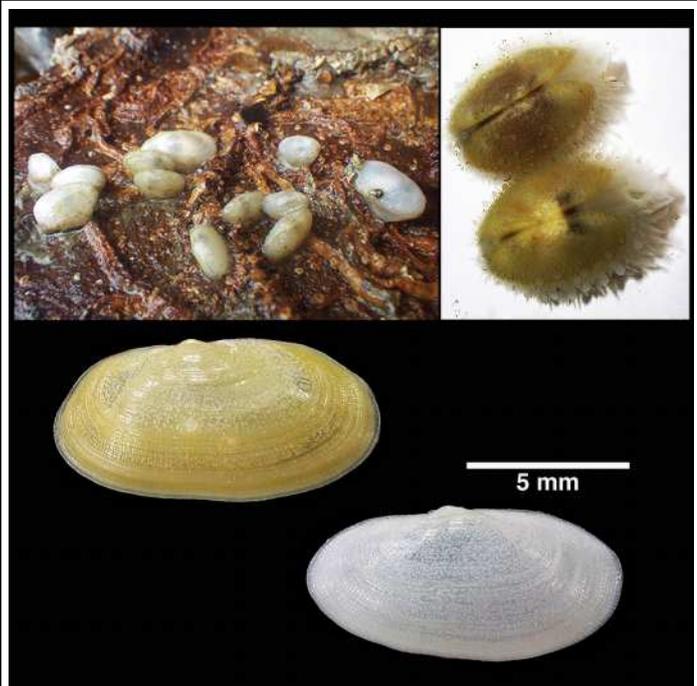
## 【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一, 2017. 河和(三河湾)の内湾潮間帯の貝類相, ちりぼたん, 47(1-4): 28-42.  
 早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相, ちりぼたん, 50(1): 33-79.  
 早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林 誠司・西 浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島(三河湾)の潮間帯貝類相, かきつばた, (41): 27-39.  
 早瀬善正・大貫貴清・吉川 尚・松永育之・社家間太郎, 2015. 前島(三河湾)の転石地潮間帯の貝類相 - 特徴的な16種の記録, ちりぼたん, 45(3): 105-122.  
 山下博由, 2012. ニッポンマメアゲマキ, p.159. in: 日本ベントス学会(編), 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285 pp. 東海大学出版会, 秦野市.

## 【関連文献】

兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課(編), 2014. 兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック 2014(貝類・その他無脊椎動物), 128 pp. 公益財団法人ひょうご環境創造協会, 神戸市.

(早瀬善正)



西尾市佐久島, 2016年6月4日, 早瀬善正採集

ツヤマメアゲマキ *Scintilla nitidella* Habe

【選定理由】

愛知県内では近年、三河湾と知多湾の各1箇所で確認されたのみである。確認個体数は、いずれの地域においても少ない。内湾域潮間帯の埋もれた石の下という特殊な生息環境のみに生息する希少な種である。最近、愛知県内における生息が知られたばかりの種であり、減少傾向は把握できないが、県内では本種が生息する良好な内湾環境や潮間帯の転石地環境が高度経済成長期に激減したため、本種の生息環境はきわめて限られていることが推測できる。

【形態】

殻長 6.6 mm 程の小型種である。殻は白色半透明できわめて薄く、殻表は平滑で鈍い光沢がある。生時は、軟体(外套)が殻を包み込み、先端部のみ黄橙色の長い突起が伸びる。本種の活動時は、腹足類(巻貝類)のように足で匍匐するので、一見すると、ミノウミウシ類の様である。オウギウロコガイの軟体の特徴も似るが、突起先端の色彩が異なるほか、本種の突起の方が長く、数も多い。

【分布の概要】

【県内の分布】

愛知県内では、前島(三河湾)(早瀬・他, 2015)と河和(知多湾)(早瀬・木村, 2017)のみで確認されている。内湾潮間帯転石地の埋没石の下より確認されている。

【世界および国内の分布】

国内のみに分布が知られており、陸奥湾～九州に分布とされている(波部, 1977)。

【生息地の環境／生態的特性】

内湾環境の、潮間帯の埋もれた石の下に付着して生息する。周辺が還元環境となり、かつ淡水が滲出する特殊な埋没石下の微環境のみに生息する。オウギウロコガイとは同一の転石に並んで付着する場合もあり、同所分布する。生時のミノウミウシ類に似た軟体の特徴や動きは、外敵防御のための擬態と考えられている(大貫・早瀬, 2016; Ohtsuka et al., 2017)。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県内では、限られた内湾環境の狭い範囲のみに生息している。特殊なマイクロハビタット(微生息環境)のみに生息する種と考えられる。したがって、内湾環境の開発が進んだ愛知県内においては、本種の生息環境は減少した可能性が高い。本種の生息には、きわめて多様性に富んだ内湾潮間帯の環境が保全・維持されてゆくことが必要である。

【保全上の留意点】

本種の生息環境を維持するためには、内湾環境自体の保全と維持が必要であるが、それと共に、潮間帯の転石地環境や藻場、アマモ場環境など様々な相互関係を持つマイクロハビタット(微生息環境)をも保全・維持することがきわめて重要である。

【特記事項】

本種をはじめ、埋没石下の特殊生息環境に棲む種が確認される場所には、他の希少な種も多種共存しており、きわめて多様性の高いホットスポットとなっている。単に特定の種を評価対象種に位置付けるのみではなく、これらの種の生息する環境と貝類相を合わせ「特殊環境棲貝類保護地」に指定するなど、今後は、環境を含む包括的な保護を考える必要がある。

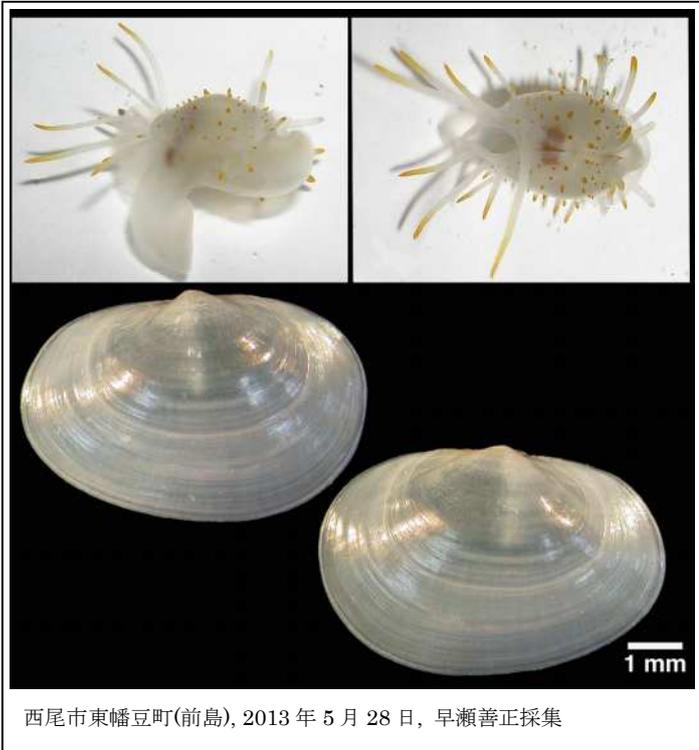
【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一, 2017. 河和(三河湾)の内湾潮間帯の貝類相, ちりぼたん, 47(1-4): 28-42.  
早瀬善正・大貫貴清・吉川 尚・松永育之・社家間太郎, 2015. 前島(三河湾)の転石地潮間帯の貝類相 - 特徴的な16種の記録, ちりぼたん, 45(3): 105-122.  
波部忠重, 1977. 日本産軟体動物分類学 二枚貝綱/堀足綱, 372 pp. 図鑑の北隆館, 東京.  
Ohtsuka, S., Hasegawa, K., Kimura, T., Miyake, H., Kondo, Y., Iida, K., Pagliawan, H. & Metillo, E., 2017. Possible mimicry in the Galeommatid bivalves *Scintilla philippinensis* (Bivalvia: Galeommatidae) to nudibranchs and crabs. *Venus*, 75(1-4): 93-98.  
大貫貴清・早瀬善正, 2016. 貝類, pp.194-231. in: 石川智士・吉川 尚(編), 幡豆の海と人びと, 口絵14 + xvii + 362pp.+ v. 総合地球環境学研究所, 京都.

【関連文献】

- 兵庫県農政環境部環境創造局自然環境課(編), 2014. 兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック 2014(貝類・その他無脊椎動物), 128 pp. 公益財団法人ひょうご環境創造協会, 神戸市.

(早瀬善正)



西尾市東幡豆町(前島), 2013年5月28日, 早瀬善正採集

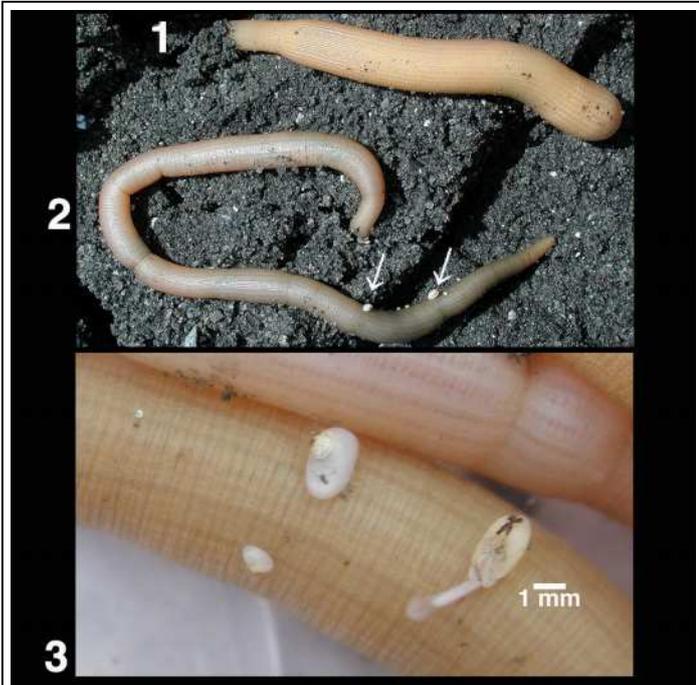
スジホシムシモドキヤドリガイ *Nipponomysella subtruncata* (Yokoyama)

【選定理由】

本種は、内湾河口域の砂泥干潟の底質中に深く潜って生息するスジホシムシモドキ (環形動物；図 2) の体表に付着して生息する微小な二枚貝 (図 2 に矢印で示す)。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種と共生関係にあるスジホシムシモドキの生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。本種がスジホシムシモドキの体表に付着している割合は通常 1 割程度 (木村, 2004) で、結果として県内では生息地も個体数も少なく、希少な貝類である。引き続き、絶滅の可能性が高い種であると評価された。

【形態】

殻長 2-4 mm 程度で殻は白色で楕円形、殻頂部は後端にある。殻は薄く、殻表は平滑。



1: スジホシムシ, 2: スジホシムシモドキ, 3: スジホシムシモドキヤドリガイ, 蒲郡市三谷地先人工干潟, 2005年7月21日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

渥美半島北側の三河湾で 2 地点 (愛知県, 2005; 木村, 2004)、蒲郡市三谷地先人工干潟 (木村, 2004) で確認されたが、2004 年以降生息が確認されていない。その後、西尾市旧幡豆町 (早瀬・他, 2011)、近年の三河湾の島嶼域の調査で、沖島 (早瀬・他, 2015)、佐久島 (早瀬・木村, 2020) でも生息が確認されたが、生息地点数、個体数ともに少ない。

【世界及び国内の分布】

日本でのみ記録されている。国内では浜名湖～九州、南西諸島に分布する (木村・久保, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

本種はスジホシムシヤドリガイ、スジホシムシノヤドリガイなどの和名で呼ばれたこともあるが、本種のホストはスジホシムシ (図 1) ではなく、スジホシムシモドキ (図 2) なので、スジホシムシモドキヤドリガイ (稲葉, 1982) が本種の生態を的確に表す和名として採用された (木村, 2012)。

【引用文献】

- 愛知県, 2005. 沿岸生態系保全の考え方-干潟生態系を中心として-。  
早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川 尚・松浦弘行・石川智士, 2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告 (32): 1-33.  
早瀬善正・木村昭一・大貫貴清, 2015. 沖島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相. かきつばた, (40): 23-30.  
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相. ちりばたん, 50 (1): 33-79.  
稲葉明彦, 1982. 瀬戸内海の貝類. 181pp. 広島貝類談話会, 広島.  
木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, (30): 14-20.  
木村昭一, 2005. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相 続報. かきつばた, (31): 29-31.  
木村昭一・久保弘文, 2012. スジホシムシモドキヤドリガイ, p. 161.in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野。

(木村昭一)

マツモトウロコガイ *Paraborniola matsumotoi* Habe

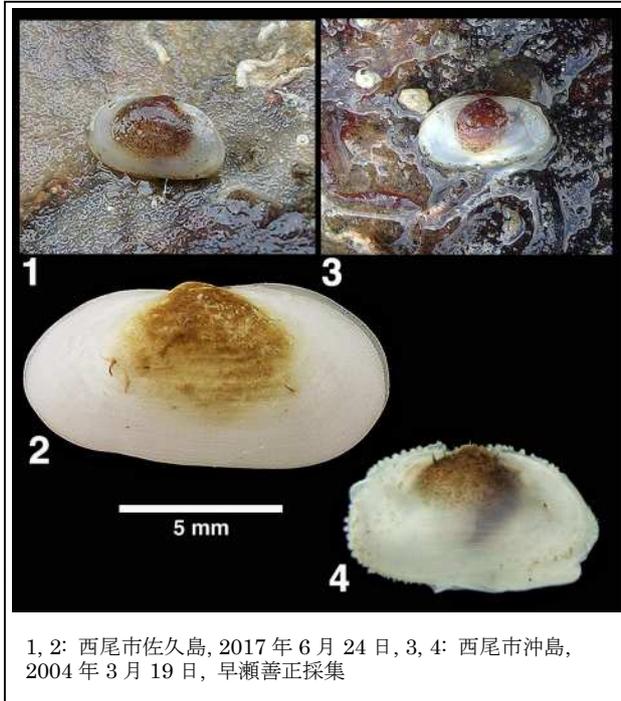
【選定理由】

本種は、県下では沖島で初めて生息が確認された(早瀬・他, 2015)。その後、佐久島(早瀬・木村, 2019)、日間賀島(早瀬・他, 2019)で生息が確認されているが、生息環境の特殊さもあり、生息場所の面積は小さく、個体数も少ない。

近年、伊勢湾、三河湾の外洋水の影響が強い潮通しの良い浅海域の一部では、窒素・リンの流入負荷減少に伴う水質及び底質環境の明らかな改善傾向が認められるようになり(早瀬・木村, 2017)、本種の生貝が確認できるようになったと考えられる。しかし、本種は潮間帯の深く埋もれた埋もれ石(埋没石)の下面に固着して生息する小形の二枚貝で、水質汚濁、底質環境の泥質化、有機物量の増加、貧酸素の発生等により生息基盤が脅かされる種と考えられる。また本種の生息地数、個体数は少なく、絶滅の危険性が高い種と評価された。

【形態】

殻長 10 mm 前後までに成長するが、7 mm 前後の個体が多い。殻は長方形に近い楕円形で、殻質は薄くもろく、殻の膨らみはやや強い。殻は白色で半透明であるが、殻頂部はほとんどの個体で硫化物の影響か茶褐色に着色する。生時は両殻を閉じたまま、腹縁部で付着面に接している。軟体部(外套膜)は白色で、細かい顆粒状の突起が多数あるが、殻全体を覆うことはなく、外縁部をわずかに覆っている。殻頂部が着色する(固着性のゴカイ類の棲管などが付着する場合もある)のは外套膜で覆われていないことが関係するのかもしれない。



1, 2: 西尾市佐久島, 2017年6月24日, 3, 4: 西尾市沖島, 2004年3月19日, 早瀬善正採集

【分布の概要】

【県内の分布】

前述のように県内では近年3ヶ所(いずれも潮間帯)で生息が確認されているが、どの生息地でも個体数は少ない。

【世界および国内の分布】

本種は中国大陸(QI, 2004)、朝鮮半島(関, 2001)でも記録されておらず、日本固有種の可能性があり、房総半島、男鹿半島から九州西岸まで分布する(山下・木村, 2012)。近年国内で本種の生息が確認されているのは、浜名湖、伊勢湾湾口(三重県)、英虞湾、和歌山県、淡路島(兵庫県)、広島県、伊予灘、豊後水道、唐津湾、伊万里湾、佐世保市などである(山下・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は、外洋水の影響のある潮通しの良い内湾から湾口部の、潮間帯中部から潮下帯の深く埋もれた埋もれ石の下面に固着して生息する。生態的特性はほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在、県下では生息海域は限定的で、生息地点数も多くない。上述のような本種の生息環境自体が消失したことが一番大きな要因と考えられる。

【保全上の留意点】

本種のような特殊生息環境に生息する貝類の多様性の高い海域が、近年県下でも見つかっているが、三河湾湾口部においても無酸素水域が拡大した1990から2000年にかけては、三河湾湾口部(一部伊勢湾を含む)で行った潮下帯も含めた海産貝類の調査(木村, 1995, 1996, 2000)でもこのような生息地は発見できなかったため、本種のモニタリングは重要である。また、本種が生息できるような生息環境を保全することが特殊生息環境に生息する貝類群集の多様性保全にとっても不可欠である。

【特記事項】

本種のタイプ産地は岡山県牛窓町(瀬戸内海)である(山下・木村, 2012)。

【引用文献】

関德基, 2001. 新原色韓国貝類図鑑. 332pp. 関貝類博物館, 韓国.

早瀬善正・木村昭一・大貫貴清, 2015. 沖島(三河湾)の転石地潮間帯の貝類相. かきつばた, (40): 23-30.

早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. ちりばたん, 50(1): 33-79.

早瀬善正・木村昭一・西浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島(三河湾)の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15.

木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 水産教育研究彙報第34報, pp. 1-12. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 水産教育研究彙報第35報, pp. 1-19. 全国高等学校水産教育研究会.

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26), 18-20.

QI Zhongyan, 2004. Seashells of China. 418 pp, 193 pls. China Ocean Press, Beijing, China.

山下博由・木村昭一, 2012. マツモトウロコガイ, p.161. in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

## サギガイ *Rexithaerus sector* (Ôyama)

### 【選定理由】

本種は湾口部から外洋に面した海岸の潮下帯の砂泥底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種もかつては知多半島伊勢湾側、渥美半島外海側で多くの死殻が打ち上げられていたが、1990年前後からその個体数が激減している。1999年から3回(30地点以上)にわたり知多半島伊勢湾側から三河湾湾口部をドレッジにより調査したが、生貝は採集されず、少数の死殻が採集されたにすぎない(木村, 2000; 木村, 未発表資料)。絶滅の可能性が高い種であると評価された。



南知多町内海沖(ドレッジ水深 2-5 m), 2015年9月22日,  
木村昭一採集

### 【形態】

殻長約 50 mm で、殻は卵形で膨らみは弱く扁平。殻質はやや薄く、白色で殻表には光沢がある。後背縁は張り出して左にねじれる。

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少している。現在、合弁の死殻が採集される海域も知多半島南部(伊勢湾側)の一部に限られ、危機的生息状況である。渥美半島外洋側では底引き網や打ち上げられて死殻が採集されるので、外洋側に生息域が存在する可能性がある。

#### 【世界及び国内の分布】

日本、サハリン、朝鮮半島、中国大陸、国内では北海道～九州まで分布する(木村・福田, 2012)。

### 【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は悪化しているので、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。

### 【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

### 【引用文献】

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

木村昭一・福田 宏, 2012. サギガイ, p. 123.in : 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

(木村昭一)

オチバガイ *Gari chinensis* (Deshayes)

【選定理由】

本種は内湾河口域の砂泥干潟に生息する。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。本種は瀬戸内海の一部に健全な生息場所が確認されているほかは、分布全域で生息場所が減少している (和田・他, 1996)。伊勢湾の三重県側では比較的普通に死殻が打ち上げられ、健全な個体群も確認されている。県内の伊勢湾や三河湾では、死殻の確認も稀で、矢作川河口 (川瀬, 2002)、蒲郡市三谷地先人工干潟 (木村, 2005) で少数の生貝採集記録がある。現在、生息地は非常に少なく、個体数も少ない。今回も絶滅が危惧される種と評価された。



蒲郡市三谷地先人工干潟, 2005年7月21日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約 40 mm で殻は前後に長い楕円形。殻はやや薄く、殻表は平滑で、褐色の厚い殻皮に覆われている。

【分布の概要】

【県内の分布】

近年、知多市新舞子 (早瀬, 2013)、矢作川河口や蒲郡市で生息が確認されているが、生息地点数、個体数とも著しく少ない。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸 (広東省)、海南島、台湾、フィリピン、国内では東京湾・若狭湾～九州まで分布する (福田・木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているため、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 福田 宏・木村昭一, 2012. オチバ (コムラサキガイ), p. 134.in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.  
早瀬善正, 2013. 愛知県におけるスナガイの新産地, かきつばた, (38): 53-55.  
川瀬基弘, 2002. 矢作川河口域における干潟の底生動物相. 矢作川研究, (6): 81-98.  
木村昭一, 2005. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相 続報. かきつばた, (31): 29-31.  
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

ムラサキガイ *Hiatula adamsii* (Reeve)

【選定理由】

本種は内湾から湾口部にかけての砂泥干潟から潮下帯に生息する。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているの、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。県内の伊勢湾や三河湾では、1980年代後半から2000年にかけて生貝はおろか、死殻さえ非常に稀であった。2006年、蒲郡市三谷地先人工干潟で1個体のみ生貝が採集された。その後2010年頃より、三河湾、伊勢湾で本種の回復傾向が確認され、生貝の採集例は少ないが、合弁の殻皮の保存された死殻が数地点で確認されている。前回(EN)よりランクダウンすべき種と評価された。



蒲郡市三谷地先人工干潟, 2005年7月21日, 木村昭一採集

【形態】

殻長約8 cm、殻は大型で前後に長い楕円形。殻はやや薄く、濃い紫色。殻表は平滑で、褐色の厚い殻皮に覆われている。

【分布の概要】

【県内の分布】

生息が確認できない期間が長く続いたが、近年生貝が確認できるようになり、数カ所の生息地では死後間もない殻が普通に採集されるようになった。しかし、依然として生息地は多くはなく、限定される。

【世界及び国内の分布】

日本、台湾、インドネシア、国内では房総半島～九州に分布する(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも著しく減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

木村昭一, 2012. ムラサキガイ, p. 134.in : 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.

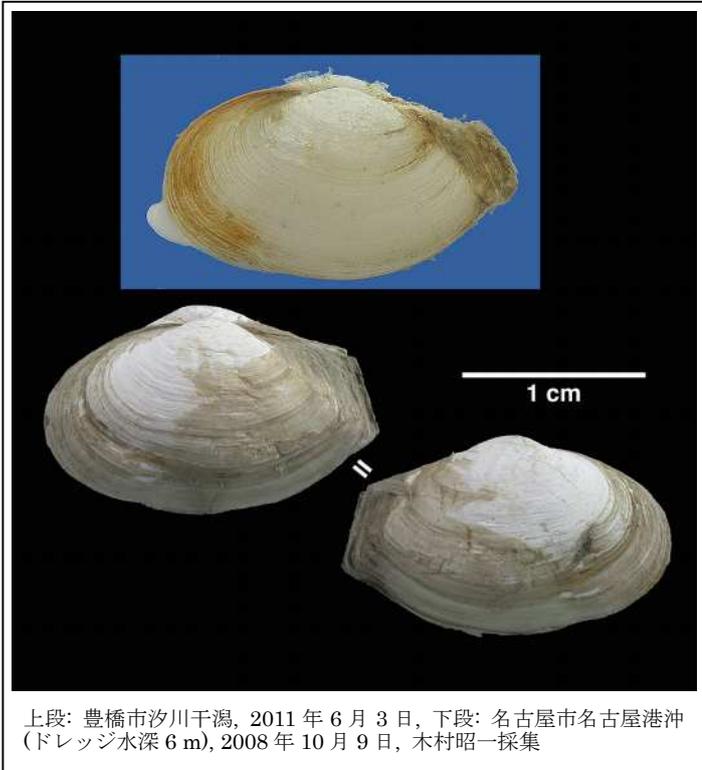
和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3, 182 pp.

(木村昭一)

## ヒメマスオガイ *Cryptomya busoensis* Yokoyama

### 【選定理由】

本種は、内湾から湾口部にかけての干潟から潮下帯の砂泥底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、本種も三河湾湾口部、伊勢湾知多半島沖 (木村, 1996: 木村, 2000)、蒲郡市三谷地先人工干潟 (木村, 2004) で死殻が少数採集されたが、生貝が確認されていなかった。その後 2008 年に名古屋港沖で生貝が少数採集され (木村, 2010)、2010 年頃から汐川干潟でも生貝が確認できるようになり、近年の三河湾内の調査では、沖島 (早瀬・他, 2015a)、日間賀島 (早瀬・他, 2019) において生貝が確認されている。明らかな回復状況が確認されたので、前回 (CR) よりランクダウンするべき種と評価された。



上段：豊橋市汐川干潟，2011年6月3日，下段：名古屋市名古屋港沖 (ドレッジ水深6m)，2008年10月9日，木村昭一採集

### 【形態】

殻長約 20 mm で、殻は卵形で膨らみはやや強い。殻は白色で薄く脆い。殻の後端は裁断状で開く。

### 【分布の概要】

#### 【県内の分布】

1990 から 2005 年頃まで生貝が確認できなかったが、近年伊勢湾、三河湾で生貝が採集されるようになった。しかし、依然として生息地、個体数は非常に少ない。

#### 【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸、国内では北海道～九州まで分布する (木村, 2012)。

### 【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

### 【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟から潮下帯の環境は破壊されているので、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。

### 【保全上の留意点】

内湾の潮下帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

### 【特記事項】

本種はレッドデータブックなごや 2004 (木村, 2004) では名古屋港沖の本種の生貝標本が図示されたが、レッドデータブックなごや 2015 (木村 加筆 川瀬, 2015) では中部更新統の化石標本が図示された。その地で採集された貝類の画像はレッドデータブックの重要な資料 (データ) の一つなので、他産地の標本はなるべく使用しないことが望ましい。ましてや、図示された化石は現生の生貝とは形態が異なるので掲載するべきではない。

### 【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一・大貫貴清, 2015. 沖島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相. かきつばた, (40): 23-30.  
早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島 (三河湾) の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15.  
木村昭一, 1996. ドレッジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.  
木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.  
木村昭一, 2004. 蒲郡市三谷町人工干潟の貝類相. かきつばた, (30): 14-20.  
木村昭一, 2010. ヒメマスオ, p. 201.in: レッドデータブックなごや 2010 (2004 年版補遺), 316pp.名古屋環境局.  
木村昭一, 2012. ヒメマスオ, p. 166.in: 日本ベントス学会 (編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.  
木村昭一 加筆 川瀬基弘, 2015. ヒメマスオ, p. 415.in: レッドデータブックなごや 2015 動物編, 503pp.名古屋環境局. (木村昭一)

クシケマスオガイ *Cryptomya elliptica* (A. Adams)

【選定理由】

本種は内湾の砂泥干潟に生息する。県内でも干潟という生息環境自体が護岸工事や埋め立てで著しく減少しているため、本種の生息地、個体数とも著しく減少したと考えられる。本種は潮間帯から潮下帯の砂泥底に生息するアナジャコ下目の巣穴を利用している(木村, 2012)。かつては伊勢湾周辺の海岸に死殻が多く打ち上げられ、生貝も普通であったが、1980年から2000年にかけて生息場所、個体数とも激減し、三重県側の伊勢湾では死殻が打ち上げられて採集される場所が比較的多かったものの、県内側の伊勢湾や三河湾では死殻が採集できる場所も確認できなかつた。2008年に名古屋港沖で合弁の死殻が採集され(木村, 2010)、2008年2月には知多半島内海海岸で、軟体部が入った本種が寒波により約20個体が打ち上げられた。その後も知多半島南部の伊勢湾側では数カ所で生貝が継続して確認されている(佐藤・他, 2019; 木村, 未発表資料)。明らかな回復状況が確認されたので、前回(EN)よりランクダウンするべき種と評価された。



南知多町内海海岸(伊勢湾), 2008年2月16日, 木村昭一採集(打ち上げられた生貝)

【形態】

殻長約20 mmで、殻は卵形で膨らみは弱い。殻は白色で殻質は薄く、殻表には細い放射肋が密に走る。

【分布の概要】

【県内の分布】

近年、内海海岸など知多半島南部の伊勢湾側で生息が継続的に確認されている。

【世界及び国内の分布】

日本、インド洋、太平洋、紅海、国内では伊勢湾～九州、南西諸島に分布する(木村, 2012)。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような干潟の環境は破壊されているため、本種の生息場所、個体数とも減少したと考えられる。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【引用文献】

- 木村昭一, 2010. クシケマスオ, p. 202.in: レッドデータブックなごや2010(2004年版補遺), 316pp. 名古屋市環境局.  
木村昭一, 2012. クシケマスオ, p. 166.in: 日本ベントス学会(編) 干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブック, 285pp. 東海大学出版会, 秦野.  
佐藤大義・浅田 要・永井 僚, 2019. 南知多町内海海岸(伊勢湾)の貝類相. かきつばた,(44): 20-30.

(木村昭一)

クチベニガイ *Corbula erythrodon* Lamarck

【選定理由】

本種は湾口部から外洋に面した海岸の潮間帯から潮下帯の砂底に生息する。県内では内湾域の潮下帯の環境は上部の干潟の破壊や浚渫、貧酸素水塊の発生、水質汚濁などで急速に悪化していて、この生息帯の貝類相が著しく単純化している。本種も明らかに生息場所、個体数とも激減している。かつては知多半島伊勢湾側、渥美半島外海側で新鮮な死殻が比較的多く打ち上げられていたが、近年はほとんど採集することができない。1999年からの3回(30地点以上)、知多半島伊勢湾側から三河湾湾口部の海域をドレッジにより調査した。その結果、知多半島伊勢湾側の水深5-10 mの砂底より多くの生貝が採集されたが、その範囲は狭く、その他の海域では死殻さえ採集されなかった(木村, 2000; 木村, 未発表資料)。その後2015年に同海域で同様な生息状況が確認され、絶滅の可能性が高い種であると評価された。



南知多町内海沖(ドレッジ水深2-5 m), 2015年9月22日,  
木村昭一採集

【形態】

殻長約25 mmで、殻質は極めて厚く、右殻はよく膨らむ。殻表には低い輪肋があり、右殻は左殻より大きい。殻の表面は白色で、内面は淡黄色で周縁は和名の由来となっているように濃い赤紫色。

【分布の概要】

【県内の分布】

上述したように、生息場所、個体数が減少し、生貝が多産する範囲は非常に狭い。

【世界及び国内の分布】

日本、朝鮮半島、中国大陸。国内では房総半島から九州まで分布する。

【生息地の環境／生態的特性】

【選定理由】の項参照。

【現在の生息状況／減少の要因】

上述したような潮下帯の環境は悪化しているため、本種の生息場所、個体数とも激減したと考えられる。生貝は透水性の高い潮下帯(水深約10 mまで)の砂底に限定され、生息範囲が非常に狭い。

【保全上の留意点】

内湾の潮間帯の環境を保全する。干潟の保全や、内湾域の水質の富栄養化を防止することが不可欠である。

【特記事項】

本種は外洋水の影響が強く有機質が少ない透水性の高い潮下帯の砂底に生息し、有機質が堆積し泥質化すると個体数が著しく減少するので、透水性の高い砂底の指標種と言えるかも知れない。

【引用文献】

木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレッジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20.

(木村昭一)